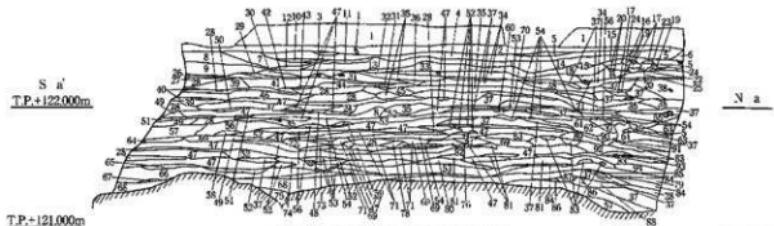
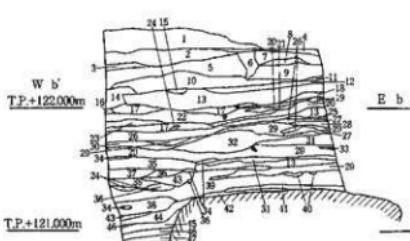


第41図 シショツカ古墳全体図 (1/250)



第3段 西側盛土および南北断面図

1. 黄褐色(7.5YR 5/2)砂質土(膠土)	39. にじみ黄褐色(10YR 4/1)砂質土(細かく含む)
2. 黄褐色(7.5YR 6/1)砂質土(膠土)	40. 黄褐色(7.5YR 6/1)砂質土(細かく含む)
3. 黄褐色(7.5YR 6/1)砂質土	41. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土(細かく含む)
4. 黄褐色(10YR 5/1)粘質土(膠化物含む)	42. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
5. 深褐色(10YR 5/1)粘質土(膠化物含む)	43. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
6. 深褐色(10YR 5/1)粘質土(膠化物含む)	44. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
7. 黄褐色(10YR 5/1)粘質土(膠化物含む)	45. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
8. にじみ黄褐色(10YR 5/1)砂質土	46. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
9. 黄褐色(10YR 5/1)砂質土(膠化物含む)	47. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
10. 深褐色(10YR 5/1)粘質土(膠化物含む)	48. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
11. 黄褐色(10YR 5/1)砂質土	49. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
12. 黄褐色(10YR 5/1)砂質土	50. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
13. 黄褐色(10YR 4/1)粘質土(膠化物少量含む)	51. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
14. 黄褐色(10YR 4/1)粘質土	52. 黄褐色(7.5YR 4/1)砂質土
15. 黄褐色(10YR 4/1)粘質土	53. ナチュラルベニス(10YR 5/1)砂質土
16. 黄褐色(10YR 5/1)砂質土	54. 黄褐色(10YR 4/1)砂質土
17. 深褐色(10YR 5/1)粘質土	55. 黄褐色(10YR 5/1)砂質土
18. 黄褐色(10YR 5/1)粘質土(膠化物含む)	56. 黄褐色(10YR 5/1)砂質土(細かく含む)
19. 黄褐色(10YR 5/1)粘質土	57. 黄褐色(7.5YR 4/1)砂質土
20. 暗褐色(10YR 4/1)粘質土(膠化物含む)	58. 黄褐色(7.5YR 4/1)砂質土(細かく含む)
21. 黄褐色(5YR 6/2)砂質土	59. にじみ黄褐色(10YR 4/1)砂質土(細かく含む)
22. 明黄色(10YR 6/0)砂質土	60. にじみ黄褐色(10YR 4/1)砂質土(細かく含む)
23. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	61. 黄褐色(10YR 5/1)砂質土(細かく含む)
24. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	62. 黄褐色(7.5YR 4/1)砂質土
25. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	63. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
26. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	64. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
27. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	65. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
28. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	66. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
29. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	67. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
30. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	68. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
31. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土(細かく含む)	69. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土(細かく含む)
32. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	70. 暗褐色(10YR 4/1)砂質土(細かく含む)
33. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	71. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
34. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	72. にじみ黄褐色(10YR 6/0)砂質土
35. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	73. 透褐色(7.5YR 4/1)砂質土
36. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	74. 暗褐色(7.5YR 4/1)砂質土(細かく含む)
37. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	75. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
38. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	76. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
39. 明黄色(10YR 6/0)砂質土	77. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
40. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	78. 明黄色(10YR 6/0)砂質土(細かく含む)
41. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	79. 明黄色(10YR 6/0)砂質土(細かく含む)
42. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	80. にじみ黄褐色(10YR 6/0)砂質土(細かく含む)
43. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	81. にじみ黄褐色(10YR 6/0)砂質土
44. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	82. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
45. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	83. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
46. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	84. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土(細かく含む)
47. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	85. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
48. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	86. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
49. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	87. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
50. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土	88. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土

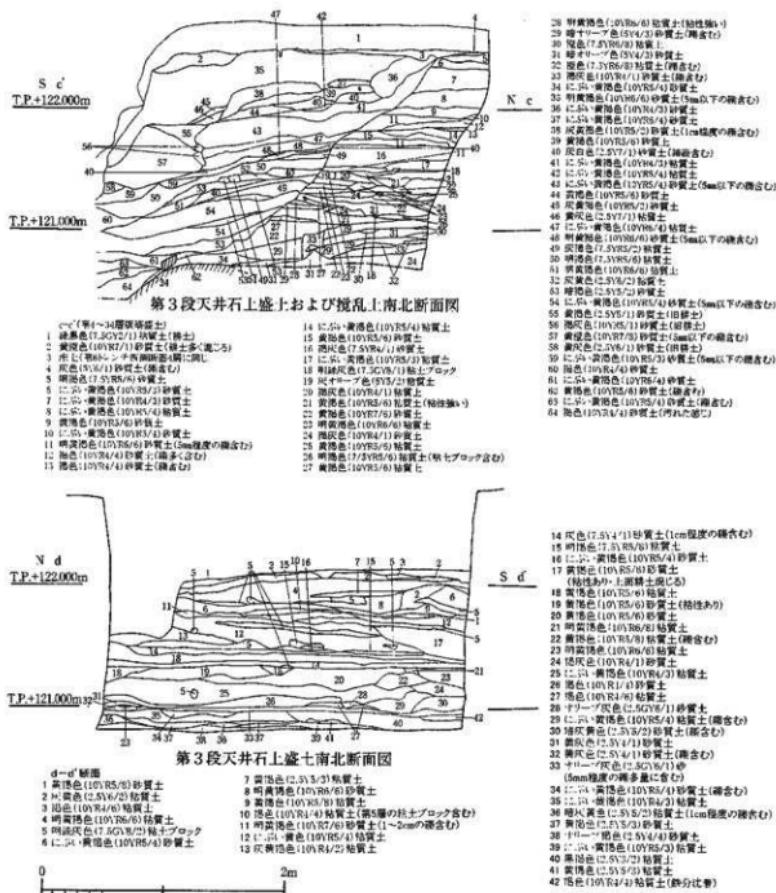


第3段 天井石上盛土東西断面図

1. 黄褐色(7.5YR 5/2)砂質土(膠土)	36. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
2. 黄褐色(7.5YR 6/1)砂質土(膠土)	37. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
3. にじみ黄褐色(10YR 5/1)砂質土	38. 黄褐色(7.5YR 6/1)砂質土(少し粘性あり)
4. 深褐色(10YR 5/1)粘質土(西側斜面地盤に限る)	39. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
5. 黄褐色(10YR 5/1)粘質土(西側斜面地盤に限る)	40. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土(細かく含む)
6. 黄褐色(10YR 5/1)粘質土(西側斜面地盤に限る)	41. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
7. にじみ黄褐色(10YR 5/1)砂質土	42. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
8. にじみ黄褐色(10YR 5/1)砂質土(汚れた感)	43. 明黄色(10YR 6/0)砂質土
9. 黄褐色(10YR 5/1)粘質土(西側斜面地盤に限る)	44. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
10. にじみ黄褐色(10YR 5/1)砂質土	45. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
11. 暗褐色(7.5YR 5/1)砂質土	46. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
12. 稲庭 肥育地(5YR 6/2)砂質土(膠化物含む)	47. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
13. 黄褐色(10YR 5/1)砂質土	48. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
14. 黄褐色(10YR 5/1)砂質土	49. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
15. 明黄色(10YR 5/1)砂質土	50. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土(汚れた感)
16. 黄褐色(10YR 5/1)砂質土	51. 明黄色(10YR 6/0)砂質土
17. 黄褐色(10YR 5/1)砂質土	52. 男爵褐色(7.5YR 6/1)砂質土
18. 黄褐色(10YR 5/1)砂質土(礁多く含む)	53. にじみ黄褐色(10YR 6/0)砂質土
19. 黄褐色(10YR 5/1)砂質土(胶化物含む)	54. 透褐色(7.5YR 6/1)砂質土
20. にじみ黄褐色(10YR 5/1)砂質土	55. 透褐色(7.5YR 6/1)砂質土
21. 黄褐色(10YR 5/1)砂質土	56. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
22. にじみ黄褐色(10YR 5/1)砂質土(礁多く含む)	57. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
23. 黄褐色(10YR 5/1)砂質土(礁多く含む)	58. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
24. 黄褐色(10YR 5/1)砂質土	59. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土
25. 黄褐色(10YR 5/1)砂質土	60. 黄褐色(10YR 6/0)砂質土



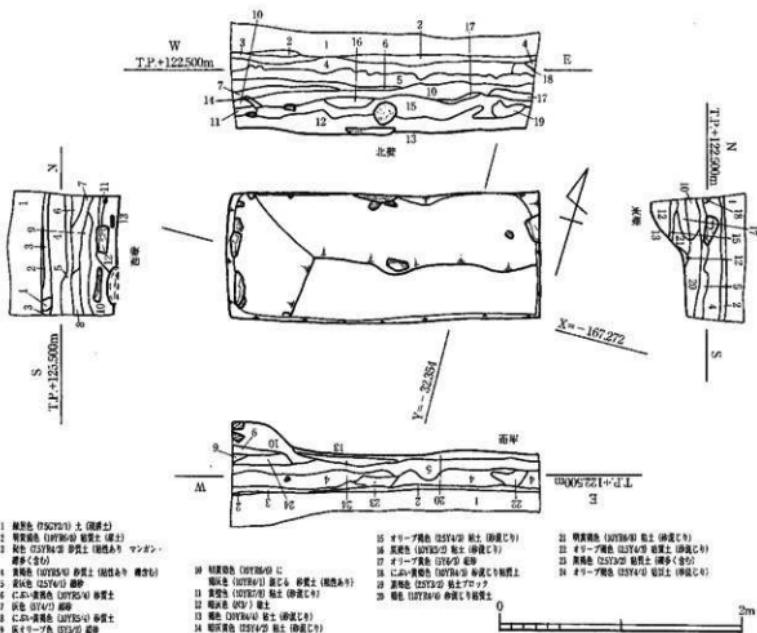
第42図 塙丘盛土断面図（1）(1/40)



第43図 墳丘盛土断面図 (2) (1/10)

しかしこれらの礫粒が認められるのは、特に天井石直上に限っている。このようにして締まりのある比較的硬い墳丘が構築されている。この版築状の盛土の1層（第31層）から器種は不明であるが須恵器細片が出土している。

西側では第2段の上に2.0～5.0cmの礫を含んで東から西へ流れるように堆積する褐色土の溜まり（第7トレーニング西側断面第37層）が観察された。おそらく後世、墳頂を削平して現状の



第44図 墳丘第3段北西コーナー平面図・断面図(1/40)

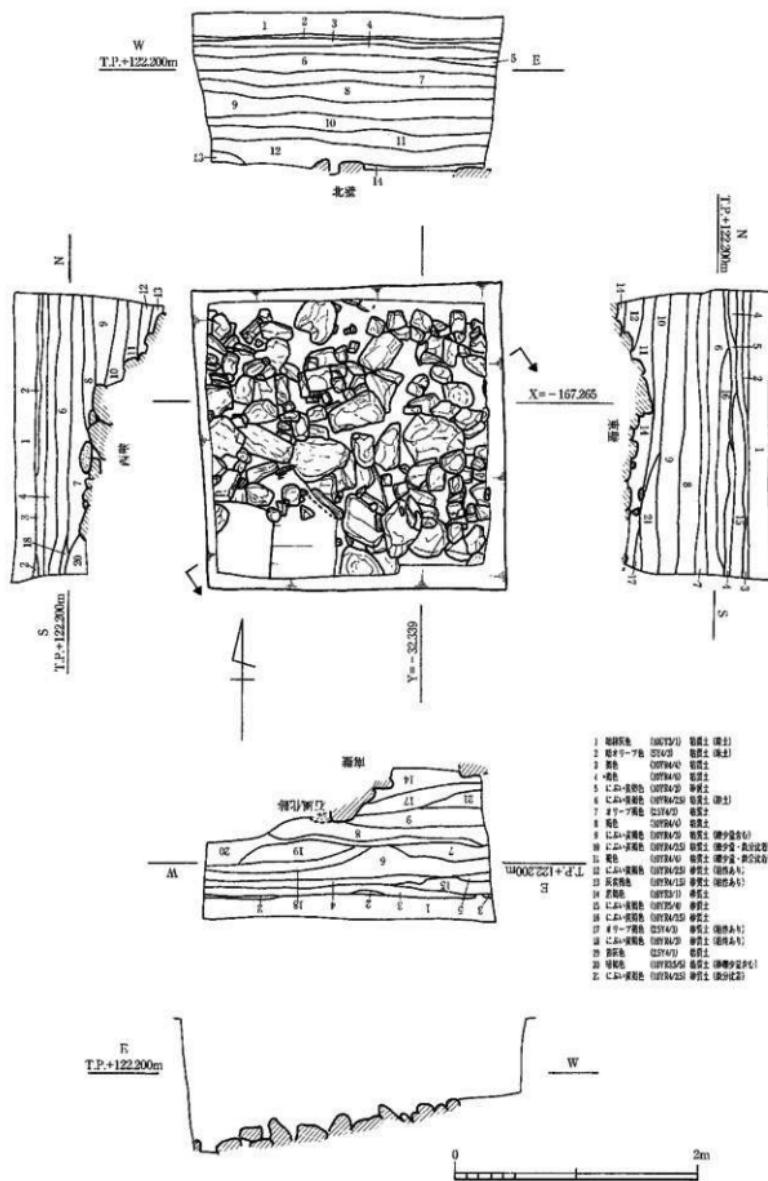
平坦な耕作面に造成する際に西側に落とされたものであろう。したがってこの褐色土とそれに混じる礫はもともと墳頂に施されていたものと想像できる。

墳丘第1段の基盤土は第2～3段のような版築状ではなく、砂質土を主体とする盛土である。後述するように、奥室に流入した攪乱土を除いて露出した奥壁下面砂質土（第6トレンチ第238層）と同じ土質が、南東トレンチb-b'断面（第16層）で確認されている。これからすると第1段の盛土は石室を構築する基盤土であると考えられる。ただ違いは奥室のそれがより締まった硬い感触であった。

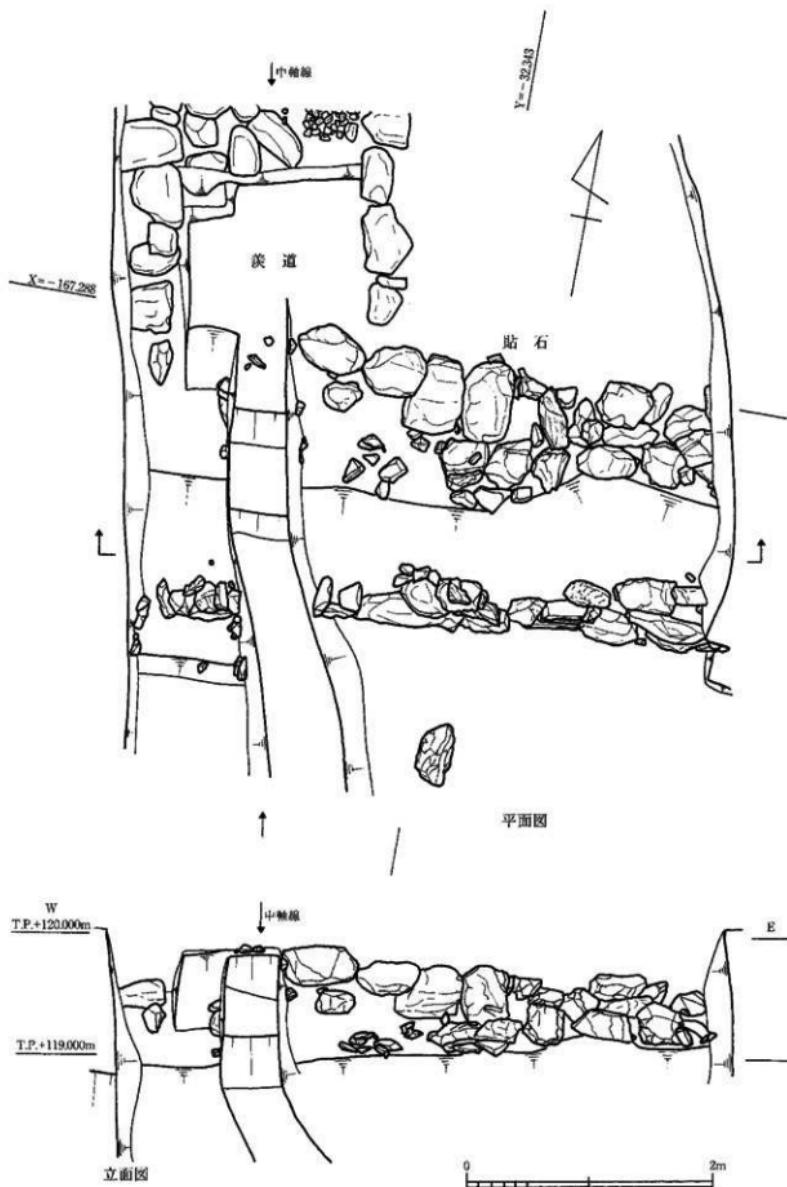
墳丘第1段盛土のデータとしては、平成11年度の試掘調査の際、ちょうど南側第1段テラスに当たる個所に設定した試掘坑No.63の断面観察の結果がある。このときは現地表面から1.5mまで掘り下げ、耕土下に褐色土を基調とする6層を認めた。現地表面から0.5～0.9mで北から南に傾斜する3層の堆積土の内、上位2層には淡灰色の微砂が織状に混じり、それらの下は灰色細砂で、さらにその下が黄褐色の砂質土であった。灰色細砂の上面(T.P.118.8m)は平坦面をなし、石室奥壁際の下面にみられた微砂(第238層)や南東トレンチb-b'(第16層)であった。

### (3) 貼石 (第45～51図)

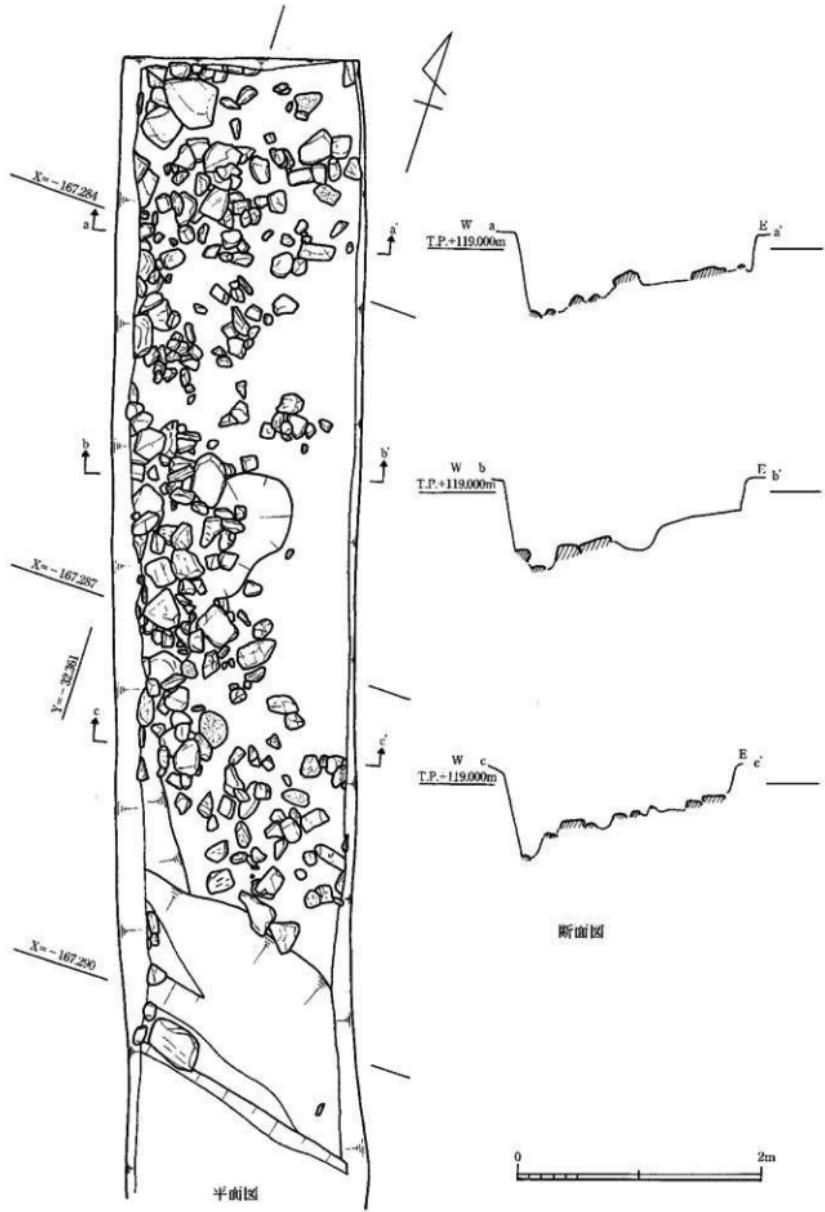
貼石は、墳丘西側第3段、東側第2段の攪乱された部分を除いて各段の斜面に認められた。



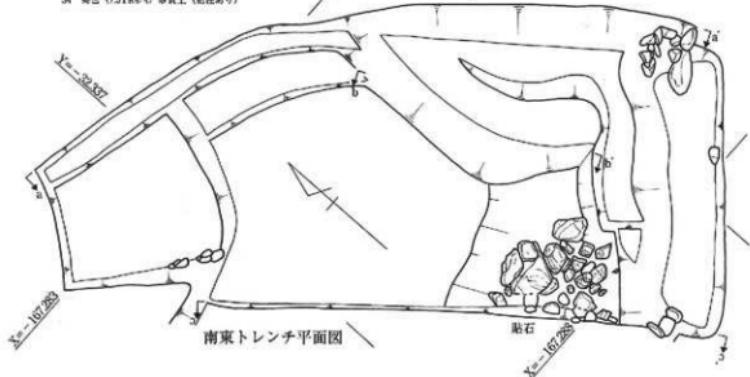
第45図 填丘第3段北東コーナー平面図・断面図 (1/40)



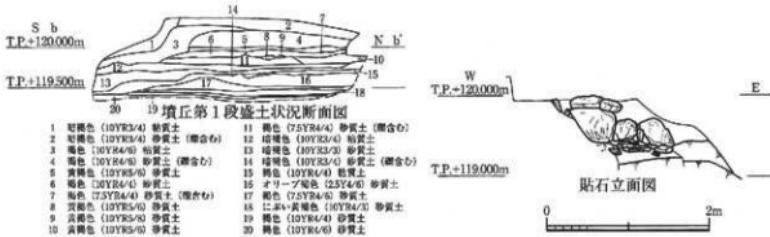
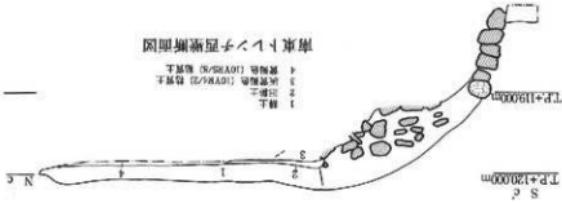
第46図 墳丘南側前面貼石平面図・立面図 (1/40)



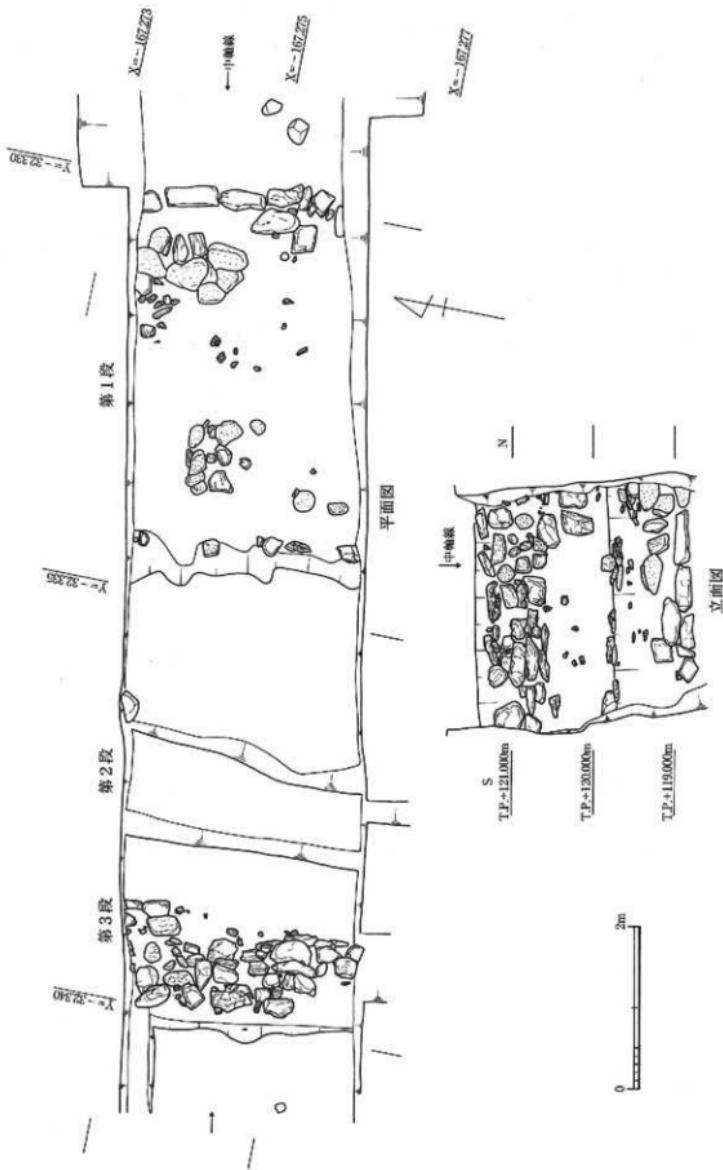
第47図 墳丘第1段西側貼石出土状況平面図・断面図 (1/40)



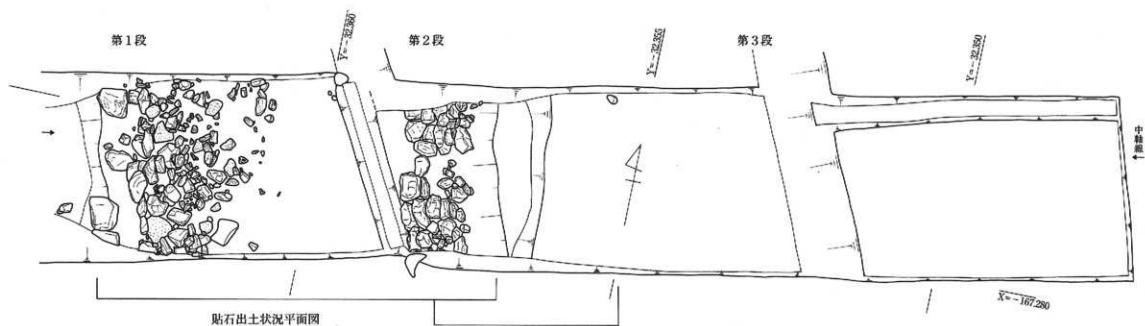
不規則 (R/SNA01) 可能算  
不規範 (E/SNA01) 可能算  
不規則 (R/SNA01) 可能算  
不規範 (E/SNA01) 可能算



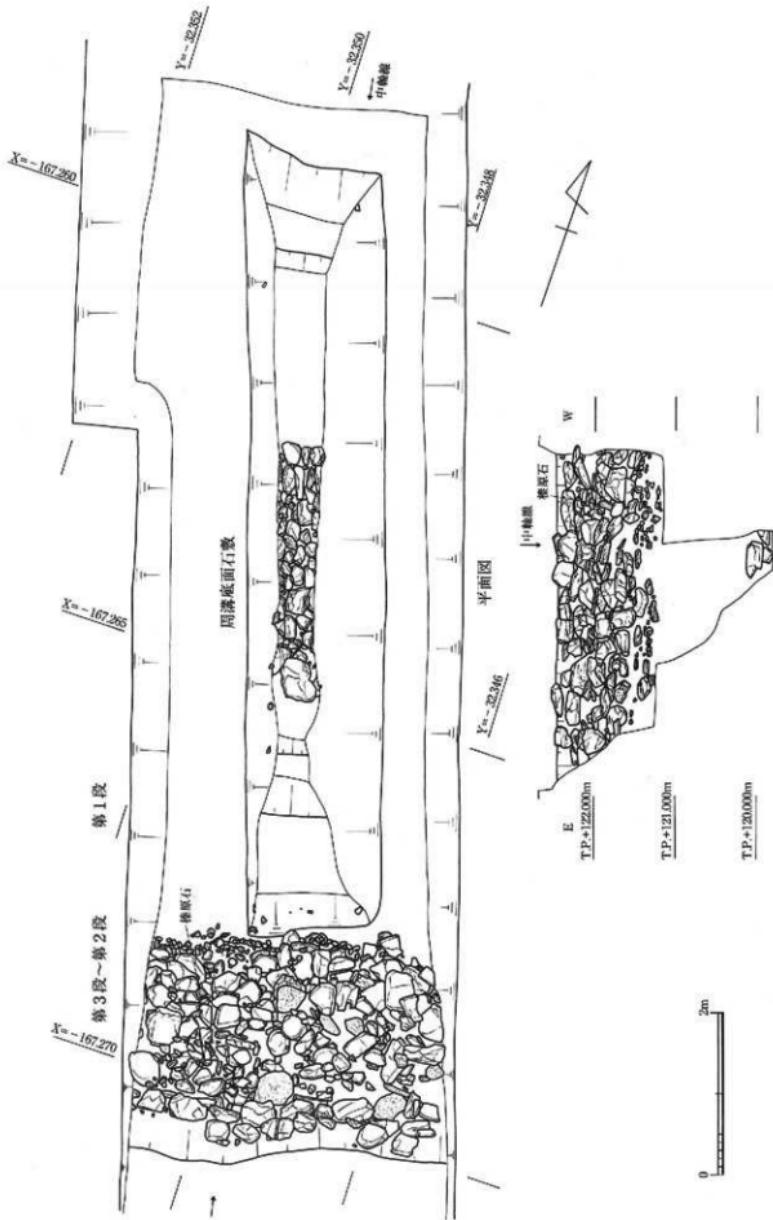
第48図 南東トレンチ貼石出土状況平面図・断面図 (1/60)



第49図 第7トレンチ(墳丘)東側貼石出土状況平面図・断面図(1/60)



第50図 第7トレンチ(填丘) 西側貼石出土状況平面図・断面図 (1/60)



第51図 第6トレンチ(填丘)北側貼石・石敷出土状況平面図・断面図(1/60)

墳丘第1段南側では、段の肩部を中心に最大 $40.0 \times 60.0\text{cm}$ ・厚さ $10.0\text{cm}$ の板石が斜面に貼り付けられ、それらの間に小石が詰められている。同じような貼石は墳丘第1段南東コーナー(南東トレンチ)でも一部確認できた。東側では第1段裾部に長さ $50.0 \sim 70.0\text{cm}$ の同様の板石が横置きに貼り付けられていた。これらの貼石は墳丘第3段で残りがよく、それは東辺でよく観察される(第6トレンチ東側)。この東辺が北辺と接する部分に設定した北東トレンチでは、若干の崩れはみられたが、石積みの隅角の稜線を辿ることができた。北辺では、墳丘第3段の立ち上がりは高さ $0.2\text{ m}$ 残り、 $30.0 \sim 40.0\text{cm}$ の板状の厚みのある石を傾斜面に貼り付けている。ここではテラス面にも、大きいもので $30.0 \sim 40.0\text{cm}$ 、小さいものでは $10.0\text{cm}$ 内外の石を葺いている。貼石というより傾斜面に沿って石を積む状況である。それより北に下って、第2段傾斜面肩部になると、今度は $10.0 \sim 15.0\text{cm}$ の礫が敷き詰められ、第1段のテラスの石積みを下から支えるような状況である。第1段裾近くでは、 $40.0 \times 50.0\text{cm}$ 、厚さ $10.0 \sim 15.0\text{cm}$ の板状の石が溝底に横倒しになっており、裾部にかかる断面ではこの石が本来直立していたことを示す抜けの痕跡があり(第6トレンチ北側断面第108層)、それより南側にはほぼ水平な堆積層(第107層)が認められた。したがっておそらく横倒しの板状の石は、盛土の崩れを防ぐため第1段裾に立てられていたのだろう。

墳丘の版築状盛土の傾斜面に施されたこれらの貼石は、直接斜面に貼り付けられるのではなく暗褐色の粘質土を裏込めのように塗りつけてから貼っている。既に述べた第7トレンチ西側断面第37層の褐色土も墳頂で同じように施された土であったろう。

貼石として使用されている石は板状の川原石が主体であるが、東側墳丘第3段と北側第2段テラス面では様原石の板石がそれぞれ1枚用いられているのが確認された。

### 3. 外部施設(第52~54図)

外部施設としては墳丘裾を取り巻く周溝が墳丘の四周を巡る。南側では墳丘裾に取り付く平坦部と前面テラス状施設があり、周溝はその間を通して通る。

#### (1) 周溝

周溝の幅は北側で $8.0\text{ m}$ 、南側で $5.5\text{ m}$ 、西側で $8.5\text{ m}$ 、東側では後世の出水により損なわれて明確ではないが、ほぼ現里道付近までを考え $9.5\text{ m}$ 程度と見られる。溝底面は北側(第6トレンチ北側)でT.P.119.8mを測り、これは墳丘第1段の上面テラスと同一の高さである。東側(第7トレンチ東側)ではT.P.119.0mを測り、西側では第7トレンチ西側でT.P.117.4m、第24トレンチではT.P.117.0m、第23トレンチではT.P.116.9m、南側ではT.P.117.0mで、急峻な背後の尾根から深く断ち切られた北側を除けば、概ねT.P.117.0m前後に揃えられている。

溝底面には暗い色合いの粘質土や粘土または砂質土が堆積している。第7トレンチ東側断面図の第58層、同トレンチ西側断面図の第64・65層、第6トレンチ北側断面図の第103層、同トレンチ南側の第296層、第23トレンチ断面図第16・18層、第24トレンチの断面図第6・8層、南側の第6トレンチ第296層である。

以上の堆積土からわずかながら遺物が出土した。西側の周溝にあたる第24トレンチの第8層で須恵器杯身・蓋・壺（第67図38～43）、南側の周溝にあたる第23トレンチの第16層では漆塗籠帽の細片2点が出土している。同じく南側周溝東半部にあたる第8トレンチ東側の第43層では須恵器の破片（第67図20・22・23）がまとまって出土した（第55図）。

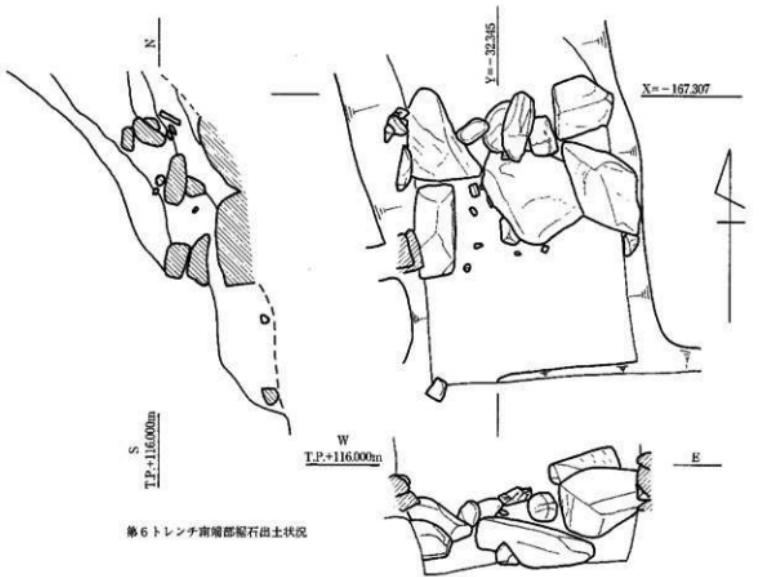
これらの上層より上位の堆積土は中世耕作土とみられ、どの周溝からも土師器・須恵器に加えて瓦器・土師器皿などの破片が混入する。特に墳丘北側にあたる第6トレンチ北側では、現地表面より深さ3.0mにおよぶ周溝を埋めて耕作土として利用していく状況が明らかである。堆積土は土質から見て大きく砂質土・微砂・細砂・粗砂と粘質土・粘土に分けられる。周溝底面の古墳築造に伴う敷石上に堆積した砂質土（第103層）以後、砂層が覆い、その後また粘質土・粘土が堆積する。これを粘土質と砂質の組み合わせで見ると、T.P.119.8mからT.P.122.3mまで大きく4回程度の似たような堆積土の組み合わせ（I～IV）が観察される。そして、IとIIの間に北側（山手）から小規模な流土があり、同じことはIIIとIVの間にも認められる。IVより上位には現代の耕作土の基盤となる粘質土とそれが床土化した土が堆積する。遺物はIVの土層群で、瓦器椀・土師器小皿・土師質土釜など中世土器に加えて若干の須恵器片（表体部）が出土している。これによってIVの土層群はすでに中世の耕作土として利用されていたようである。また周溝が完全に埋没して、現在見る平坦面となるのは中世以後のことと推定される。

### （2）平坦面と前面テラス状施設（第53図）

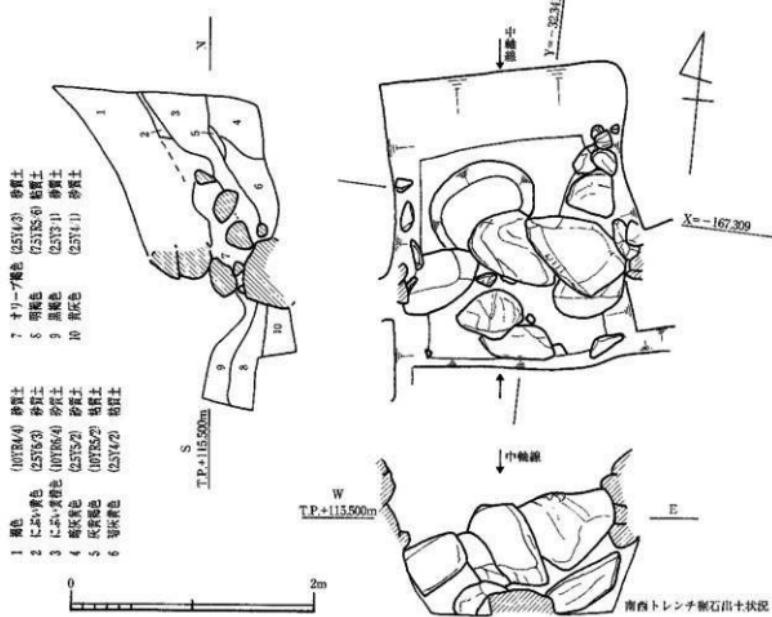
墳丘第1段裾部の下T.P.117.6m付近で確認された北から南に傾斜する地山面（第311層上面）には、一連の斜面堆積層（第300～307層）がある。このような堆積は、次節の第3調査区の棚田造成の断面観察の際に認められた流土の斜面堆積と同様な状況であり、平坦面はこれらの堆積層の上面（第302層上面）を利用したと考えられる。一方、前面テラス状施設は周溝を介して、第6トレンチ南端断面にみられるように、一連の粘質土や砂質土（第282～295層）をほぼ水平に積み上げて、墳丘裾部の高さまで嵩上げしている。またこの嵩上げの状況は第3調査区東壁南北断面でも観察される。

### （3）前面テラス状施設裾石列（第52・53図）

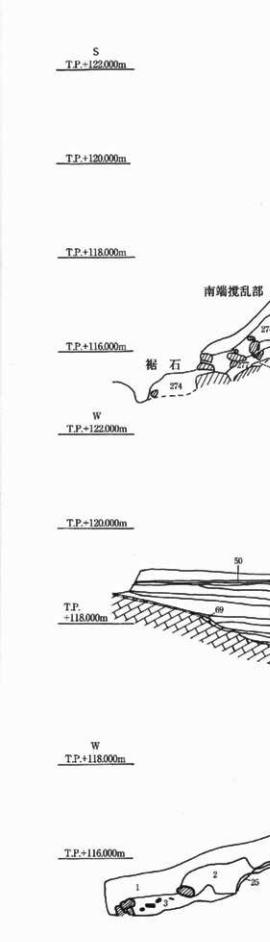
テラス状施設の構築土とその南側裾の大石の列石までの間は、後世の開墾によって削られ（第6トレンチ南端部断面）、本来のテラス幅の南北3.0mほどの区間が断ち切られた状態となっている。テラス盛土上面と列石の下場高さ（T.P.115.2m）とでは、比高差は2.2mある。そこで地山面に0.70～1.0mの大石が据えられていたが、これはテラス法面を擁護し、また古墳の外域を画する南辺の石列とも考えられる。この石列の位置や比高、それから想定される法面を考慮すると、テラスの南北幅は5.0m程度であったとみられる。石室中軸線と裾部が交わる個所に設定した南西トレンチでも、やはり同様の裾石の存在が確かめられている。これら検出された裾石の東西ラインを東に辿ると、現在の石垣の基礎石がコンクリートで固めて据えられていると同じような規模の石に行き当たる。これらの石も本来はこの古墳築造に伴って施工された石の



第6 トレンチ南端部擧石出土状況

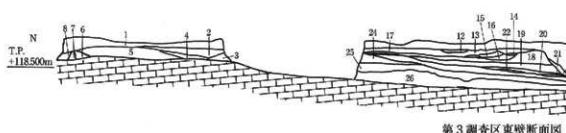
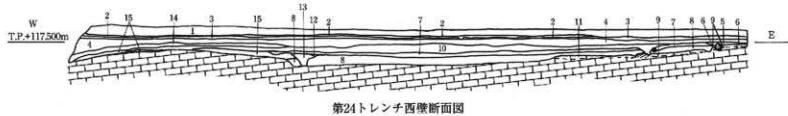
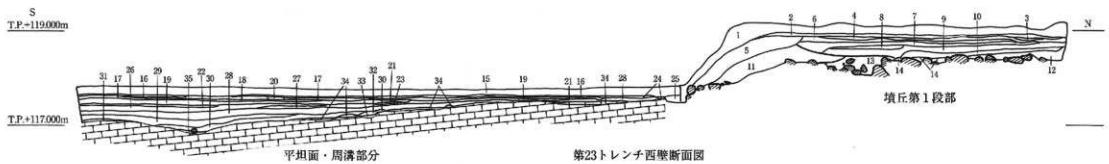


第52図 前面テラス状施設下擧石出土状況平面図・断面図 (1/40)



第53図 第8トレンチ石列および遺物出土状況平面図・断面図(1/80)

S  
TP+11900m



TP+116500m

1. にふ・黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	29. 淡黃色 (25Y 6/3) 砂質土
2. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	30. 深赤土 (20YR 5/3) 砂質土
3. にふ・黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	31. 深赤土 (20YR 5/3) 砂質土
4. にふ・黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	32. 青褐色 (23Y 5/3) 砂質土
5. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	33. 深赤土 (20YR 5/3) 砂質土
6. にふ・黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	34. 暗オーラル色 (3YR 2/2) 砂質土
7. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	35. 暗色 (10YR 5/2) 砂質土
8. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	36. 深赤土 (20YR 5/3) 砂質土 (6mm以下の白色含む)
9. 淡褐色 (7.5YR 4/3) 砂質土 (塊状化)	37. 淡褐色 (7.5YR 4/3) 砂質土
10. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	38. 深赤土 (20YR 5/3) 砂質土
11. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	39. 深赤土 (20YR 5/3) 砂質土
12. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	40. 暗色 (10YR 4/3) 砂質土
13. にふ・黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	41. 深赤土 (20YR 5/3) 砂質土
14. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	42. にふ・青褐色 (10YR 5/3) 砂質土
15. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	43. 深赤土 (20YR 5/3) 砂質土
16. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	44. 暗オーラル色 (3YR 2/2) 砂質土
17. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	45. 深赤土 (20YR 5/3) 砂質土
18. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	46. 深赤土 (20YR 5/3) 砂質土
19. にふ・黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	47. オーラル色 (25Y 4/2) 砂質土
20. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	48. 深赤土 (20YR 5/3) 砂質土
21. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	49. 深赤土 (20YR 5/3) 砂質土
22. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	50. 深赤土 (20YR 5/3) 砂質土
23. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	51. 深赤土 (20YR 5/3) 砂質土
24. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	52. にふ・青褐色 (10YR 5/3) 砂質土
25. 黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	53. 深赤土 (20YR 5/3) 砂質土
26. 块状化 (10YR 4/3) 砂質土	54. 黑褐色 (25Y 5/2) 砂質土
27. オーラル色 (25Y 4/2) 砂質土 (塊状化あり)	55. オーラル色 (25Y 4/2) 砂質土 (塊状化なし)
28. にふ・黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土	56. 黑褐色 (25Y 5/2) 砂質土

TP+116500m

第54図 第23・24トレンチおよび第3調査区東壁断面図 (1/80)

TP+11900m

TP+117000m

TP+117500m

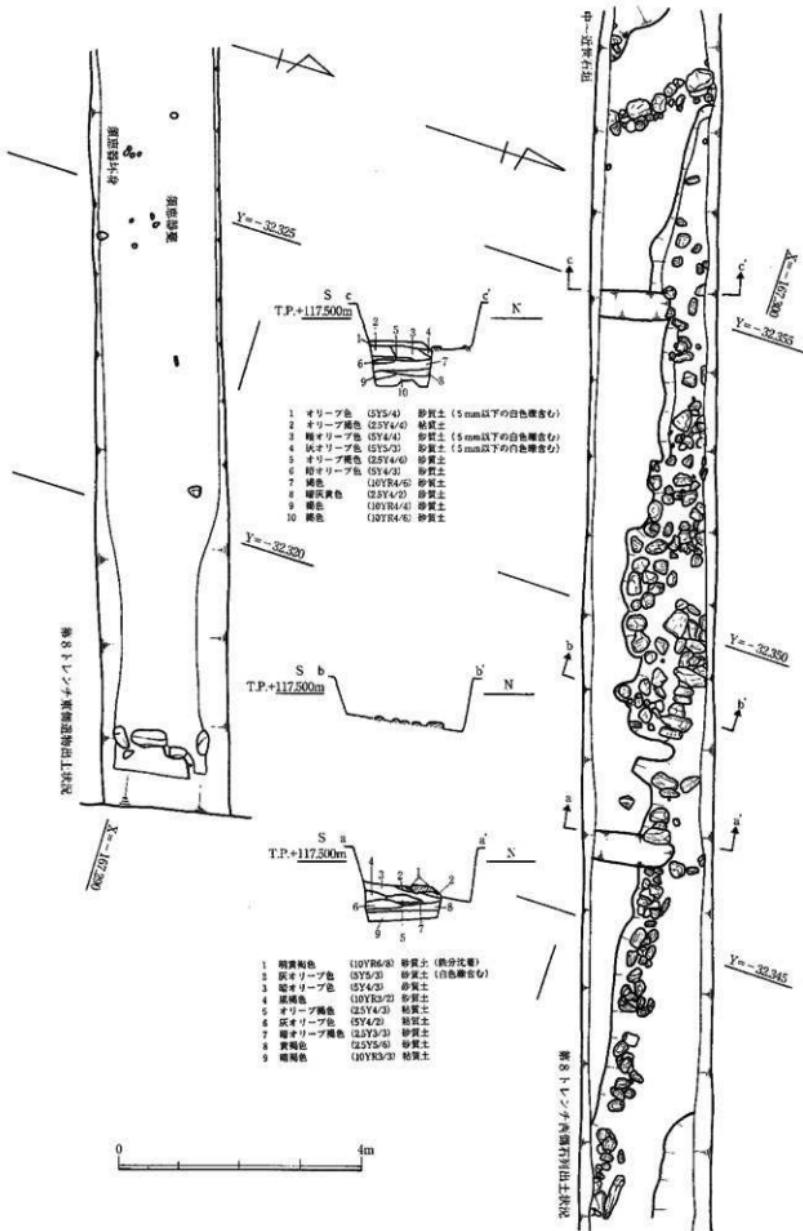
TP+118500m

TP+116500m

TP+117000m

TP+117500m

TP



第55図 第6～第8トレンチ断面図 (1/80)

名残ではないかと思われる。

#### 4. 埋葬施設（第 56～59 図）

##### （1）石室

切石積横穴式石室で、横口式石槨を奥室とする形状である。石室は、奥壁が墳丘の中心に置かれ、全体としては南に張り出す。T.P.119.0 mあたりに側壁・奥壁に使用されている石の下部がくるので、段築第 1 段の上面から 1.0 m 下がった位置に石室が据えられ、墳丘第 2 段から 3 段によってこの石室が覆われる。石室は奥室、前室、羨道からなり、全長は約 12.0 m である。石室の中軸線と磁北との振れは、N - 2° 50' - W であり、ほぼ真南に向口する。計測値は細部で異なるが、奥室は右側壁で長さ 2.47 m、左側壁で長さ 2.46 m、幅は天井石では 1.09 ~ 1.12 m、中程の垂直壁面で 1.10 ~ 1.13 m、検出最下面で 1.20 ~ 1.22 m である。前室は右側壁で長さ 2.80 m、左側壁で 2.90 m、幅は天井石で 1.36 m、中程垂直壁面では 1.41 m、検出最下面では 1.46 m である。奥室・前室ともに搅乱が激しいため実際の床面は損なわれて、明確な高さは押さえがたい。この前室の南に凝灰岩仕切石によって前室と両される南北長 0.74 ~ 0.94 m の礫敷部分がある。礫敷部分の幅は前室幅のそれとほぼ同じく 1.46 ~ 1.50 m を測る。

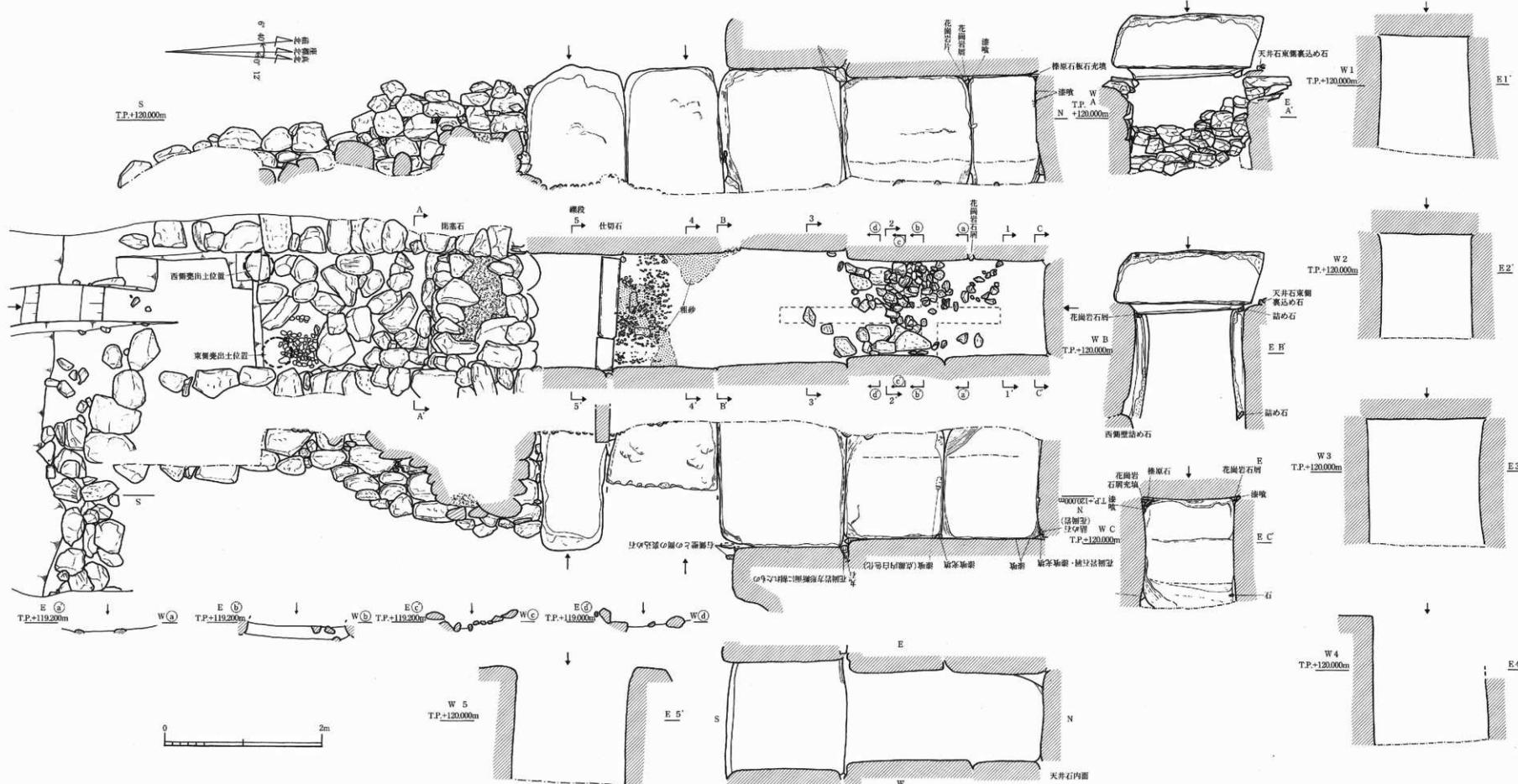
仕切石を前室と羨道の区切りとみるか、仕切石を前室の中のなんらかの区切りとして、側壁の切石第 1 石とそれより南の川原石積み側壁との境を前室と羨道との境とみるか、であるが、便宜的にここでは後者の捉え方で記述していきたい。

##### （2）壁面

奥室、前室すべて花崗岩切石を使用している。奥壁は 1 枚で高さ 1.32 ~ 1.40 m、幅 1.08 ~ 1.14 m。奥室右側壁は第 1 石が高さ 1.32 ~ 1.36 m、幅 1.62 ~ 1.64 m と第 2 石が高さ 1.39 ~ 1.40 m、幅 0.82 ~ 0.88 m、左側壁は第 1 石が高さ 1.30 ~ 1.38 m、幅 1.24 ~ 1.26 m と第 2 石が高さ 1.44 m、幅 1.23 m で、縦長のものと横長のものを使用し、左右両側で寸法の違う 2 枚を組み合わせ、ほぼ垂直に立てて構築している。奥室の左右第 1 行の小口上部には扉受けの抉りがある。下部は石材の幅が狭く下窄まりになり、扉受けの抉り込みが認められるのは、天井石から下 0.9 m のところまでである。

石室入り口の右側壁の第 1 石は高さ 1.55 m、幅 1.20 ~ 1.27 m、第 2 石は高さ 1.62 m、幅 1.20 ~ 1.23 m、第 3 石は高さ 1.55 m、幅 1.43 ~ 1.54 m である。前室左側壁第 1 石は高さ 1.52 m、幅 0.78 ~ 0.85 m、第 2 石は上半部が欠失し、残存高は 0.85 m、幅 1.41 m を測る。左側壁の第 3 石は高さ 1.62 m、幅 1.58 m である。

上半部欠失の第 2 石の切断面には浅い半円形の鑿痕が 9 力所に残る。径は 5.0 ~ 10.0 cm、長さが 5.0 ~ 6.0 cm で、鑿で石材を取るために水平に割り取っている。矢跡の大きさからみて江戸～明治くらいの仕業と考えられる。この側壁はその他の側壁に比べて表面の風化も少なく硬質であること、天井石を外し閉塞石の一部を外して持ち出しやすいこと、下半部が残ったのは既にその高さまで石室内に流入土が溜まって埋没していたことなどから再利用のためこのように削取



第56図 石室～羨道部平面図・立面図 (1/40)

られたと考えられる。左右両側壁の第1石は、ともに縦長の石材で、ほかの2石に比べてやや丈高である。

側壁・奥壁・天井石の三者が組み合う部分にも特徴がみられる。天井石を載せる際、側壁上面の凹凸を整えるために鋭利な刃物によって削った調整痕が、ほとんどの側壁上面にも認められ、削り屑の細粒が側壁と天井石の間に詰まっていた。それが間隙を塞ぎ、結果として天井石の安定が保たれている。側石はどれも側辺が丸みをもって窄まる座布団状であるので、側辺と側辺に間隙が生じている。奥壁と側壁と天井石の合う隅角は特に空隙が大きい。そのような間隙には、石が充填されている。前室右側壁の第2石と第3石の下部空隙には1辺20.0cmの方形の凝灰岩片、第3石と奥室第1石の上部の、前室と奥室の天井石の境の空隙には15.0cmの花崗岩片、奥室第1石と第2石の上部の空隙には厚さ5.0cmの花崗岩片、第2石と奥壁の上部空隙には厚さ2.5cmの板石（檜原石）片が詰められている。また前室左側壁では第1石と第2石の下部空隙に長さ25.0cm、幅10.0cm以上の川原礫が詰められていた。第3石上部では割り取られた第2石との空隙に詰め、しかも裏込めとした長さ20.0cmほどの川原石が数点認められた。第3石と奥室第1石の上部の、前室と奥室の天井石の境の空隙には1辺10.0cmの断面方形の花崗岩割石、長さ10.0～20.0cmの川原礫数点、第2石と奥壁との上部空隙には10.0cm大の花崗岩片の充填が認められた。これらの石とともに多くの場合やはり花崗岩の石屑が多量に詰められている。

### (3) 漆喰

詰め石とともに見られたのは、漆喰である。右側壁では奥室の第1石と第2石と天井石の間に漆喰の充填、第2石と奥壁の接合部上方で20.0cmの範囲にわたって斑状の漆喰の痕跡が認められた。また、奥室左側壁では第1石と第2石と天井石との空隙に20.0cmにわたって漆喰の詰め込みが、またその下の第2石中程の側片付近にも30.0cm範囲にわたって斑状の漆喰の痕跡が認められた。同様に第3石の奥壁寄りで天井石との空隙には2.0～5.0cmの漆喰の塊が残り、また奥壁との上部空隙は花崗岩屑と漆喰を詰め込んで塞いでいた。詰め石は前室と奥室の壁面の隙間のあるところには上部下部を問わず行われているが、漆喰が使用されるのは奥室に限られ、天井石との空隙に塗りつけて塊となっているばかりでなく、下方では天井より0.8～0.9m下がった側壁と側壁の接合部を中心に塗布され、それより下には認められない。このことは側壁が天井より1.1～1.2mでやや下窄みになり、平坦な内法面ではなくなっていることと合致する。これは攪乱以前の木米の床面高さを捉える根拠のひとつでもあろう。

### (4) 側壁・奥壁の石

石室の側壁・奥壁に用いられた石は表面が風化のため剥落する部分が目立つ。特に端部、隅角の剥落は激しい。また土に埋まった側壁下部の表面は上を取り除くだけでも石の表面が土に付着して剥がれる状態であった。したがって、顕著な加工痕を認めがたいが、図中に示した奥室の側壁・奥壁の下方の稜線以下は粗い叩きではないかと思われる。前室左側壁第2石の上半部の割取られた石には幅10.0cm単位の縦位の削り痕がある。この石の場合、既に述べたようにほかに

比べて硬質であり、その分加工痕もよく留められているのであろうか。それほどではないが、前室右側壁第2石にも同様の加工の痕跡が上半部にかすかに認められる。右側壁第1石では中央に抉られたような陥没があり、これも加工の際の強い叩きの痕かも知れない。奥壁表面には横位の筋目を挟んで中央は腹を張るように軽く盛り上がり、下方は天井より1.07mのところで極端に厚みを減じる。この石の場合はほとんど自然石をそのまま利用している。

以上、前後両石室を構成する石は、天井石が1石抜き取られて2石、側壁各5石、奥壁1石であった。扉石は扉受けがあるので、仮に石であれば、盗掘の際破壊されたと思われる。石室内に溜まつた盗掘乱土に紛れて面をなす凝灰岩の破片や石粒が出土しているので、あるいはそれらが扉石の材であった可能性も否定できない。

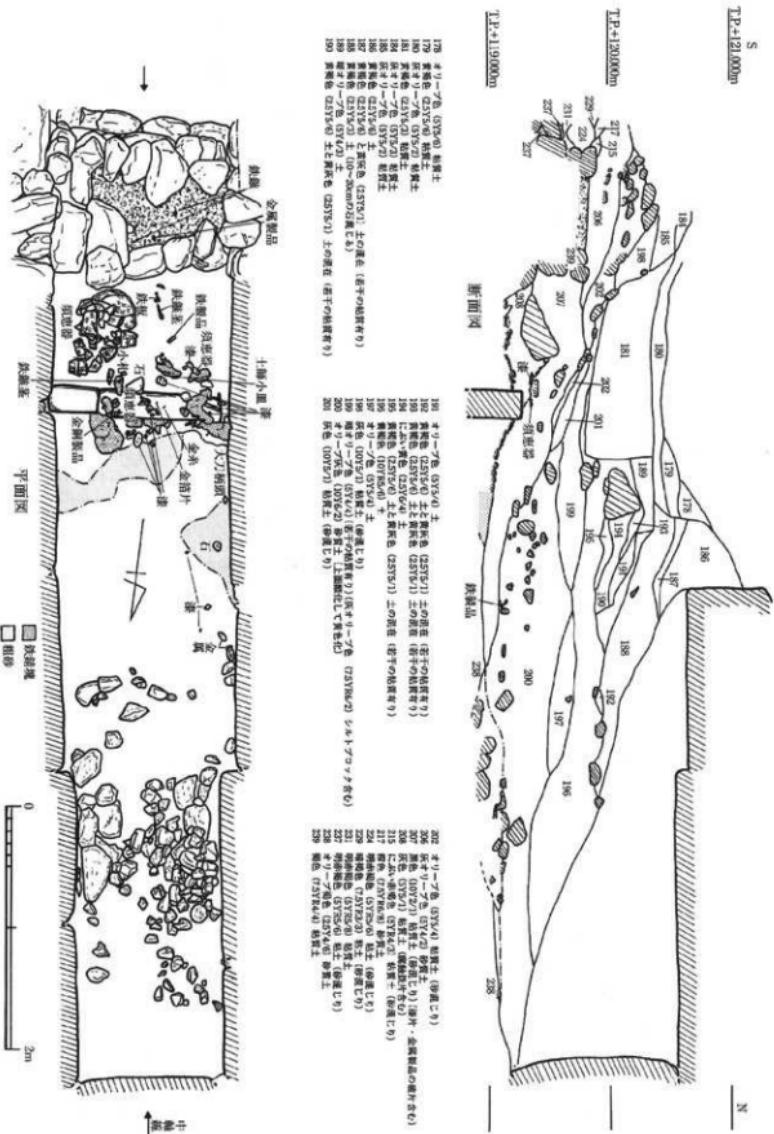
#### (5) 床石

奥室床面に石が敷き詰められていたかどうか、これも敷かれた原位置を保つ石は全く認められなかったから事実としては指摘できない。天井より1.4m下った面で平面の検出を終えることとしたが、前室から奥室にかけて最終的に幅0.2m、長さ2.8mの小トレンチを掘り下げ、攪乱の及んでいる深さを確かめた。しかし奥室で最終確認面より深さ0.15～0.2mに達してもまだ瓦器片を含む混疊土であり、床石があったにしても、少なくとも中世に相当掘り返されて取り去られたらしい。最終的に掘り下げた面ではもはや奥室側壁の石の下縁が一部露呈したことからすると、仮に床石があるとしても床石の上に側壁が載るのではなく、両側壁で挟む形であったろう。

奥室から前室にかけて散乱した5.0～45.0cmの石は、中世の攪乱で当初の位置が乱されているとはいゝ、本来は床下の施設に用いられたと考えることもできよう。また、石室内に堆積したⅡ層〔(10)「石室内堆積土」参照〕や、既に試掘時点で確認した盗掘坑の埋め戻し上から流紋岩の板石片が出土している。その中には端面や平面を加工した形跡のある破片もあり、隅角をついている破片もあるので、奥室の敷石や側壁と床石、あるいは段差部分の詰め石などに用いられた可能性は高い。

#### (6) 天井石

天井石は2石を残すのみであるが、奥室1石、前室は2石の計3石（前室第1石が左右両側壁ともやや高く、この部分だけ底のような天井石を考えると4石）であったと思われる。残った2枚の天井石の内法面はきわめて平滑である。前室の天井石は長さ1.62m、幅1.36m以上、検出した最大の厚さは0.8m。前端面は垂直に立ち上がり、非常に平坦に仕上げられ、内法面との角度は直角で、稜角は丸みをついている。端面の高さは、0.45～0.53mである。正面から見た場合、内法面はやや西に傾斜する。奥室の天井石は長さ2.47m以上で、小口は前室天井石より0.1m低くしつらえ、その分だけ垂直で平坦な端面をなす。両天井石の中央の間隙から見た限りにおいては、奥室天井石は内端部より北上がりの傾斜面となり、そこに前室天井石の逆傾斜面が載るが、左側壁上では両者の間に、試掘調査の段階で確認していた幅3.0cmほどの隙間が認められた。



第57図 石室内堆積土第207・208層遺物出土状況平面図・断面図（1/40）

### (7) 仕切石

前室の南側に設置された凝灰岩板石 2 石の側辺を上にして、前室を東西に横断する形で立て並べた石である。東側のものは幅 0.20 m、長さ 0.40 m、西側のものは幅 0.20 ~ 0.22 m、長さ 1.02 m である。高さは遺構損壊のおそれがあったため、0.42 m までしか確認できなかった。したがって少なくとも 0.42 m 以上の立ち上がりがあると思われる。つまり、この仕切石は厚さ 0.20 m、幅 0.42 m 以上、長さ 0.40 m と 1.00 m の直方体の石材を長側辺を上にして立て並べているのである。後章の石材鑑定から使用された凝灰岩は二上山牡丹洞産（東側石材）と鹿谷寺産（西側石材）とされている。

### (8) 砂とバラス

仕切石の北側は砂とその表面を覆うバラス（径 5.0 cm 以内の小砾）が敷かれ、バラスは仕切石より奥室側 0.6 m に及び、特に東半部に残っていた。その下の砂は仕切石より奥室側 1.1 m、つまり前室のほぼ中央付近まで認められ、ここから南の仕切石に向かって下方に傾斜する形で堆積し、それより北側には及んでいない。この砂とバラスの上面は奥室側に向かって緩やかな傾斜面をなしていた。しかし閉塞石上部から北側石室内に流れ込む盗掘の攪乱上（II 層）を除去して現れたことからみて、これは攪乱によるものと思われ、本来は平坦な面であったろう。したがって仕切石は北側に盛られた砂の崩れを防ぐための役目も果たしていたのではないかと考えられる。砂の使用については排水の便が考えられるが、地下を掘り下げて明確な施設を検出するに至らなかった。

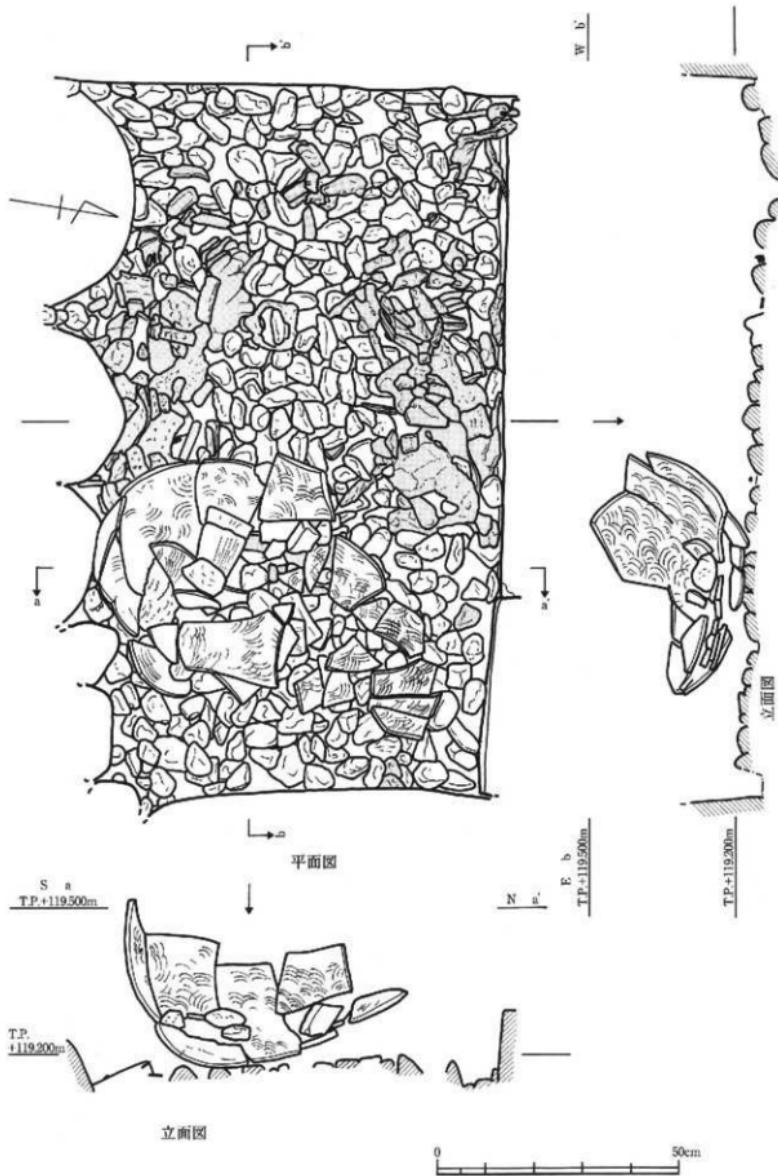
### (9) 磨敷

仕切石の南側、閉塞石北面までの間 0.8 m の空間は長さ 10.0 cm 以上の白っぽい川原砾をびっしりと敷き詰めた磨敷となっている。磨敷上面高さは仕切石上面から 5.0 cm ほど低い。この面の東壁際で須恵器四耳壺（第 64 図）が出土したが、底部以外は盗掘時の落下と思われる閉塞石の一部（長さ 0.54 m、厚さ 0.2 m）により圧し潰されていた。またその西側では挂甲小札、素環鏡板、鉄釘などが出土し、一部は仕切石上面にも及んでいた。これらの鉄製品は磨敷や仕切石に銹着しているものが多く、礫とともに取り上げざるを得ない場合もあった。このような出土状態からみて須恵器壺・鉄製品類は葬送の時点で磨敷の上に置かれたものと考えられる。

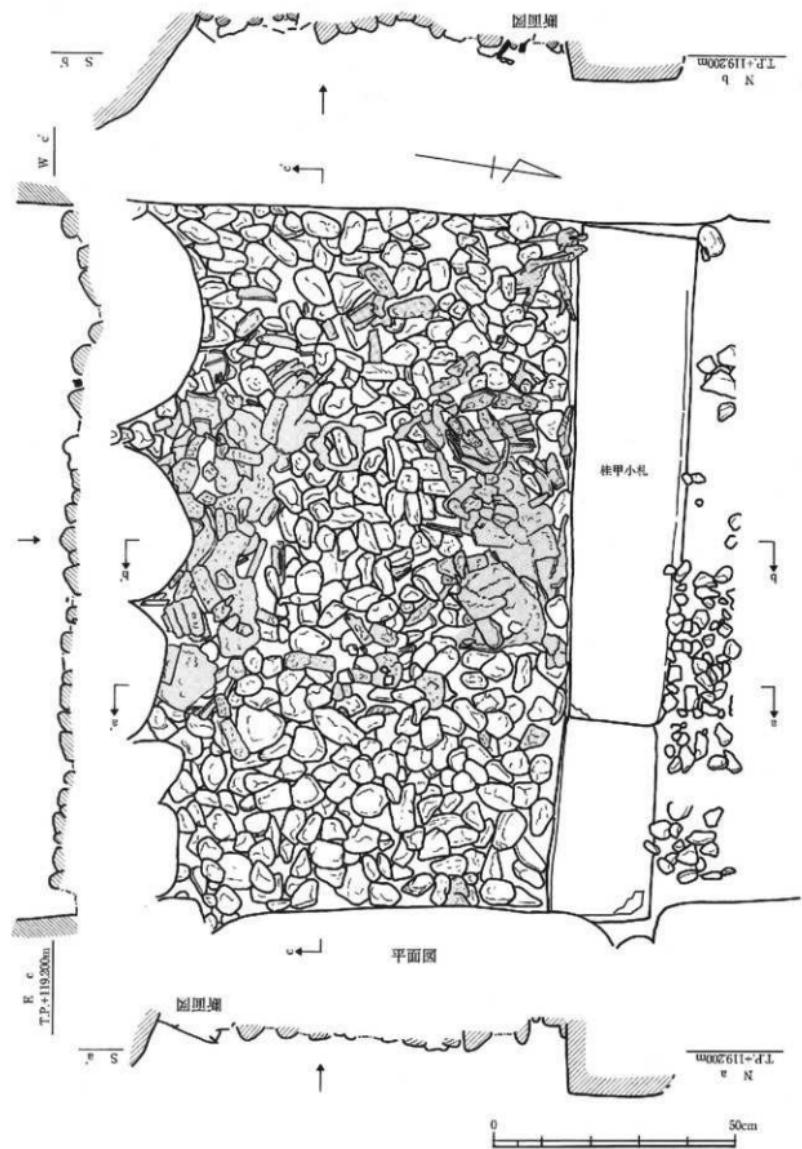
### (10) 石室内堆積土

石室内には盗掘による攪乱土や流土が閉塞石上方から石室奥に流れ込むように堆積している。最終的な石室内堆積土の上面は天井石内法前端（T.P.120.6 m）から奥壁下部（T.P.119.2 m）にかけて傾斜面をなしている。最終的な検出面を掘り下げた T.P.119.0 m の面より下にはまだ攪乱層が存在したが、それはもはや側壁の下端部に達して危険なため一部中央に南北の小トレーナーを設けて確認したものである。石室内の堆積土は大きくみて I ~ IV の 4 層に分けられ、その上に近世～近代の攪乱や埋め戻しと思われる V 層が堆積している。

I 層は石室に最初に溜まった、磨敷上面にのみ見られる土である。この土に覆われる形で須恵



第58圖 積敷上須惠器壺出土狀況平面圖・断面圖 (1/10)



第59図 磨敷上挂甲小札・鐵鎖・鏡板出土状況平面図・断面図 (1/10)

器壺や挂甲小札、鉄鏃など、土器・鉄製品が出土し、しかもそれらの遺物はすべて礫敷に密着し、これより上位の堆積層にみられるような中世遺物は含まない。また閉塞石の一部が盜掘の際に須恵器人形壺の上に落下したままになったことも幸いして、当初の副葬品の配置状況の一端がこのように比較的良好に留められることになったと考えられる。

II層は、閉塞石を跨いで前室後方に流れ込む形で堆積する黒色を呈する比較的粘性のある土であり、仕切石を越えて北側では砂・パラス上面を覆う。この上からは漆塗籠棺、亀甲繋文銀嵌大刀柄頭、金銅装馬具や飾り金具、銀製帶金具、金糸、ガラス玉、須恵器、流紋岩質溶結凝灰岩板石などの破片が、中世瓦器碗や土師器小皿とともに出土した。遺物の大半が出土した土層である。III層は、5層に細分される。II層の上に堆積する土層（第198～200層）では、南のT.P.120.4m付近より前室を経て、奥室前半に流れ込む形で大小の礫が多量に出土した。前室と奥室の境付近では、この礫の混在する攪乱土が検出面より下にまだ深く及んでいる。奥室と前室の検出面の下に設け、下層確認のための小トレンチ（T.P.119.0～119.1m）で、その構成土のひとつである第200層から、礫に混じって瓦器片が出土している。IV層は最終的に石室を塞いでしまう上で、12層程度に分層される。黄色系の色調で混入する礫はIII層に比べて少なく、またIII層では礫が南から北に傾斜するように流れ込む形をとっていたのに対して、この土層ではほぼ水平に近い状態で出土する。III・IV層では古墳に伴った遺物の出土はみられなかった。調査後、石室内の土（I～IV層）は、すべて水洗作業を行った。それによって漆塗籠棺、凝灰岩、花崗岩などの細片や屑が採取されている。しかしその大半はII層を中心とするもので、この点では現地での作業結果と矛盾しない。

以上の石室内堆積土を最終的に覆うのがV層である。35層ほどに細分されるこの一連の堆積土は、T.P.122.4mで耕土の下に数層を挟んで、版築状盛土を北から南へ削った斜面に盛り上げられた堆積状況を示している。T.P.120.5mから120.8mにかけては5.0～30.0cmの礫を多量に含む土（第171層）がみられ、それらの礫と混在して近世の磁器碗（第63図1）が出土している。また試掘調査ではこの攪乱盛土中から板石（棟原石）の破片が出土している。

このようにI層は最初の盗掘の影響を受けてはいるが、葬送時の副葬品配置の位置関係の一層を比較的よくとどめた土層といえよう。それより上位に堆積する各層には、中世土器の細片に加えて、近世の磁器碗や近代のガラス片、アルミ製リベットなどが混入する。したがって中世の盗掘で荒らされて以降近代に至るまで、完全に埋まりきることなく開口状態が続き、それに伴う盗掘のみならず農作業や開墾に伴う人の出入りがあった可能性がある。

## 5. 閉塞施設（第60図）

仕切石南辺より南へ0.76mに築かれている。石室側壁第1石の南に、南北の下場幅1.4～1.5m、上場幅1.1～1.2mにわたって積み上げられている。残存高は0.8mである。これは外された天井石の高さを考えると、その半分弱の高さにすぎない4～5段が残った状態である。おそらくは6段程度はあったと思われる。そのうち盗掘の際に6段目は完全に取り外され、さら

に西側では4段目まで取り外されたようである。閉塞石北面は側壁第1石と羨道との境に合わされている。積み上げた石の大きさは一定しているわけではないが、長さ0.35～0.55m、幅0.25～0.40mの長手の自然石を中心にして石室側と羨道入口側の両側から積み上げている。

最下段の基礎となる東西の列石は、北面の石室側についてみると長さ0.3～0.5mの石をほぼ西方に横長に並べ、残った東壁との空間には同じ0.5mの石を今度は縦長に並べ、さらにそれらとの間に残った空間は0.3m程度の石を縦に充填しておさまりを調整している。さらに2段目には西方に長さ0.9m、高さ0.3～0.4mの横長の石を載せている。その結果東側の2段目の石との間に約10cmほどの高低差が生じるが、その差は3段目に至って小振りの石を用いて解消している。それより上位は外されて不明だが、東壁沿いには2段の石積みが残っていて、そのひとつがこれまた長さ0.6m以上の横長の石を用いている。つまり、基礎の石の上第2段以上の石組みはこのように横長の石とそれによって生じる左右の空隙を0.3～0.4mほどの石で詰めて積み上げていく形をとっているようである。

閉塞施設南面は羨道の埋め石を外すことはしなかったので、基底の石まで詳細に観察できなかったが、ほぼ同様の積み上げであった。これを南北方向の断面でみれば、基底は南北幅約1.5m、それより上は幅約0.5～0.6mの立ち上がりとなって、南北に裾括がりの安定した形をとっている。

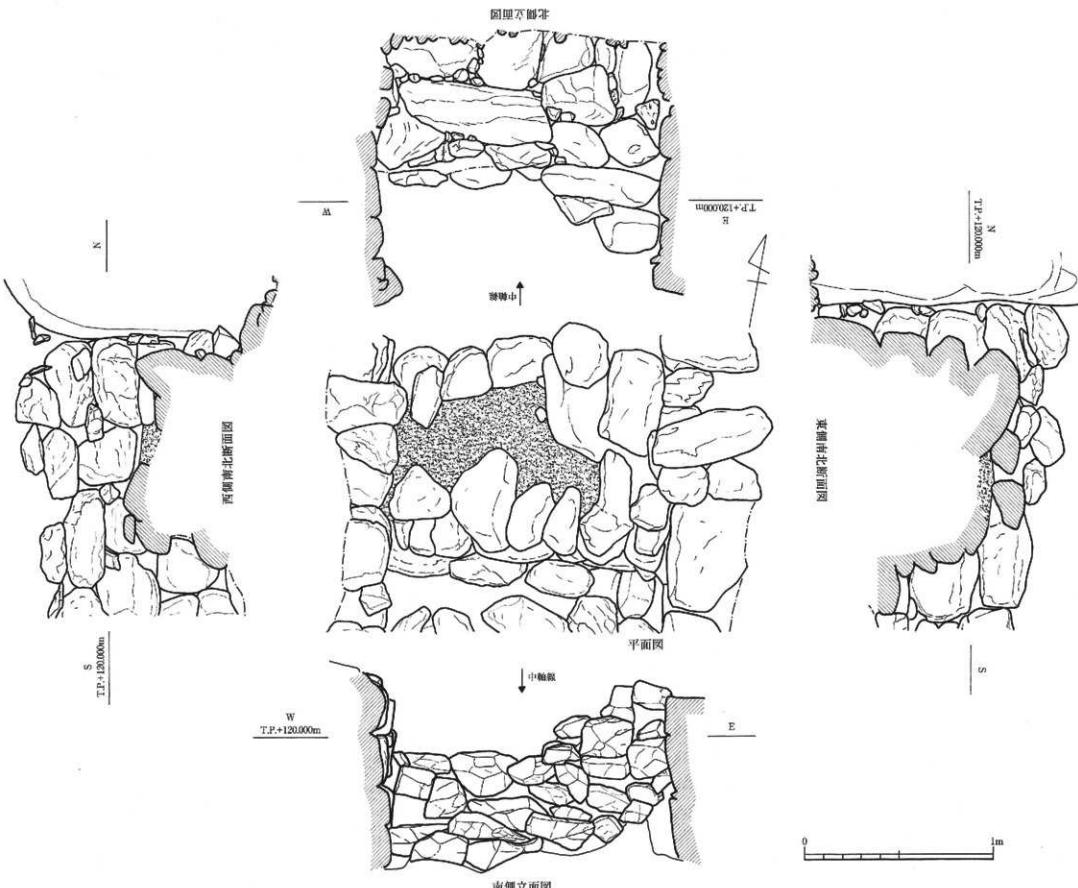
閉塞は石積みだけでなく、以上の北面と南面からの石積みの間に褐色の粘土を段毎に詰め（第239層）、そのうえ石積みの空隙に主に5.0～10.0cmの小礫を充填し、石室を厳重に密封した状況が窺われる。このように積み上げられた閉塞の一部（長さ0.60m大の石）が、盗掘によって先ほども述べた北側の礫敷上に置かれた須恵器壺の上に落下したのである。

#### 6. 羨道（第61・62図）

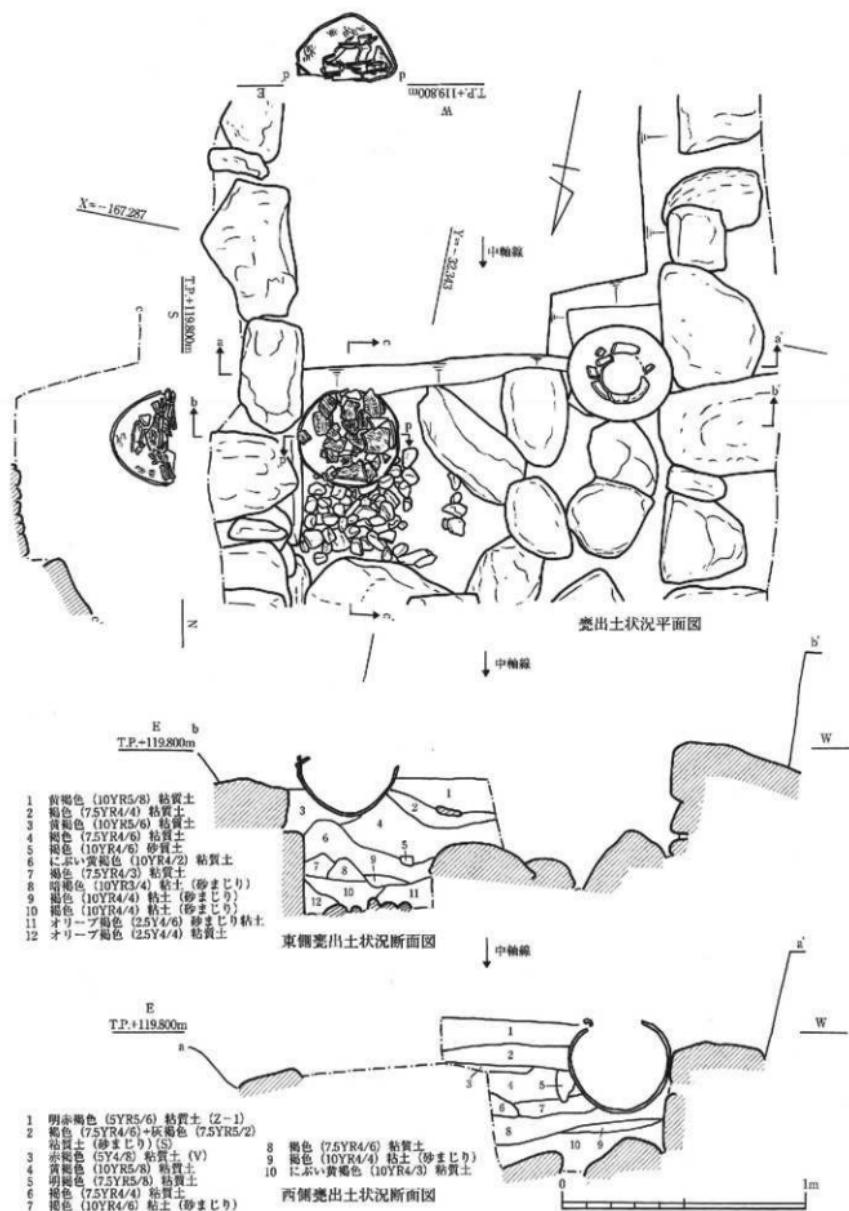
羨道を仕切石からると約6.0m、仕切石南の礫敷の切れる位置、すなわち側壁第1石南縁から測れば約5.0mとなる。羨道幅は北端で1.5m、入り口付近ではやや拡がり1.6mを測る。羨道部側壁の壁面は、石室側壁第1石より南3.5mにかけて小口積みをしている。その幅は0.35～0.55m、長さ0.25～0.35mと0.60m以上の二様の石を長辺を羨道の南北辺に直行する形で用いて積み上げている。入り口付近では、石の長辺を羨道の南北辺に平行する形に積んでいるものがある。壁面は垂直に立ち上がるが、第2段テラスに当たる閉塞石部分両側の最も高く積み上げてあるところでは、最上段の石が壁面より5.0～10.0cm内側に迫り出している。

石積みは、閉塞石両側の第2段テラスに当たる部分で6～7段、閉塞石南面より1.2m以南の第1テラスに当たる部分では3～4段で、それより南の入り口に向かっては1～2段と考えられる。前室天井内法面の高さを考慮すると、第2段テラスに当たる部分の羨道壁面の石積み上面は数石外されてしまっているものの、6～7段であったと思われる。

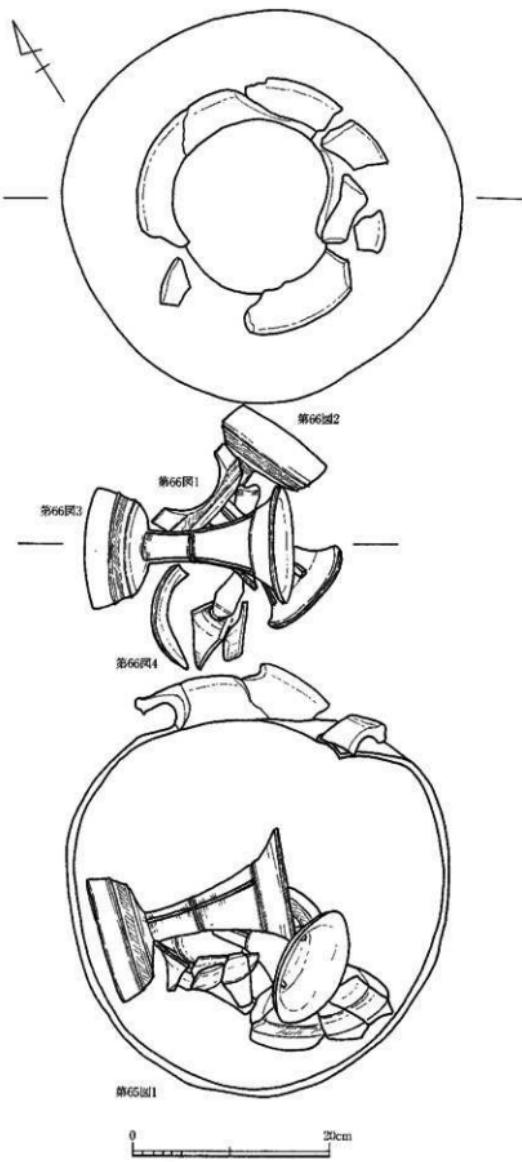
羨道側壁は側面では、石室側壁第1石南面から2.3mのところに墳丘第1段テラスから第2段に立ち上がる傾斜変換点がくる。傾斜角は14°程度である。それより南入り口に向かう2.5m



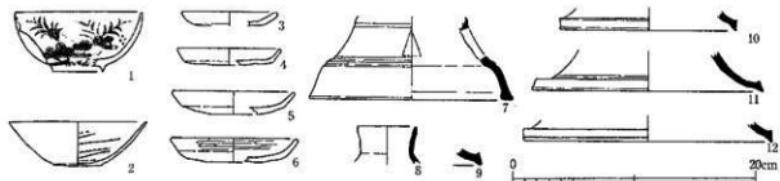
第60图 闭塞施設平面图·立面图 (1/20)



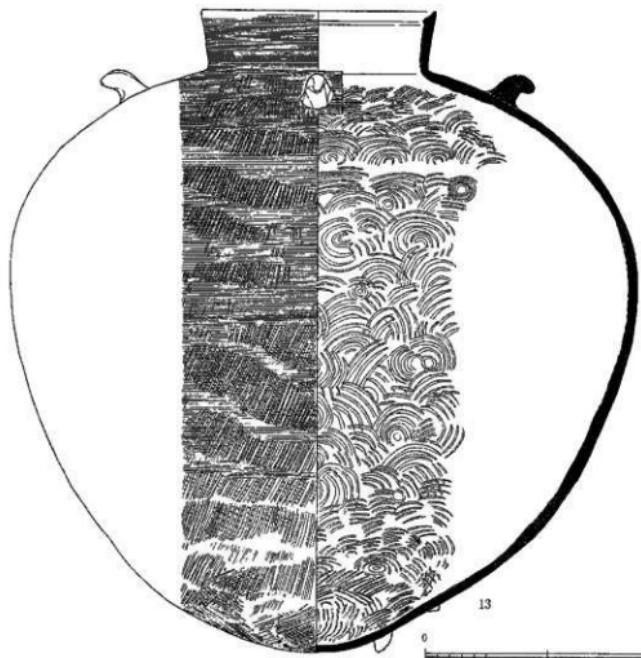
第61図 漢道理出土状況平面図・断面図 (1/20)



第62図 美道西側埋葬内須恵器高杯発見状況平面図・断面図 (1/50)



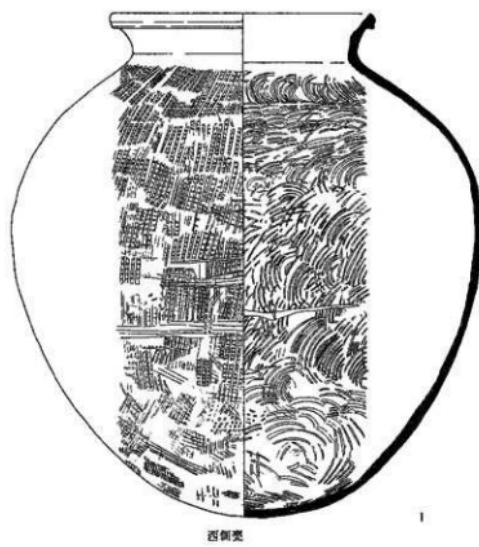
第63図 石室内および墳丘擾乱土出土土器実測図 (1/4)



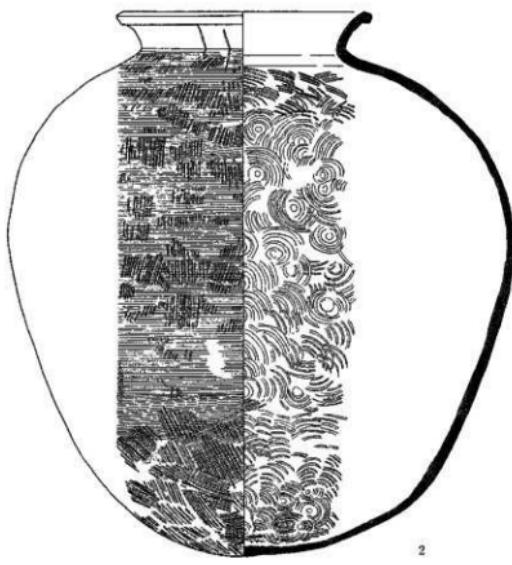
第64図 碟敷上出土須恵器四耳壺実測図 (1/4)

が第1段テラスとなるが、変換点から1.0mくらいのところも南に向かって5~6°の傾斜がみられる。

閉塞石より南は羨道入り口にかけて現耕土直下に褐色系の粘質土が全体に堆積していた。閉塞石を覆う盗掘に伴う擾乱土(第206層)を除くとこれらの埋積土が露呈し、南北1.7mにわたって掘り下げた範囲で第209層から第237層を区別した。この埋積土の下では羨道壁面や閉塞石にもみられた長辺0.30~0.50m中心とする碟がほぼ全体にわたって出土した。羨道部をまずこれらの石で埋め、さらにその上から上記の29層におよぶ粘質土を積み、羨道部を入り口ま



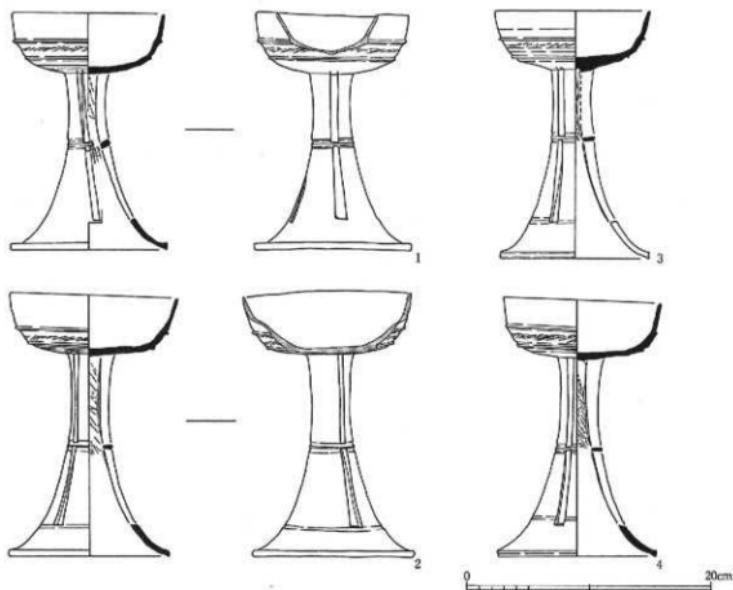
西側面



東側面

0 20cm

第65図 萩道出土須恵器壺実測図(1/4)

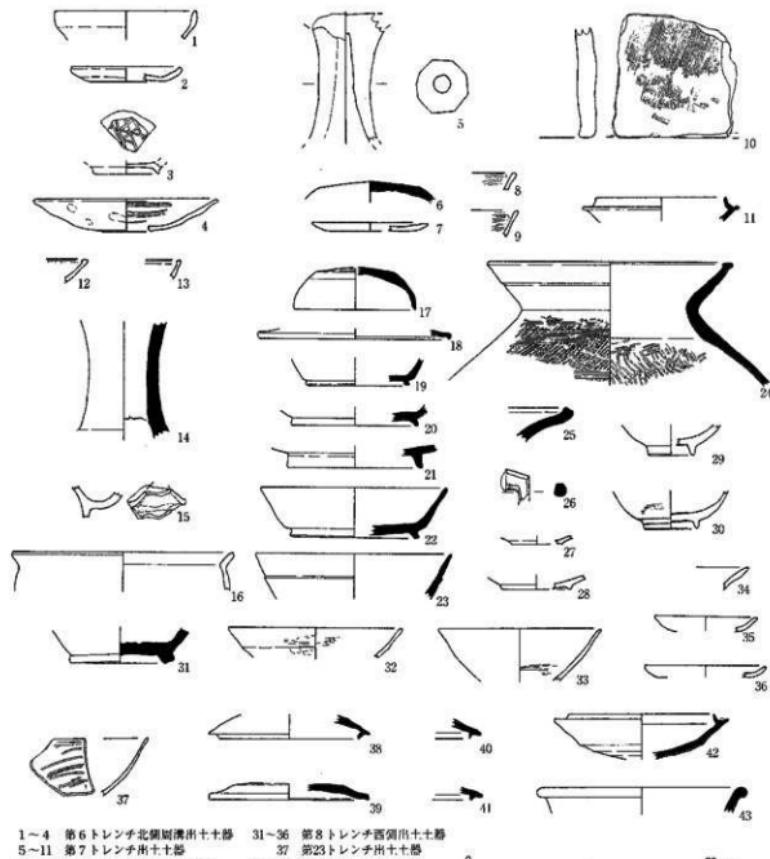


第66図 羨道出土西側埋甕内発見須恵器無蓋高杯実測図（1/4）

で完全に塞いだようである。しかし第1段テラス部に相当する羨道の東半部には、これらの石がみられない0.5m四方の空間が認められ、代わってここには5.0～15.0cmの礫を敷き詰めていた。この礫敷の上面の高さはT.P.119.1mである。

礫面より0.4m上では礫面の空間のやや南寄りの東壁際で須恵器甕体部上半が土圧で圧し潰れた状態で検出された。さらにこの甕の西側の壁際でも同様の甕が完形でやはり埋め置かれた状態で出土した。いずれの甕も穴を掘ってそこに埋めるというものではなく、羨道を埋めていく過程で立て置かれた状態であった。東側の甕の底面高さはT.P.121.5m、西側のそれはT.P.121.46mである。それに相対する西側石の上面と比べて低く、また西側の甕の口縁部上端が後世の耕作土下面にあたっていたが、西側ではそれよりさらに深く耕作土が及んでいた。これらの甕の残存状態とその高さからみて、西側甕口縁部上端とこの甕が接する羨道部西側壁上面がほぼ同一の高さであり、かつその西側壁上面が墳丘第1段のテラス面とも高さが等しいから、検出された石積み上面の高さが当初の高さを保ち、同時にテラス面の高さでもあったであろう。

西側の甕には高杯4個体が横重ねで納められていた。甕の底面から上に向かって高杯4→高杯2→高杯1→高杯3（第66図）と重ね、口縁部に打ち欠きある高杯（同図1・2）をそうではない高杯（同図3・4）で上下からはさむ形をとり、脚部でかさなるように積み重ねられている。



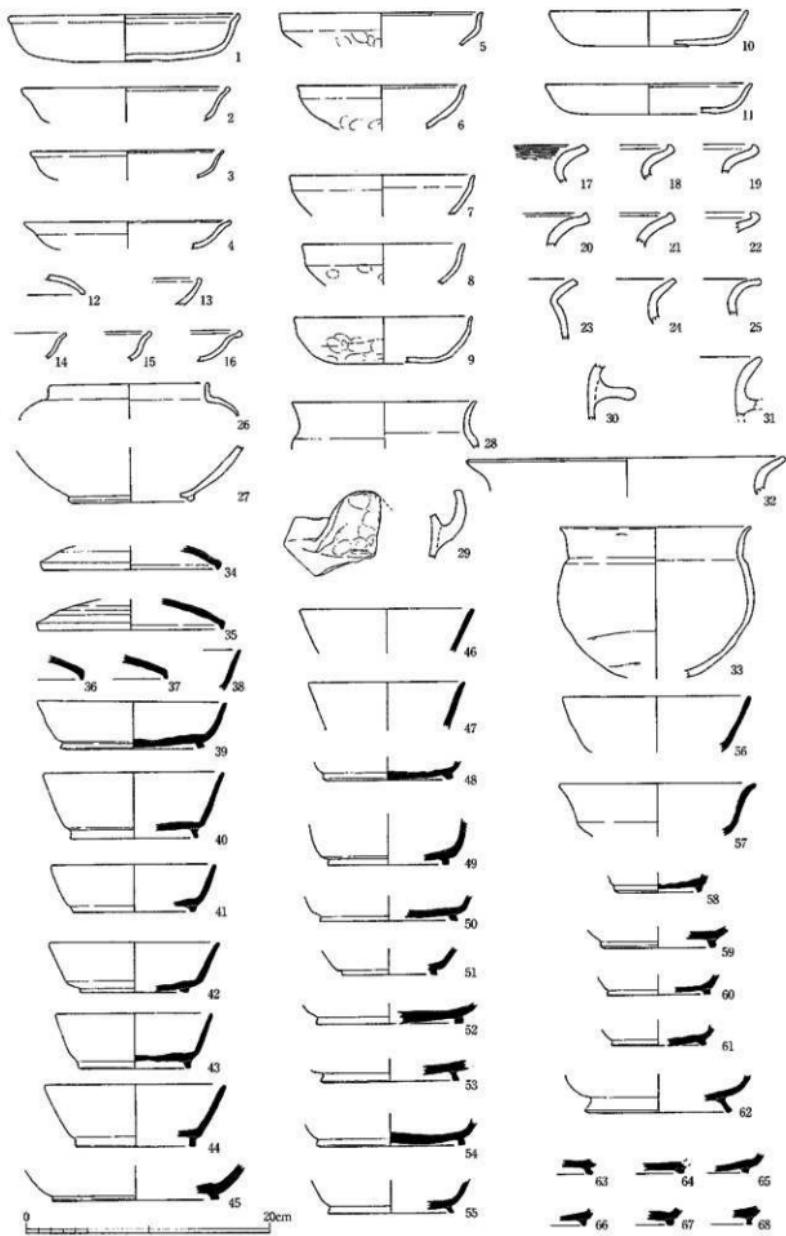
第67図 第6～8・23・24トレンチ出土土器実測図(1/4)

壺の内部全体に黄色土が充満していた。

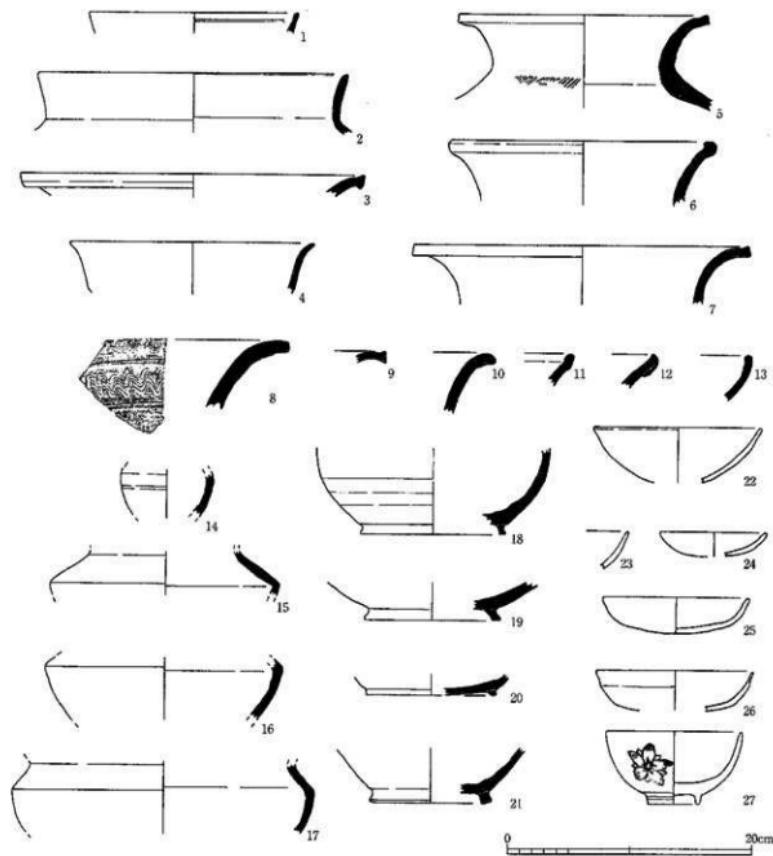
## 7. 出土遺物

シヨツカ古墳からの出土遺物は、盜掘により搅乱され破碎された断片となっているが、葬送儀礼に伴って配置された状態を比較的乱されることがないまま残ったものも若干あり、それ以外には周溝の埋積土より出土した遺物がわずかにある。

土器類では須恵器四耳壺、羨道部の須恵器壺、須恵器高杯などがあり、装身具ではガラス玉、金糸、垂飾部品、銀製帶金具、指環、武器では大(小)刀、刀子、鉄鎌、刀装具では大刀象嵌柄頭、同鞘尻金具、貴賎具、柄巻など、武具では挂甲小札類、馬具では鞍金具、轡、鐙、杏葉、雲



第68図 第6トレンチ南端搅乱部出土土器実測図（1）（1/4）



第69図 第6トレンチ南端搅乱部出土土器実測図（2）（1/4）

珠・辻金具、その他の金属製品、容器では漆塗籠棺がある。また埋葬施設の材として特徴的に利用された流紋岩質溶結凝灰岩（椎原石）がある。

#### （1）土器（第63～69図・表6～11）

土器は、閉塞石から前室にかけて堆積した搅乱土（第198～207層）出土の中世上器、須恵器、前室礫敷上面出土須恵器壺、羨道に埋められた須恵器壺とその1点に納められた高杯がある。その中で礫敷の壺、羨道の壺そして壺の中に納められた高杯などは出土状態から、この古墳の葬送礼に伴って用いられた土器である。また、外部では南北トレンチや東西トレンチの周溝堆積土出土土器、石室盗掘坑堆積土出土土器などがある。

表6 シショツカ古墳出土土器観察表(1)

表7 シシヨツカ古墳出土土器観察表(2)

排 番	器 種	出 土 場 所	層位 はか	法 量(cm)				特 徴	時 期
				山径	底径 (山径)	器高	その 他		
2	須恵器 無蓋 長脚高环	6トレンチ北側 部東側	底道部埋 土	19.5	46.6	49.30	体部人 後	は球形の体部に直立気味に立ち上がる脚部そして外反する口縁部がつく。口縁部は肥厚し上下に弧張して、特に下縁は斜め下に突出する腰をなす。口縁部内外両面に凹凸ナデ調整。内面は頸部以下底部まで同心円状タキであるが、底面より10cm位のあたりから別のタキと共に用いたため、斜線の間隔が広い円形刀口となり、施し方と並び、底面は16.5~17.0cm付近では横方向のナデ調整。外腹は頸部以下底部へむるまで施しタキがある。その後腰部から肩部へとし、腰部下手には部分的な凹凸ナデ調整。腰部は斜面で、それより上部より下手にかけて前方背の板状のT字を用いた第1次アヌが認められる。上位のものは1~2mmと細然、下位のものは3~5mmと幅広である。内腹は淡青灰色、外腹は全表面青灰色であるが、U縁部から体部下部にかけてに赤茶色を呈する。断面は外側のみられたに赤茶色と同様の色調である。	胸皿II 4・5
1	須恵器 無蓋 長脚高环	第65回1墓内		12.3	12.6	19.4	脚高 14.50	深みのある筒形の环部に細長い脚が付き、断続ながらの脚部が段を作り、2段3方の造りしがある。环部外側に2条の凸筋が巡る。上下の凸筋を整形した後、3本程度の細いヒゴ状の工具の先端で右上から左下にかけて長さ15~21cmの斜行縫を描く。描き始めは強いくび形をなし、左下へ斜めに長く引つれ、次第に細くなる。工具を容表面から離さず斜行縫を描く。次に相次いで泡詰させる。工具の先端は強くV字形をなし、左下へ斜めに長く引つれる。これを繰り返す。脚部は上の造りの腰の間に2条の凸筋が2条ある。腰の切り取り幅は4~10mmである。下段の脚部は斜行縫が最も幅広となる。环部は上縁8.3cm、高さ33.0cm、口径16.0cmの丸形容である。底部内部は淡青灰色、脚部は淡灰青色、外腹は淡灰青色、内腹は暗赤色、外腹は白色である。断面は白色微紅色、不規則な脚部下方にかけて濃い緑色の跡がかかる。崩上には白色微紅色を含む。	胸皿II 4
第66回	須恵器 無蓋 長脚高环	第65回1墓内		13.6	13.0	21.7	脚高 16.60	深みのある筒形の环部に細長い脚が付き、断続ながらの脚部が段を作り、2段3方の造りしがある。环部外側に2条の凸筋が巡る。上下の凸筋を整形した後、3本程度の束ねた細いヒゴ状の工具の先端で右上から左下にかけて15~20cmの斜行縫を描く。次に相次いで泡詰せる。工具を容表面から離さず斜行縫を描く。次に相次いで泡詰せる。工具の先端は強くV字形をなし、左下へ斜めに長く引つれる。これを繰り返す。脚部は上の造りの腰の間に2条の凸筋が2条ある。腰の切り取り幅は4~10mmである。下段の脚部は斜行縫が最も幅広となる。环部は上縁8.3cm、高さ33.0cm、口径16.0cmの丸形容である。底部内部は淡青灰色、脚部は淡灰青色、外腹は淡灰青色、内腹は暗赤色、外腹は白色である。断面は白色微紅色、不規則な脚部下方にかけて濃い緑色の跡がかかる。崩上には白色微紅色を含む。	胸皿II 4
	須恵器 無蓋 長脚高环	第65回1墓内		12.5	12.0	20.3	脚高 15.50	深みのある筒形の环部に細長い脚が付き、断続ながらの脚部が段を作り、2段3方の造りしがある。环部外側に2条の凸筋が巡る。上下の凸筋を整形した後、3本程度の束ねた細いヒゴ状の工具の先端で右上から左下にかけて15~21cmの斜行縫を描く。次に相次いで泡詰せる。工具を容表面から離さず斜行縫を描く。次に相次いで泡詰せる。工具の先端は強くV字形をなし、左下へ斜めに長く引つれる。これを繰り返す。脚部は上の造りの腰の間に2条の凸筋が2条ある。腰の切り取り幅は4~10mmである。下段の脚部は斜行縫が最も幅広となる。环部は上縁8.3cm、高さ33.0cm、口径16.0cmの丸形容である。底部内部は淡青灰色、脚部は淡灰青色、外腹は淡灰青色、内腹は暗赤色、外腹は白色である。断面は白色微紅色、不規則な脚部下方にかけて濃い緑色の跡がかかる。崩上には白色微紅色を含む。	胸皿II 4
	須恵器 無蓋 長脚高环	第65回1墓内		12.8	12.8	20.3	脚高 16.40	深みのある筒形の环部に細長い脚が付き、断続ながらの脚部が段を作り、2段3方の造りしがある。环部外側に2条の凸筋が巡る。上下の凸筋を整形した後、3~4本に束ねた細いヒゴ状の工具の先端で右上から左下にかけて長さ15~21cmの長さの斜行縫を描く。次に相次いで泡詰せる。工具を容表面から離さず斜行縫を描く。次に相次いで泡詰せる。工具の先端は強くV字形をなし、左下へ斜めに長く引つれる。これを繰り返す。脚部は上の造りの腰の間に2条の凸筋が2条ある。腰の切り取り幅は4~10mmである。下段の脚部は斜行縫が最も幅広となる。环部は上縁8.3cm、高さ33.0cm、口径16.0cmの丸形容である。底部内部は淡青灰色、脚部は淡灰青色、外腹は淡灰青色、内腹は暗赤色、外腹は白色である。断面は白色微紅色、不規則な脚部下方にかけて濃い緑色の跡がかかる。	胸皿II 4
	須恵器 無蓋 高环	第6トレンチ北側 部西側	第14~7層	11.6				肥厚する山脚部が直立気味に立ち上がり、深みのある器。	14世紀?
	土師器 小皿	6トレンチ北側 部西側	第63・88・99層	9.2		1.3		口部部1段ナデ。端部外腹に高台の名残の細い粘土縫の貼り付け。	12世紀後半~13世紀中葉
	瓦器碗 底部	6トレンチ北側 部西側	第63・88・99層		5.4			内底面に格子状縫。高台は低い三角形断面。	II-2~3
第67回	瓦器碗 底部	6トレンチ北側 部西側	第14~17層	15.2	2.7			浅い器で、底部外腹に高台の名残の細い粘土縫の貼り付け。	IV-1~2
	土師器 萬葉形	6トレンチ北側 部西側	第47層	9.7		0.7		内面に浅い状の粗いミガ。	平城III
	須恵器 环甕	7トレンチ東側	第56层					比較的平たい天井部。回転ヘラケズリ、未調査。	
	土師器 小皿	7トレンチ東側	第47层	9.7		0.7		口縁部立ち上がりはほとんど片立たない円板状の器。	中世
	瓦器碗 口部	7トレンチ東側	第47层					器壁の薄い器。内面はU縁部に至るまで腹方向に密にミガ。	III

表8 シショツカ古墳出土土器観察表(3)

番 号	器 種	出 土 個 所	層位 はか	法 量(cm)				特 徴	時 期
				口徑	底径 (高台部)	高 さ	その 他		
9	瓦器碗 口縁部	7トレンチ東側	第47層					斜壁の薄い器。内面は口縁端部に至るまで横方向に密にミガキ。	III
10	土器器 縫合部	7トレンチ東側	第51層					外周辺方向の細かいハケメ。内面はハケメの後ナデ。底端面はナデ。	8世紀代
11	須恵器 壺身	7トレンチ西側	第61層	10.6				口縁端部丸く、立ち上がりは近く内傾する。	南朝II-5
12	土器器 口縁部	8トレンチ東側	第34層					内傾し上端面をなす器。壺または瓶か。調整小羽。	平城II-1 III
13	土器器 壺山縁部	8トレンチ東側	第43層					内傾し上端面をなす器。壺または瓶か。調整小羽。	平城II-1 III
14	須恵器 長颈瓶 前部	8トレンチ東側	第43層					回転ナデ調整	陶邑III-V
15	土器器 壺	8トレンチ東側	第34層					裏Bの記手。	7世紀後半 -8世紀代
16	土器器 壺山縁部	8トレンチ東側	第43層	18.0				くの字形に近く斜方にのびる口縁部をなす。調整不明。	
17	須恵器 壺	8トレンチ東側	第43層	9.8	3.5			大井部丸みがあり、端部は内側に曲をなす。大井部はヘラキリのまま。	陶邑II-6
18	須恵器 壺	8トレンチ東側	第34層	15.8				両端部やや内側へ屈曲する	陶邑IV-2
19	須恵器 壺身底部	8トレンチ東側	第43層		8.8			底部端やや中央寄りに低い高台がつく	陶邑IV-3 ~4
20	須恵器 壺身底部	8トレンチ東側	第43層		10.4			底部端に中央寄りの高台がつく	陶邑IV-2 ~3
21	須恵器 壺身	8トレンチ東側	第43層		11.0			底部端から中央寄りに高い高台がつく	陶邑III-3 IV-2
22	須恵器 壺身	8トレンチ東側	第43層	15.1	4.05 ~ 4.15			L字形高台丸く仕上げ、やや中央寄りにハの字形の高台がつく。 底部外側回転ヘラケリ。	陶邑IV-2 ~3
23	須恵器 壺身 口縁部	8トレンチ東側	第43層	16.0				無蓋高杯。体部外側に文様なく1条の文様がある。	陶邑II-2 ~5
24	須恵器壺	8トレンチ東側	第43層	19.8				歩くやかに外反する口縁部、端部は内側に斜、また上端面をなす。体部外側平行叩き、部分的に毎日調査。体部内凹回転印と後ナデ。	陶邑III-2 ~IV-2
25	須恵器 壺山縁部	8トレンチ東側	第43層					歩くやかに外反する口縁部、端部が内側に巻き込み、外端面をなす。	陶邑III-1 IV-1
26	須恵器 平底化粧	8トレンチ東側	第34層					断面は四角形に曲取り。	陶邑III-1 IV
27	瓦器碗 底部	8トレンチ東側	第34層		4.0			わずかに高台をとどめる器壺の薄い器。調整不明。	12世紀後半 -14世紀初
28	瓦器碗 底部	8トレンチ東側	第25層		5.4			わずかに高台をとどめる器壺の薄い器。調整不明。	13世紀後半-14世 紀初
29	磁器碗	8トレンチ東側	第34層		3.1			青磁碗。波佐見窯系。	18世紀
30	磁器碗	8トレンチ東側	第34層		4.2			青磁碗。波佐見窯系。	18世紀
31	須恵器 壺身底部	8トレンチ西側	第31層		7.6			横底の高台がハの字形につく。内端面が盛坡面となる。	陶邑IV-~ V
32	瓦器碗 口縁部	8トレンチ西側	第31層	8.2				外端口縁部のコナガが範囲広く、口縁部以下は指オサエのまゝ。内端粗く織らにミガキ。	III-3-IV-3
33	瓦器碗 口縁部	8トレンチ西側	第31層	13.2				内端部に粗いミガキ。	III-3-IV-3
34	土器器 小豆 口縁部	8トレンチ西側	第31層					やや肥厚する口縁部をなす、いわゆる「へそ豆」にみられるもの。	15世紀
35	土器器 小豆	8トレンチ西側	第30層		8.2	1.3		口縁部は底部から歩くやかに外斜方にのび、端部は丸くおさめる。	13世紀
36	土器器 小豆	8トレンチ西側	第31層		9.9	1.0		口縁部は底部から歩くやかに外斜方にのび、端部は丸くおさめる。	13世紀
37	瓦器碗 口縁部	2トレンチ	第5-10層					内部に太く粗いミガキ。	III-3-~ IV-3
38	須恵器 壺身	2トレンチ	第8層	11.4				内部のかえりは口縁端部より下方に張り出す。	陶邑III-1
39	須恵器 壺身	2トレンチ	第8層	13.3				大井部半らに近く、端部の脛曲は歩くやか。	陶邑IV-3
40	須恵器 壺身	2トレンチ	第8層					内部のかえりが口縁端部より下方に出る。	陶邑III-1 ~2
41	須恵器 壺身	2トレンチ	無8層					内部丸みをもつがやや扁平気味。内傾する短い立ち上がりをもつ。底部外側はヘラケリ。	陶邑III-1 ~2
42	須恵器 壺身	2トレンチ	無8層	11.8				外反する口縁端部が肥厚し下方に短く伸びる。	陶邑II-5
43	須恵器 壺身	2トレンチ	第8層	16.3					

表9 シシヨツカ古墳出土土器観察表(4)

補 番 号	器 種	出 土 場 所	基 位 は か	法 量(cm)			特 徴	時 期
				口径	底径 (高さ)	器高		
1	土師器 环身	6トレンチ南端	第270～ 276層	17.1		3.9	口縁部が実底から丸みをもって斜上方に立ち上る環A。縁部は堅く、突き込み、内側に沈線が温る。蓋部外側はヘラミタス リ。口縁部以下底部までヨコナデ。口縁部内面に斜放射状凹 文。	平成Ⅱ～ Ⅲ
2	土師器 环身	6トレンチ南端	第270～ 276層	17.0			口縁部が底部から丸みをもって斜上方に立ち上る環A。調 整不詳。	平成Ⅱ～ Ⅲ
3	土師器 环身	6トレンチ南端	第270～ 276層	15.8			口縁部が底部から丸みをもって斜上方に立ち上る環A。調 整不詳。	平成Ⅱ～ Ⅲ
4	土師器皿	6トレンチ南端	第270～ 276層	17.0			口縁部が底部から丸みのつて斜上方に立ち上る環A。口 縁部の内厚は小さめ。口元にヨコナデ。内外面ヨコナデ。	平成Ⅱ～ Ⅲ
5	土師器皿	6トレンチ南端	第273層	16.8			内厚すら張を描いて立つて口縁部をもつ環C。縁部内端面をな す。口縁部ヨコナデ。以下は指オサエ。	平成Ⅱ～ Ⅲ
6	土師器皿	6トレンチ南端	第270～ 276層	13.8			内厚すら張を描いて立つて口縁部をもつ環C。縁部内端面をな す。口縁部ヨコナデ。以下は指オサエ。	平成Ⅱ～ Ⅲ
7	土師器皿	6トレンチ南端	第270～ 276層	15.2			内厚すら張を描いて立つて口縁部をもつ環C。縁部内端面をな す。調整不詳。	平成Ⅱ～ Ⅲ
8	土師器皿	6トレンチ南端	第273層	20.0			内厚すら張を描いて立つて口縁部をもつ環C。縁部内端面をな す。口縁部ヨコナデ。以下はヘラミタス。	平成Ⅱ～ Ⅲ
9	土師器皿	6トレンチ南端	第270～ 276層	14.6		3.8	内厚すら張を描いて立つて口縁部をもつ環C。縁部内端面をな す。口縁部ヨコナデ。以下は指オサエ。	平成Ⅱ～ Ⅲ
10	土師器皿	6トレンチ南端	第270～ 276層	16.2		3.0	ゆるやかに外反し縁部をやや内傾気味に丸く仕上げる環A。 調整不詳。	平成Ⅱ～ Ⅲ
11	土師器皿	6トレンチ南端	第270～ 276層	17.0		2.5	ゆるやかに外反し縁部をやや内傾気味に丸く仕上げる環A。 調整不詳。	平成Ⅱ～ Ⅲ
12	土師器 环身	6トレンチ南端	第273層				天津部からさらかに下る端部を丸く仕上げる環Bの蓋。	平成Ⅱ～ Ⅲ
13	土師器皿 口縁部	6トレンチ南端	第273層				内厚すら張を描いて立ち上る口縁部をもつ環A。蓋部は内傾し、 外端面をなす。内外面ヨコナデ。	平成Ⅱ～ Ⅲ
14	土師器皿 口縁部	6トレンチ南端	第272層				底部から内厚して立ち上がり、口縁部は弧を描いて外反し、 端部内側に丸める环Aまたは環A。口縁部内面に斜放射状凹 文。	平成Ⅱ～ Ⅲ
15	土師器皿 口縁部	6トレンチ南端	第272層				底部から内厚して立ち上がり、口縁部は弧を描いて外反し、 端部内側に丸める环Aまたは環A。滴管不詳。	平成Ⅱ～ Ⅲ
16	土師器皿 环身 口縁部	6トレンチ南端	第272層				底部から内厚して立ち上がり、口縁部は弧を描いて外反し、 端部内側に丸める环Aまたは環A。滴管不詳。	平成Ⅱ～ Ⅲ
17	土師器皿 口縁部	6トレンチ南端	第272層				くの字形に外反する口縁部をもつ蓋。口縁部をわざかに巻 き込み外端面をなす。内面に横方向のハラメ、外面ヨコナデ。	7世紀後半 ～8世紀前半
18	土師器皿 口縁部	6トレンチ南端	第270～ 276層				くの字形に外反する口縁部をもつ蓋。口縁部をわざかに巻 き込み外端面をなす。内面に横方向のハラメ、外面ヨコナデ。	7世紀後半 ～8世紀前半
19	土師器皿 口縁部	6トレンチ南端	第270～ 276層				くの字形に外反する口縁部をもつ蓋。口縁部をわざかに巻 き込み外端面をなす。調整不明。	7世紀後半 ～8世紀前半
20	土師器皿 口縁部	6トレンチ南端	第270～ 276層				くの字形に外反する口縁部をもつ蓋。口縁部をわざかに巻 き込み外端面をなす。調査不明。	7世紀後半 ～8世紀前半
21	土師器皿 口縁部	6トレンチ南端	第270～ 276層				くの字形に外反する口縁部をもつ蓋。口縁部をわざかに巻 き込み外端面をなす。調査不明。	7世紀後半 ～8世紀前半
22	土師器皿 口縁部	6トレンチ南端	第270～ 276層				くの字形に外反する口縁部をもつ蓋。口縁部を内へ折り曲 げる。調査不明。	7世紀後半 ～8世紀前半
23	土師器皿 口縁部	6トレンチ南端	第273層				くの字形に外反し、口縁部の内側への巻き込みが目立たず、 小さな外端面をなす。	8～9世紀
24	土師器皿 口縁部	6トレンチ南端	第270～ 276層				くの字形に外反し、口縁部の内側への巻き込みが目立たず、 小さな外端面をなす。滴管不詳。	8～9世紀
25	土師器皿 口縁部	6トレンチ南端	第273層				くの字形に外反し、口縁部の内側への巻き込みが目立たず、 小さな外端面をなす。滴管不詳。	8～9世紀
26	土師器皿 延縁蓋	6トレンチ南端	第273層	13.2			肩の付いた体部に直立する短い口縁部がぐく重A。口縁部内 外にヨコナデ。ほか構造不明。	平成Ⅱ
27	土師器皿 蓋底部	6トレンチ南端	第270～ 276層		10.3		低い高台が重Aの底部。外面に横方向のヘラミタス残る。平成Ⅱ	
28	土師器皿 蓋底部	6トレンチ南端	第270～ 276層		15.2		軸部から直立気味に立ち上り口縁部は外反し、上に輕い、 口縁部内面ヨコナデ。ほかは調整不明。	7世紀後半 ～8世紀代
29	土師器皿 把手	6トレンチ南端	第270～ 276層				重または要(猶)三角状把手。	8世紀代
30	土師器皿 蓋底部	6トレンチ南端	第270～ 276層				口縁部下に水平につく脚部。	7世紀後半 ～8世紀中頃
31	土師器皿 蓋口縁部	6トレンチ南端	第273層				外反する口縁部下に背がつく。	7世紀後半 ～8世紀中頃
32	土師器皿 蓋口縁部	6トレンチ南端	第270～ 276層	26.2			重蓋の外反する口縁部。	7世紀後半 ～8世紀中頃
33	土師器皿	6トレンチ南端	第270～ 276層	15.6			蝶形の体部から口縁部が直立気味に立ち上り、縁部は軽く 外反し小さく丸める。蓋部外側はヨコナデ、体部は指オサ エの喰(ぬ)テナ。	7世紀前半 ～8世紀代

表10 シヨツカ古墳出土土器観察表(5)

種 類 番 号	形 種	川 土 調 所	層位はか	法 蓋(cm)				特 徴	時 期
				口径	底径 (高台径)	高さ	その 他		
34	須恵器 环唇	6トレンチ南端	第273層	144				縁部は内方へ屈曲させている。	陶器IV-1 ~2
35	須恵器 环唇	6トレンチ南端	第270~ 276層	152				縁部は内方へ屈曲させている。	陶器IV-1 ~2
36	須恵器 环唇	6トレンチ南端	第273層					縁部は内方へ屈曲させている。	陶器IV-1 ~2
37	須恵器 环唇	6トレンチ南端	第273層					縁部は内方へ屈曲させている。	陶器IV-1 ~2
38	須恵器 环身口縁部	6トレンチ南端	第270~ 276層					逆八の字形に外反する口縁部。	陶器III-3 ~IV
39	須恵器 环唇	6トレンチ南端	第273層	154	11.0	7.0		ゆるやかにS字形を描いて外反する口縁部。底部肩や内腹面に幅広の高台がつき、内腹面で接続する。底部外縁部にナメの跡にT字があたった痕跡あり。	陶器IV-3
40	須恵器 环唇	6トレンチ南端	第273層	148	10.4	5.3		逆八の字形に外反する高い口縁部。北側約高く高い高台が底縁部付近につく。	陶器IV-3 ~4
41	須恵器 环唇	6トレンチ南端	第273層	134	10.0	3.9		やや内唇気味に立ち上がる口縁部。底縁部に低い幅広の高台がつく。	陶器IV-3
42	須恵器 环唇	6トレンチ南端	第270~ 276層	139	8.8	4.1		逆八の字形に外反する口縁部。底縁部よりやや中心寄りに低い幅広の高台がつく。	陶器IV-1 ~2
43	須恵器 环唇	6トレンチ南端	第273~ 275層	129	4.2	4.5		直線的に外反する口縁部。やや幅の狭い高台が底縁部につく。	陶器IV-3 ~4
44	須恵器 环唇	6トレンチ南端	第270~ 276層	150	9.8	5.1		やや内唇気味に外斜方へのびる口縁部。底縁部に直立する幅広の高台がつく。外縁部が接地面となる。	陶器IV-3 ~4
45	須恵器 环身口縁部	6トレンチ南端	第273層		138			底縁部近くに幅広の低い高台が逆八の字形につく。底縁部はほぼ平底。	陶器IV-3 ~4
46	須恵器 环身 口縁部	6トレンチ南端	第270~ 276層	144				逆八の字形にゆるやかに外反する口縁部。	陶器IV
47	須恵器 环身 口縁部	6トレンチ南端	第270~ 276層	128				逆八の字形にゆるやかに外反する口縁部。	陶器IV
48	須恵器 环唇 口縁部	6トレンチ南端	第270~ 276層	154				内唇気味に立ち上がる口縁部。	陶器IV
49	須恵器 环唇 口縁部	6トレンチ南端	第271~ 272~276~ 280層	111	4.2			S字形のカーブを描いて外反する口縁部。	陶器III-2 ~IV
50	須恵器 环身底部	6トレンチ南端	第270~ 276層		118			底縁部に低い幅広の高台が逆八の字形につく。内端部が接地面となる。	陶器IV-3 ~4
51	須恵器 环身底部	6トレンチ南端	第270~ 276層		10.0			直立気味に立ち上がる体部。底縁部や中心寄りに幅広の高台がつく。接地面は平坦面をなす。	陶器IV-2 ~3
52	須恵器 环身底部	6トレンチ南端	第273層		11.4			底縁部よりやや中心寄りに幅広の高台がつく。底縁部は平底面をなす。	陶器IV-2 ~3
53	須恵器 环身底部	6トレンチ南端	第270~ 276層		7.8			底縁部よりやや中心寄りに幅広の高台がつく。接地面は平底面をなす。	陶器IV-2 ~3
54	須恵器 环身底部	6トレンチ南端	第270~ 276層		12.0			底縁部よりやや中心寄りに幅広の高台がつく。接地面は平底面をなす。	陶器IV-2 ~3
55	須恵器 环身底部	6トレンチ南端	第270~ 276層		11.4			ハの字形に開く細く高い高台が底縁部より中心寄りにつく。	陶器IV-1 ~2
56	須恵器 环身底部	6トレンチ南端	第270~ 276層		12.3			やや内唇気味に立ち上がる口縁部。底縁部に低い幅広の高台がつく。	陶器IV-3
57	須恵器 环身底部	6トレンチ南端	第270~ 276層		10.4			ハの字形に開く細く高い高台が底縁部付近につく。	陶器IV-3 ~4
58	須恵器 小型盒 底部	6トレンチ南端	第270~ 276層		7.0			底縁部に低い高台がつく。	陶器IV
59	須恵器 环身底部	6トレンチ南端	第270~ 276層		9.4			底縁部に幅広でやや高い高台がハの字形につく。内端部が接地面となる。	陶器IV-3 ~4
60	須恵器 环身底部	6トレンチ南端	第273層		8.4			底縁部に低い高台がつく。底縁部は平底面をなす。	陶器IV-3
61	須恵器 环身底部	6トレンチ南端	第270~ 276層		7.8			底縁部に低い高台がつく。底縁部は平底面をなす。	陶器IV-3
62	須恵器 环身底部	6トレンチ南端	第273層		12.0			ハの字形に開く細く高い高台が底縁部より中心寄りにつく。	陶器IV-1 ~2
63	須恵器 环身底部	6トレンチ南端	第270~ 276層					ハの字形の細く低い高台が底縁部よりやや中心寄りにつく。	陶器IV-3 ~4
64	須恵器 环身底部	6トレンチ南端	第270~ 276層					低く幅広の高台が底縁部につく。	陶器IV-4
65	須恵器 环身底部	6トレンチ南端	第273層					底縁部よりやや中心寄りに幅広の高台がつく。	陶器IV-2 ~3
66	須恵器 环身底部	6トレンチ南端	第270~ 276層					高台が底縁部につく。	陶器IV-3 ~4
67	須恵器 环身底部	6トレンチ南端	第270~ 276層					底縁部に低い幅広の高台がつく。	陶器IV-3

表11 シシヨツカ占墳出土器観察表(6)

番 号	器 種	出 土 場 所	層位はか	寸 量 (cm)				考 證	時 期	
				口径	底径 (高台径)	器高	その 他			
68	須恵器 身部	6トレンチ南端	第270～ 276層					細い高台が底盤部付近直立するようにつく。	南邑N-3 ～4	
1	須恵器蓋 口縁部	6トレンチ南端	第270～ 276層	17.2				口縁滑溝上に面をなす短縦審か。内面に沈線がある。		
2	須恵器蓋 口縁部	6トレンチ南端	第273層	25.4				短く外反して立ち上がる口縁部。縁部内側に面をなす。直口 縁の可能性もあり。	南邑II～ IV	
3	須恵器蓋 口縁部	6トレンチ南端	第259～ 268・269 層	28.2				外反する口縁部で縁部が肥厚し、外縫角をなす。	陶邑IV	
4	須恵器环 身口縁部	6トレンチ南端	第273層	20.0				ゆるやかに外反する口縁部。鉢の可能性もあり。	陶邑IV	
5	須恵器蓋 口縁部	6トレンチ南端	第270～ 276層	20.5				外反する口縁部で縁部が肥厚し、外縫する角をなす。外縫 印記あり。	陶邑IV	
6	須恵器蓋 口縁部	6トレンチ南端	第270～ 276層	22.0				ゆるやかに外反する口縁部で、縁部がわずかに肥厚して内縫 をなす。	陶邑IV	
7	須恵器蓋 口縁部	6トレンチ南端	第270～ 276層	26.0				外反する口縁部で縁部が肥厚し、外縫する角をなす。	陶邑IV	
8	須恵器蓋 口縁部	6トレンチ南端	第273層					ゆるやかに外反する口縁部から外縫面をなす口縁部にいたる。 外縫に突起V字状の上下の条線に挟まれて波状文の文様審がある。	陶邑I・4・ 5～II	
9	須恵器蓋 口縁部	6トレンチ南端	第270～ 276層					外反する口縁部で縁部が肥厚し、外縫する角をなす。	陶邑IV	
10	須恵器蓋 口縁部	6トレンチ南端	第270～ 276層					ゆるやかに外反し、縁部丸く仕上げる。		
11	須恵器蓋 口縁部	6トレンチ南端	第270～ 276層					外反する口縁部の縁部が直立して立ち上がり丸く仕上げる。		
12	須恵器蓋 口縁部	6トレンチ南端	第270～ 276層					口縁端部が肥厚し、内縫して上縫接をなす。		
13	須恵器蓋 口縁部	6トレンチ南端	第270～ 276層					内縫する口縁部で、縁部は丸い。	陶邑IV-1 ～3	
14	須恵器小 型全体部	6トレンチ南端	第270～ 276層					化部 最高 径7.7	やや肩の強る小型の長颈壺の全体部。外縫に沈線巡る。	陶邑IV
15	須恵器蓋 肩部	6トレンチ南端	第270～ 276層					化部 最高 径19.0	肩の張る全体部。広口審か。	陶邑III-3 ～IV-3
16	須恵器蓋 全体部	6トレンチ南端	第270～ 276層					化部 最高 径19.4	肩の張る全体部。	陶邑III-3 ～IV-3
17	須恵器蓋 全体部	6トレンチ南端	第270～ 276層					化部 最大 径24.0	肩の張る全体部。広口審か。	陶邑III-3 ～IV-3
18	須恵器蓋 底部	6トレンチ南端	第270～ 276層	11.8				幅の狭い低い高台がハの字形につく。接地面は平坦である。	陶邑IV-2・ 3～V	
19	須恵器蓋 底部	6トレンチ南端	第270～ 276層	11.2				比較的高い幅広の高台がハの字形につく。接地面は平坦である。	陶邑IV-2・ 3～V	
20	須恵器蓋 底部	6トレンチ南端	第273層	10.0				低く小さい高台がハの字形につく。外縫部が接地面となる。	陶邑IV-2・ 3～V	
21	須恵器蓋 底部	6トレンチ南端	第273層	10.6				幅広の高い高台がハの字形につく。内縫部が接地面となる。	陶邑IV-2・ 3～V	
22	瓦芯掩	6トレンチ南端	第273層	13.8				薄い部盤。底の丸みの形態をとどめる。内外縫の変遷は不明。 月1～2		
23	瓦芯掩 口縁部	6トレンチ南端	第273層					薄い部盤。底の丸みの形態をとどめる。内外縫の変遷は不明。		
24	上部器 小皿	6トレンチ南端	第270～ 276層	8.8		2.0		丸みのある底盤から内縫気味にのびる口縁部。縁部は丸く仕 上げる。調整不跡。		
25	上部器 小皿	6トレンチ南端	第273層	11.1		3.0		深みのある底盤。口縁部ヨコナタ。	13世紀	
26	上部器 小皿	6トレンチ南端	第270～ 276層	12.9		3.3		深みのある底盤。口縁部強いヨコナタにより外反し縁部丸く仕 める。	13世紀	
27	底器脚	6トレンチ南端	第273層	11.1	4.2	6.0		五瓣花文鏡。蓋付無地で使用時に蓋付をすり減らし。波底見 審系。	18世紀	

撓乱土出土土器（第 63 図 1～12） 墳丘南斜面の撓乱部分から出土した染付磁器碗（1）以外の土器類は、すべて石室内の撓乱土（第 207 層）より出土している。この土層では 13～14 世紀の土器（2～6）が、葬送の儀礼に用いられた須恵器の破片（7～12）とともに出土している。

石室礫敷面出土土器（第 64 図） 閉塞石の北側の礫敷に接地し、ほぼ 1 個体が腰高の均齊の取れた器で 6 世紀後半と考えられる。

羨道部出土土器（第 45・46 図） 羨道入口から 2.0～2.2 m で、羨道両側壁際に接して正立状態で埋められた甕と、西側の甕に納められていた高杯である。これらの土器は、出土状態からみて葬送の最終的な段階で、一括して埋置されたものである。高杯は脚部が全高に占める割合が、74.7%（1）、76.6%（2）、76.3%（3）、80.7%（4）といずれも長脚化のピークを示している。また透かし窓の切り取りの際に付いた杯部底面の金属製工具による鋸い刃先の痕跡や砂粒の目立たない精良な胎土、端部や縁のシャープさと均齊のとれた器形は、製作後ほかに用いられることなく古墳に納められたものと思われる。これらの土器を一括して 6 世紀後半～末とみたい。

周溝出土土器（第 67 図） 周溝内出土の土器はほとんどが中世の耕作土の堆積層から出土しているが、周溝の底面で出土した土器もある。撓乱のため残存状態はよくなかったが、墳丘東側第 1 段テラス面の名残と思われる窪みに堆積した、黒褐色砂質土（第 7 トレンチ東側断面第 53 図第 56 層）出土の須恵器杯蓋（6）、西側周溝底面の褐色粘質土（第 7 トレンチ西側断面第 53 図第 64 層）出土の須恵器杯身（11）、同 24 トレンチの褐色粘質土（第 54 図第 8 層）出土の須恵器（38～43）、南側周溝の黒色土（第 8 トレンチ東側第 53 図第 43 層）出土の上師器（13・14）、須恵器（17・19～25）がある。これらのうち西側周溝の須恵器杯身（11）は他に混入する遺物ではなく、古墳の時期の一端を示す 6 世紀後半と考えられる。一方、第 8 トレンチの須恵器は第 6 トレンチの古墳周溝堆積土（第 278 層）に連続する土質であり、それは周溝の埋没を示すもので、時期的には 7 世紀末～8 世紀と思われる。24 トレンチもまた同様の須恵器を含んでいる。その他の土器類は以上の土層より上位の堆積土より出土しており、8 世紀以降中世～近世に至る耕作土に混入したものである。

前面テラス状施設削平盛土出土土器（第 68・69 図） 第 6 トレンチ南端部テラスを削った後の盛土中から出土した土師器・須恵器・瓦器などである。

シヨツカ古墳の南北縦断面を観察するトレンチとして設定した第 6 トレンチでは厚さ 0.4～0.5 m の新旧耕土・床土を除くと、シヨツカ古墳の墳丘第 1 段幅より南へ 16.0 m 付近の T.P.117.4 m から、前面テラス状施設裾の 22.0 m 付近の T.P.115.6 m に至る 6.0 m 間に後世の棚田の拡張状況を示す堆積土が観察される。これら一連の盛土は古墳の前面テラス状施設の盛土を北から南にかけて斜めに断ち切る形で堆積する。堆積土は黄褐色系の砂質土・粘質土で、10.0～50.0 cm 大の石を多量に含んでいる。棚田造成の際の石積みが 4 段ほど北側斜面に認められる（第 276 層の南斜面に積み上げられた石積み）。また、その後南へと繰り足して棚田の拡張が行われ（第 272～275 層）、それが最終的に現在の石積みとなっている。これらの堆積

土からはコンテナ 4 杯分の奈良時代の土師器・須恵器、中世の瓦器、近世の磁器碗、縄文時代サヌカイト製石器などが、第 272 ~ 275 層を中心に出土した。土器は、7 世紀後半から 18 世紀に及ぶ上器類で、量的には 8 世紀代の土師器・須恵器が圧倒的に多い。しかし 13 世紀代の瓦器や、18 世紀の磁器碗が少量ながら出土しているので、この部分の一連の盛土は最終的に近世の開墾によるものと考えられる。

#### 埋葬施設内出土遺物

第 57 図に示した石室内堆積十層の第 207・208 層より出土した遺物である。これらの上層は、奥室・前室とともに徹底的に攪乱され、盗掘坑下まで掻き出されて溜まつたものである。当然のことながら、本来の副葬位置、其伴状態を保つ遺物ではない。破片の多くは上記の土壤を慎重に水洗いして採取した。その中で仕切石と閉塞石の間の隙間に銹着した鏡板、挂甲小札、鐵鍼などの金属製品は、四耳壺とともに当初の位置を辛うじて保ったと考えられる。

#### 装身具（第 70 図）

銀製空玉（1）は厚さ 0.25mm の薄板を用い、径 5 ~ 6mm の球体を形づくった製品が半割れ状態となったその破片である。内面に半球体 2 つを接合した痕跡が認められる。

瓔珞鎖（2 ~ 7）は直径 0.92 ~ 1.69mm の銅線を 2 本合わせ、撓って径 1.38 ~ 2.16mm の鎖としている。一端に 3.5 ~ 4.0mm の環を得ている破片がある。

金銅製小環（8）は径 1.0mm の銅線を用いて、径 4.0 ~ 5.0mm の環としている。銅線両端の重なりの状態から燃りが欠けていることが分かる。垂飾に用いられたものと考えられる。

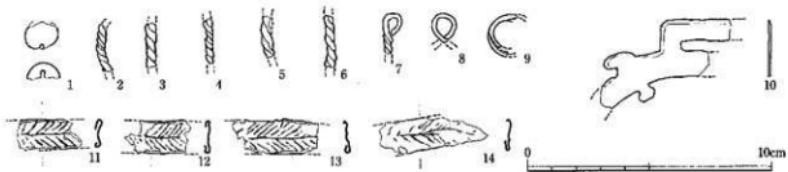
銀製環（9）は径 0.65mm の銀製を螺旋状に巻いて径 7.0mm の環としたものの破片である。これも垂飾の一部と思われる。

銀製帯飾（10）は、鈎板に付ける垂飾金具で、ハート形垂飾の円弧をなす肩部から幅 5.0mm の帯状の懸垂部の破片である。肩部には下向する短い髭がまた内側には滴状の飾りが付く。懸垂部上辺からハート形部の下辺までは 1.15cm を測る。他に細破片があるが接合できるものはない。

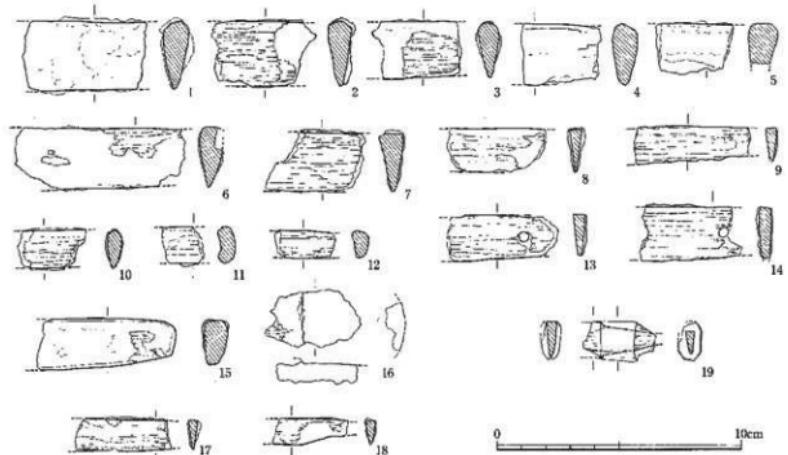
金銅製指環（11 ~ 14）は、幅 8.0 ~ 9.0mm の金薄板を両端から内側に 1 回程度折り曲げて基盤の銅の薄板に固定させている。表面には 5 本 / 5.0mm の綾杉文を打ち出している。残存長は 2.4 cm、1.3cm、1.1cm、1.8cm を測る。

金糸（図版 115）は金の薄板を幅 1.0mm ほどに裁断した截金を螺旋状に巻いている。幅は大きいもので 5.0mm あるが、その半分くらいのものもある。また同じものでも幅狭となる部分もある。最長 15.0cm に達する破片がみられる。

ガラス玉（図版 108）は、扁平な円形のいわゆる棗玉と円筒形の管玉があるが、前者が圧倒的に多い。濃紺色のものは 909 点（うち完形でないもの 53 点を含む）と最多で、径 2.00 ~ 2.84 mm・厚さ 1.45 ~ 1.95mm と小形の玉である。緑色は 61 点あり、径 2.40mm・厚さ 0.9mm の小形、径 2.67 ~ 2.97mm・厚さ 1.82 ~ 2.7mm の中形、径 3.95mm・厚さ 2.22mm の大形がある。黄色は 46 点で、径 2.54・厚さ 1.19mm の小形、径 2.67mm・厚さ 1.68mm の中形、径 3.69mm・厚さ 2.48



第70図 装身具類実測図 (1/1)



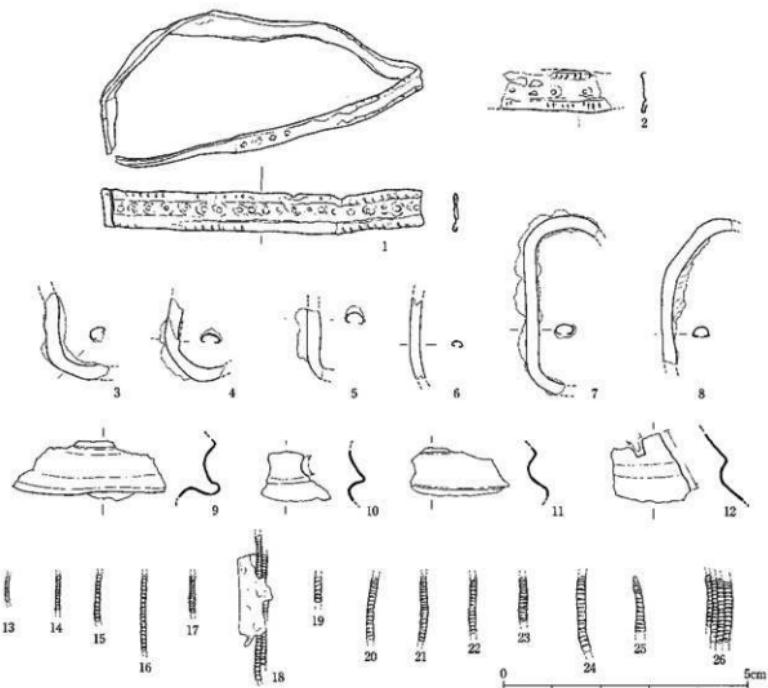
第71図 鉄刀・刀子類実測図 (1/2)

mmの大形がある。青色は35点あり、径2.66mm・厚さ1.18mmの小形、径2.86mm・厚さ1.79mmの中形、径4.66～5.61mm・厚さ2.73～3.29mmの大形がある。黄緑色は16点を数え、径3.17～3.24mm・厚さ1.53～1.66mmの小形と径4.23～4.65mm・厚さ2.15～3.48mmの大形がある。それらの総計は1067点となる。このほかに、長さ2.26～2.50mm・径1.95～1.99mm・孔径0.80mm前後の濃紺色の管玉3点がある。

武器類 鉄刀・刀子・刀装具・鉄鎌などがある。

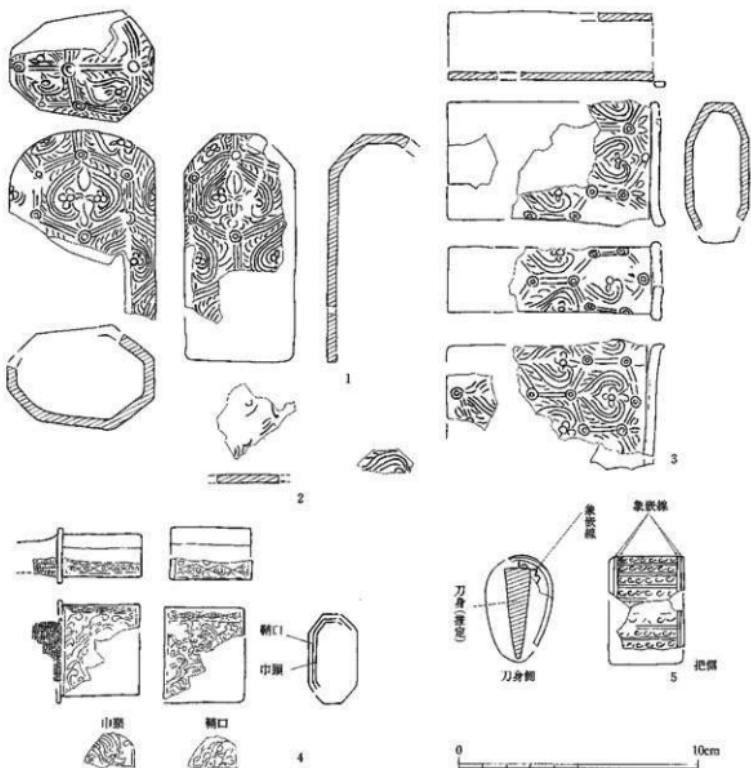
#### 鉄刀（第71図）

刀身や茎の破片が出土している。(1)は残存長5.0cm、最大幅2.9cm、背幅1.0cmで全体に木質が残る。背は上に丸みをもつ。鏽彫れしているが、破面に1.0cm前後の薄い鉄板を数枚重ねて半身の鉄板とし、これを2枚合わせて刀身を成している状態がうかがえる。(2)は残存長4.2cm、



第72図 刀装具類実測図 (1/1)

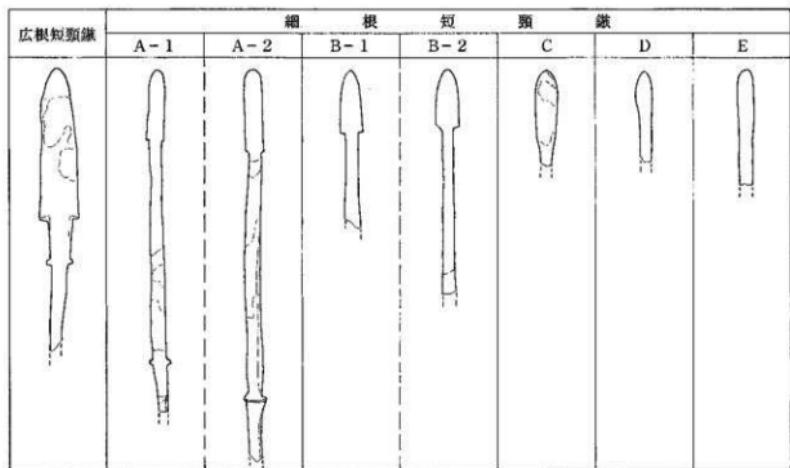
最大幅 2.7cm、背は上に丸みをもつ。破面には 2 枚の鉄板を張り合わせて、刀身をなしている様子がうかがえるが、半身をなす薄い鉄板の枚数は分からぬ。全体に木質を残す。(3)は残存長 3.5cm、最大幅 2.3cm、背幅 0.8cm、背は上に丸みをもつ。破面に鉄板を合わせ刀身をなしている状態がかろうじてうかがえる。木質が全体に残る。(4)は残存長 3.2cm、最大幅 2.5cm、背幅 0.9cm、背は上に丸みをもつ。背表面の木質の刺がれたところには鉄板を重ねた合わせ目がかろうじてうかがえる。(5)は残存長 3.1cm、残存最大幅 1.9cm、背幅 1.3cm、刃部を欠く。背は上面が平坦である。(6)は残存長 6.9cm、最大幅 2.6cm、背が欠けているが、背幅 1.0cm 程度と思われる。破面に鉄板の剥がれた亀裂がみえ、図の反対側には、鉄板の剥がれた痕跡がある。全体に木質残す。(7)は残存長 4.0cm、最大幅 2.5cm、背幅 1.0cm。断面は、逆三角形をなし背上面は平坦である。(8)は残存長 4.0cm、最大幅 1.8cm、背幅 0.5cm、断面逆三角形である。刀子または小刀の刀身と思われる。全体に木質を残す。(9)は残存長 4.85cm、最大幅 1.5cm、背幅 0.4cm、断面は逆三角形をなす。やはり刀子または小刀ではないかと思われる。(10)は残存長 2.7cm、最大幅 1.5cm、



第73図 象嵌刀装具類実測図（西山要一原図）(1/2)

背幅 0.5cm、全体に木質を残す。茎部の破片かと思われる。(11)は残存長 1.8cm、最大幅 1.5cm、(12)は残存長 2.4cm、最大幅 1.1cm、いずれも茎の破片かと思われる。(13)は残存長 4.4cm、最大幅 1.9cm、背幅 0.4cm の茎の破片である。背上面は平坦である。端部近くに径 0.4cm の目釘孔がある。(14)は茎の破片で残存長 4.2cm、最大幅 2.3cm、背幅 0.5cm で、0.5cm の目釘孔がある。(15)は残存長 5.7cm、最大幅 2.1cm、背幅 0.8cm の茎端の破片である。茎が尻側に向ってやや細くなり、曲線をなす。図の反対側は鉄板の剥がれた痕跡がある。(16)は鞘木片で貴金属の銅板が剥がれた緑青の痕跡がある。

刀子（第 71 図 17～19）(17・18)は、いずれも刀子の茎部の破片と思われる。(17)は残存長 3.9cm、最大幅 1.3cm で、背幅 0.4cm の断面長三角形をなす。(18)は茎端部の破片であり、残存長 3.1cm、最大幅 1.0cm で、尻側に至っては 0.5cm 程度にしほむ。(19)は茎から刃部へ移行する部分の破片で、茎尻へ向ってしほんでいる。関は背、刃ともに軽い角度をもって移行する。背は刃、茎とともに平造りで、整った長三角形の断面をなしている。刃部幅は 2.0cm、茎中央で 0.5cm、端部で 0.25cm となる。背幅は刃部で 0.4cm、茎部で 0.3cm である。これを包む柄木の木質



第74図 鉄鎌形式模式図

の上から銀製の鍔を施している。鍔の長さは1.4cm、幅1.7cm、厚み0.9cmで断面は整った八角形をなす。

刀装具(第72図) (1)は鞘の装飾を兼ねた貴金属で、厚さ0.08cm、幅0.7~0.8cmの金銅製環の縁帯両側に幅0.2cmの刻文を、その内側に径0.4cmの魚子文を打ち出す。縁帯は、裏側へ約0.1cm折り返しているが、これは厚さ0.1cm程度の銅板に固定するためのものである。裏面には銅板の縁角が残っている。この金の薄板の延長は約15cmを測る。この寸法は第73図3の亀甲繫鳳凰文銀象嵌鞘尻金具の断面によって復原される外周の寸法に合う。(2)は残りは悪いが1と同じく貴金属の破片と思われる。厚さは0.1cmとやや厚みがある。(3~8)は0.4~0.5cm幅の銀製薄板による貴金属で、厚みは0.2~0.25cmあり、内側に巻き込んで鉄芯に被せる。(4)に鉄芯が残り、(8)には内側に木質が残る。(8)は先の銀象嵌鞘尻金具の八角形断面に合うかのような屈曲をとどめる。(9~12)は銀製刀装具と思われる破片である。接合できず全形を知りえない。厚さ0.25~0.5cmの薄い銀板を曲げて強く突出する稜や角をつける。(10)の上半両側は切り込み面であり、(12)の上半の中央には逆台形の小さい切込みがあり、また右側全体も切り込み面となっている。いずれも透かしの痕跡である。全体に灰色に変色している。(13~26)は柄間銀線葛巻の破片である。幅0.9~2.0cm前後と広狭があり、断面は扁平な蒲鉾形(24・25)がみられるが、大半が三角形である。鑿による刻みをつけ山形の浮彫りをなす。刻みは5~6刻み/5の粗いものから14~15刻み/5の非常に細かいものまである。しかし接合して残った破片(26)からみると必ずしも幅や刻みが揃っている訳ではないようである。銀はすべてやや暗い灰色に変色している。

表12 シショツカ古墳出土鉄鎌計測表

広根鎌

		単位cm ( )内残存寸法					
番号	持柄	全長	茎長	鍔幅	刃厚	頭長	茎幅
第 1	(4.2)	62	16	0.4	1.7	(3.6)	1.1
2	(5.0)	(1.7)	(1.1)	0.3	1.6	(1.7)	0.7
3	(4.3)	(1.8)	12	0.4	(2.2)		
図 4	(3.0)	(2.4)	15	0.3	(0.4)		

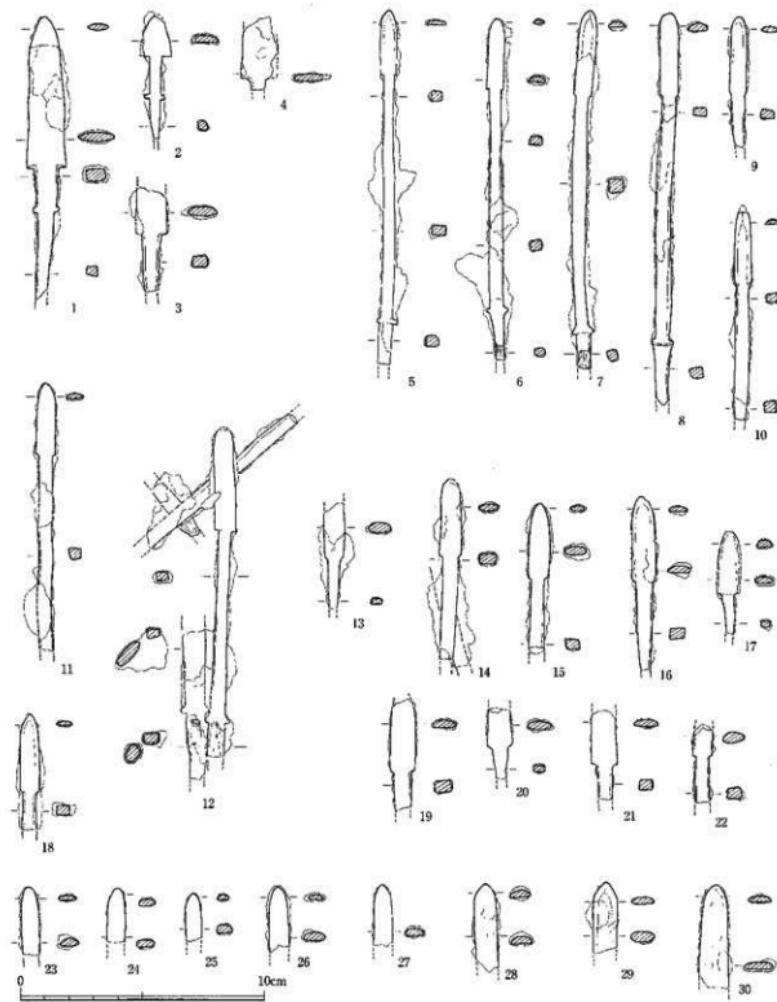
細根長頭鎌

形式	持柄 番号	全長	茎長	鍔幅	刃厚	頭長	茎幅	鍔幅
A-1	5	(14.6)	26	0.7	0.2	(1.7)	0.8	
	6	(14.1)	29	0.7	0.2	9.1	(2.0)	0.9
	7	(14.7)	31	0.7	0.2	9.8	(1.5)	0.9
	8	(16.1)	34	0.7	0.3	10.1	2.5	0.9
	9	(5.4)	31	0.7	0.2	(2.2)		
	10	(8.6)	29	0.7	0.2	(5.5)		
	11	(11.0)	29	0.8	0.2	(7.9)		
	18	(4.8)	32	0.8	0.2	(1.6)		
	12	(13.4)	41	0.8	0.3	7.8	(1.4)	
	14	(7.3)	(3.0)	0.8	0.3	(4.2)		
A-2	15	(6.2)	31	0.8	0.3	(3.1)		
	13	(4.3)	(2.3)	0.8	0.3	(2.1)		
	17	(4.2)	26	0.9	0.3	(1.6)		
	16	(7.1)	33	0.9	0.2	(3.7)		
	19	(4.6)	(3.0)	1.0	0.3	(1.6)		
	20	(2.9)	(1.5)	1.0	0.4	(1.3)		
	21	(3.7)	(2.2)	1.0	0.3	(1.4)		
	22	(3.2)	(1.3)	0.7	0.2	(1.9)		
	23	(2.8)	(2.8)	0.7	0.2			
	24	(2.2)	(2.2)	0.7	0.3			
A	25	(2.0)	(2.0)	0.7	0.2			
	26	(2.8)	(2.8)	0.8	0.3			
	27	(2.5)	(2.5)	0.8	0.2			
	28	(5.2)	(5.2)	0.9	0.3			
	29	(2.9)	(2.9)	1.0	0.3			
	30	(4.3)	(4.3)	1.1	0.3			
	1	(6.5)	26	0.9	0.2	(3.8)		
	2	(4.2)	33	0.9	0.2	(0.8)		
	3	(17.2)	28	1.0	0.3	10.9	(3.4)	
	4	(6.9)	30	1.0	0.3	(3.7)		
B-1	5	(3.9)	33	1.0	0.2	(0.6)		
	6	(3.8)	34	1.0	0.3	(0.4)		
	7	(5.1)	31	1.1	0.3	(2.0)		
	8	(9.2)	23	0.9	0.3	(6.7)		
	9	(5.7)	(1.3)	0.9	0.3	(3.9)		
	10	(14.8)	25	1.0	0.3	9.4	(2.7)	
	11	(5.4)	(1.6)	1.1	0.3	(3.8)		
	17	(13.4)	17	1.0	0.3	10.3	(1.1)	1.0
	12	(5.2)	16	0.7	0.3	(3.4)		
	13	(7.7)	(1.9)	0.7	0.3	(5.6)		
C	14	(3.5)	18	0.8	0.3	(1.1)		
	15	(3.9)	27	0.9	0.2	(0.7)		
	16	(5.2)	19	0.9	0.2	(3.0)		
	19	(3.7)	13	0.7	0.2	(2.1)		
	18	(4.6)	12	0.9	0.3	(3.2)		
D	20	(4.7)	22	0.7	0.2	(2.5)		
	21	(2.8)	(2.5)	0.7	0.3	(0.5)		
	22	(3.1)	(2.5)	0.7	0.2	(0.6)		

## 象嵌刀装具(第73図) 龜

甲繫鳳凰文象嵌円頭大刀柄頭(1~2)、同鞘尻金具(3)、雲龍文象嵌鞘口金具(4)、勾玉文巾頭(5)が前室から礫敷にかけての攪乱堆積土中(第57図第207層)より出土している。現地で出土状態を確認できたのは鞘尻金具のみで(第57図、図版36)、その他は同層の上を水洗して取り上げた破片である。詳細は、第2部第1章第4節の「亀甲繫鳳凰文象嵌円頭柄頭」、「亀甲繫鳳凰文象嵌鞘尻金具」、「勾玉文象嵌巾頭」を参照されたい。

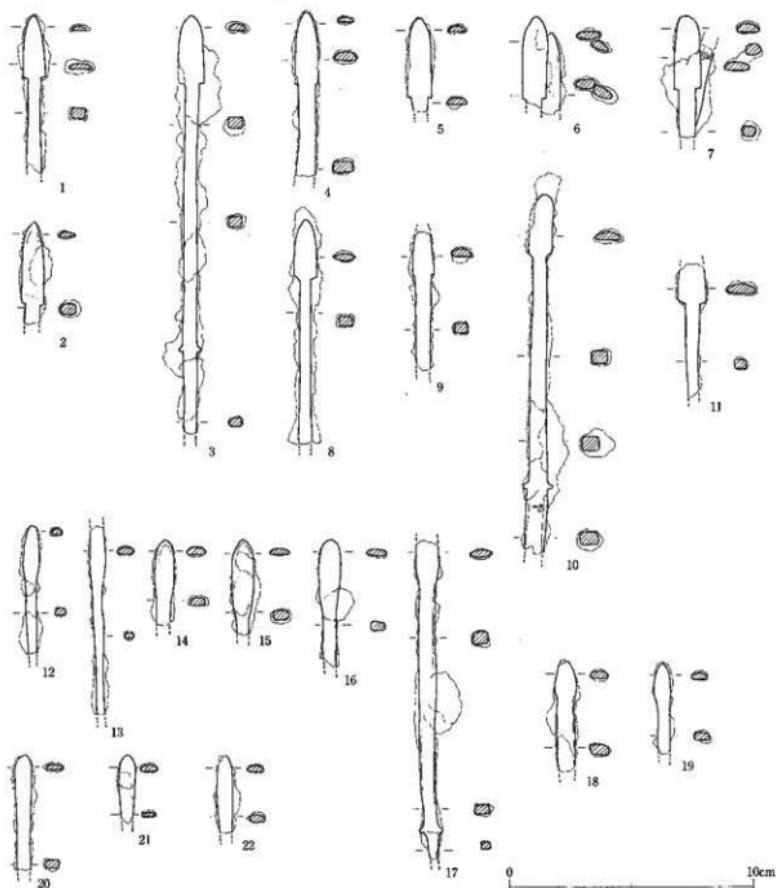
鉄鎌 仕切石や礫敷の礫に鎌着した状態で出土した鉄鎌は、厚い鎌に覆われて細部を観察できる個体は少ない。鎌身以外の頭部や茎以下の破片が多いが、刃部と接合できたものはわずかであった。刃部の鎌や厚さなどについても腐食による膨張のため不明なものが多い。レントゲン写真と現物を照らし合せて輪郭を捉え得た鎌身を残すものを中心として観察した結果、いくつかの形状を把握できた(第74図)。広根短頭鎌は、鎌長6cm以上、鎌幅1.6cmの長三角形を呈する鎌で、茎までの頭部の長さは1.6~1.7cmと短い(第75図1)。頭部の長さが同じで



第75図 鉄鎌類実測図（1）(1/2)

鎌身の幅がやや狭い破片があるが、詳細は分からぬ（第75図2～4）。出土した鎌のほとんどが細根長頭鎌であるが、形状から5つのタイプが認められる（第75・76図、表12）。

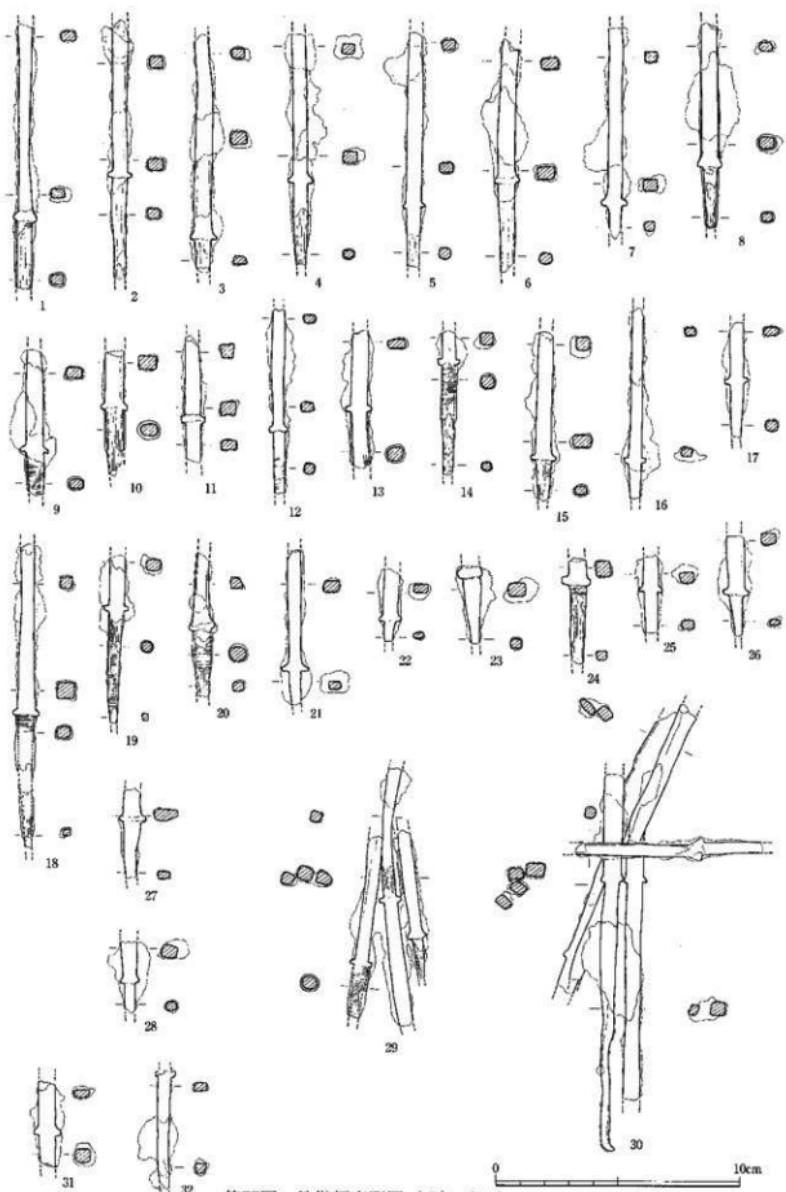
A類：長三角形の鎌で、刃部長は2.6～3.1cm、間部は直角でそれに続く頭部は9.1～10.1cmを残すものが確認できる。刃部幅は0.7～1.1cmまで確認できるが、0.7～0.9cmが主体で



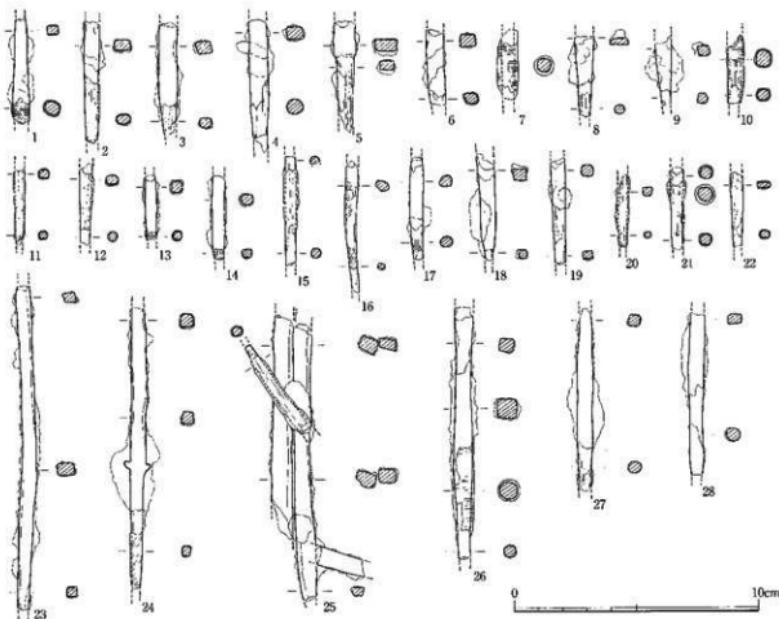
第76図 鉄鎌類実測図（2）(1/2)

ある。茎部に至るにつれて裾広がりになるものや小突起状になるものがある。関部が直角をなすもの（A - 1）と弱い角をなすもの（A - 2）とに分かれる。

B類：A類に比べて鎌身の短い三角形をとる鎌で、刃部長2.5cmに達するものはない。また刃部幅は0.9～1.1cmの範囲で、A類のそれより一定した幅をとる。頸部は茎に向って裾広がりになる個体が認められる。関部は、直角をなすもの（B - 1）と弱い角をなすもの（B - 2）とに分かれる。



第77図 鉄鍊類実測図 (3) (1/2)



第78図 鉄鎌類実測図（4）（1/2）

C類：長三角形の関部を欠いて、頸部から膨らみのある刃部へと滑らかに移行する結果、長楕円形ともいるべき形状をなす。刃部を上半に求めている。刃部幅は、長三角形鎌と変わりなく、 $0.7 \sim 0.9\text{cm}$ の範囲におさまる。頸部以下の分かる個体はない。

D類：C類に比して刃部がさらに短く、短三角形ともいるべき形態をなす。刃部がさらに先端へと求められるが、三角形状はまだとどめ、 $0.7 \sim 0.9\text{cm}$ の刃部幅も長三角形のそれに等しい。

E類：三角の形状は認められず、頸部をなす軸の延長上の先端に刃部をつけるとでもいるべき鎌で、鑿形に近い形態をえている。刃部幅は $0.7\text{cm}$ のものが確認できる。

本墳出土上の鐵鎌は有間長三角形鎌から無間三角形鎌を経て鑿形鎌への移り変わりを見て取ることができるが、量的にはA類長三角形鎌を主体とし、B類がこれに次ぐ。鎌身の全形をとどめない破片でもA類が多い。また茎以下に木質や皮巻きを残す断片もみられる（第77～78図）。

以上のように、刃部から頸部あるいは茎部にかけての破片は茎部以下の破片に比べて少なく、攪乱で相当数が失われてしまっているとみられる。このため、本来の本数を知ることは難しい。大きい破片が比較的集中して出土したのは、礫敷を覆う第207層（第57層）が仕切石に西端にかかる部分で、一部は仕切石に密着していた。また礫敷上で出土した多くの小札の中に鐵鎌の

破片も含まれているから、本来は武具とともに礪敷の西北隅に置かれた可能性が高いと思われる。武具

本墳の横口式石槨蓋部の礪敷からは、小札甲（挂甲）と附属具に使用されたとみられる大小様々な小札が出たした。このうち、復元が可能な資料は約 250 点以上あるが、出土状況の悪さなどからほとんどの小札が重なりあった状態で出土しておらず、縫・綴に使用される革や組紐などの有機質素材も腐蝕により確認が困難を極めたため、小札甲全体を復元することは困難である。

以下では、復元可能な資料を小札形状、縫・綴孔配列<sup>2)</sup>、小札の大きさから、大きく 5 つに分類する。これらの分類から小札甲本体 4 頭、肩甲、手甲、鎗状鉄札を使用した附属具（籠手

表13 シショツカ古墳出土小札型式別数一覧

縫・綴孔	小札大きさ	使用場所	最小枚数			団版番号	
			12孔完形	上部	下部		
小札甲 A	a	側部・草摺	24	0	0	1~2	
	b		20	1	5	3~16	
	c		11	0	6	17~26	
	d		5	2	7	27~36	
	II頭	頭部	6	1	0	37~39	
	III頭	腰部	1	4	3	40~46	
	IV頭		0	3	2	47~51	
	a	草摺	3	4	0	52~53	
	b		0	0	1	54	
型式不明(分類不明片を含む)			0	19	13		
計					141		
小札甲 B	a	頭部・草摺	26	33	0	55~81	
	b		13	0	0	82~92	
	II頭	草摺?	6	0	3	111~118	
	III頭	腰部	5	1	3	119~127	
	型式不明(分類不明片を含む)			11	11	93~110	
計					142		
小札甲 C	a	腰部・草摺	5	0	0	128~132	
	b		3	2	2	133~137	
	c		4	1	3	138~141	
	II頭	腰部	0	4	1	142~146	
	型式不明(分類不明片を含む)			5	28	147~160	
計					58		
附属具	II頭	附属具	38	11	18	161~195	
	II-1頭		56	11	5	196~262	
	a		3	0	0	263~265	
	b		6	2	0	266~271	
	II-2頭		3	0	0	272~273	
	III頭		0	4	2	274~278	
	IV頭		2	0	0	279~280	
	V-1頭		4	0	0	281~283	
計					165		
(人形札)	I頭	不明	6	4	2	284~294	
	a		0	1	0	295	
	型式不明(分類不明片を含む)			3	10	296~305	
計					36		
総計					566		

\*最小枚数は綴合された個体も小札枚数で算出

か臍当?)、不明鉄器(大型札)が復元できる。

小札甲と附属具、不明鉄器に使用されたとみられる小札は総数で 560 点以上が確認された。ただし、その多くが破片であり、小札の特徴的な部分(頭部・底部形状、縫・綴孔配列など)がみられない資料も含めていることから、分類が困難な資料も多い。個々の出土量は表 13 のとお

りである。

#### 小札甲A (第79~81図1~54)

小札 頭部形状が半円形を呈する縫孔2列の小札群で、下掘孔・覆輪孔は3孔である。下端は隅切を施すが、丸みを帯びる資料もある。小札は大きさと孔の配列から4類9種に分類することが可能である。

I類札は第3縫孔をもたない平札で、札の大きさから4種に細分できる。a~d種は、長さ6.0~7.5cm、幅2.0~3.2cmの大きさの幅をもつ小札であり、ほぼ完形での出土数はどれも10点ほどであるが、a種札は塊の状態で出土している。小札塊はa種札が3段に縫された状態のものと、2段のものがあり、一部に縫素材の組紐や布の一部が確認できる(第79図1~2)。組紐はb種札の裏面でも確認できる。

II類は中間部に第3縫孔を穿つ平札で、長さ7.0cm、幅2.3cm程度であり、左上、右上重ねの資料が一点ずつと頭部がわかるものの3点が出土している。

III類札は腹部に用いられた断面がΩ字に内湾したΩ字型腰札である。完形の資料はないが、小札幅と孔配置から2種の腰札の存在が想定できる。a種は復元すれば、長さ15.0cm、幅2.2cm程度の大きさの腰札であろう。b種の長さは不明だが、a種よりも長く、幅2.8~3.0cm程度の腰札である。

IV類札は草摺最下段に使用される裾札で、緩やかではあるが中間部がΩ字に内湾する。腰札同様小札の大きさから2種が確認でき、a種は長さ7.0cm、幅2.4cm程度である。b種は完形資料がないため全長は不明だが幅は3.0cm程度である。

縫・綴技法／下掘・覆輪 現存状況の悪さから、縫・綴技法の確認は困難であるが、縫素材には組紐の使用が確認できる(第79図16、第81図53)。下掘技法は平札や裾札に革紐による革包覆輪(第二技法)が確認できる(第80図24、第81図53)。また、織物や革と思われるものが付着した資料もある(第80図24、第81図52)。

以上のことから、縫孔2列の小札甲Aの小札群には札の大きさが異なる平札・腰札・裾札が2種類存在することから2領の小札甲が存在した可能性が考えられる。ただし、腰札、裾札などの特徴的な小札は分類できたとしても、平札を分類することは困難である。また、小札の出土点数が破片を含めても100点程度であることから、小札甲を構成する枚数としてはかなり少なく、1領分にも満たない。

#### 小札甲B (第83~84図55~127)

小札 頭部形状が偏円形を呈する縫孔1列の小札群で、下掘・覆輪孔は2孔であり、下端は隅切が施されている。小札は大きさと孔配列から3類4種に分類することができる。

I類札は第3縫孔を穿つ、縫孔2孔×4箇所の平札で、小札の大きさから2種に細分でき、長さ7.5~8.5cm、幅2.0cm程度である。一般的な縫孔1列の小札にみられるような、第3縫孔が小札中間部に穿たれたものではなく、第2縫孔から間隔をおかずに穿たれているのが特徴である。

II類札は、第3縫孔をもたない縫孔2孔×4箇所の平札で、下掘孔が2列2孔、合計4孔穿たれている。長さ8.0cm、幅2.0cm程度で、一部はI類札や小札甲Aの平札が付着したものがある（第84図114・118）。

III類は断面が逆の字状に曲がる外反腰札で、長さ12.5cm、幅1.8cm程度である。縫孔が3孔×4箇所のいわゆる3縫孔をもつのが特徴であり、附属具札が付着したものもある（第84図124）。他にも1点のみ出土している小札があり、第3縫孔が小札中間部に穿たれているものや、小札頭部が折り曲げられているもの、縫孔が3孔×2列あるもの、下部に無数に穿孔されているものなど、型式不明の小札がある（第83図105～110）。

縫・縫技法／下掘・覆輪 縫・縫技法や下掘・覆輪技法などは現存状況の悪さから確認することはできないが、縫孔に僅かな組紐の痕跡が認められる。

#### 小札甲C（第85～86図128～160）

小札 頭部形状が偏円形を呈する縫孔1列の小札群で、下掘・覆輪孔は2孔であり、小札甲Bの小札と比べ札幅が広い。下端は隅切が施されたものと、丸みを帯びたものがある。小札は大きさと孔配列から2類4種に分類することができる。I類札は第3縫孔を穿つ、縫孔2孔×4箇所の平札で、札の大きさと孔の配置から3種に細分が可能である。a～c種まで札幅の大きさがあまり変わらない一方で、長さは7.2～10.1cmと大きなひらきがある。

II類札は断面がΩ字を呈する腰札であるが、稜線はあまり明瞭ではなく、内湾幅も小さい。復元長は16cm程度で、幅は中央部ですぼまる形状を示し、頭部や下部の最大値は3.0cmだが、中間部では2.5cm程度である。縫孔は3孔×4箇所の3縫孔をもつ腰札である。

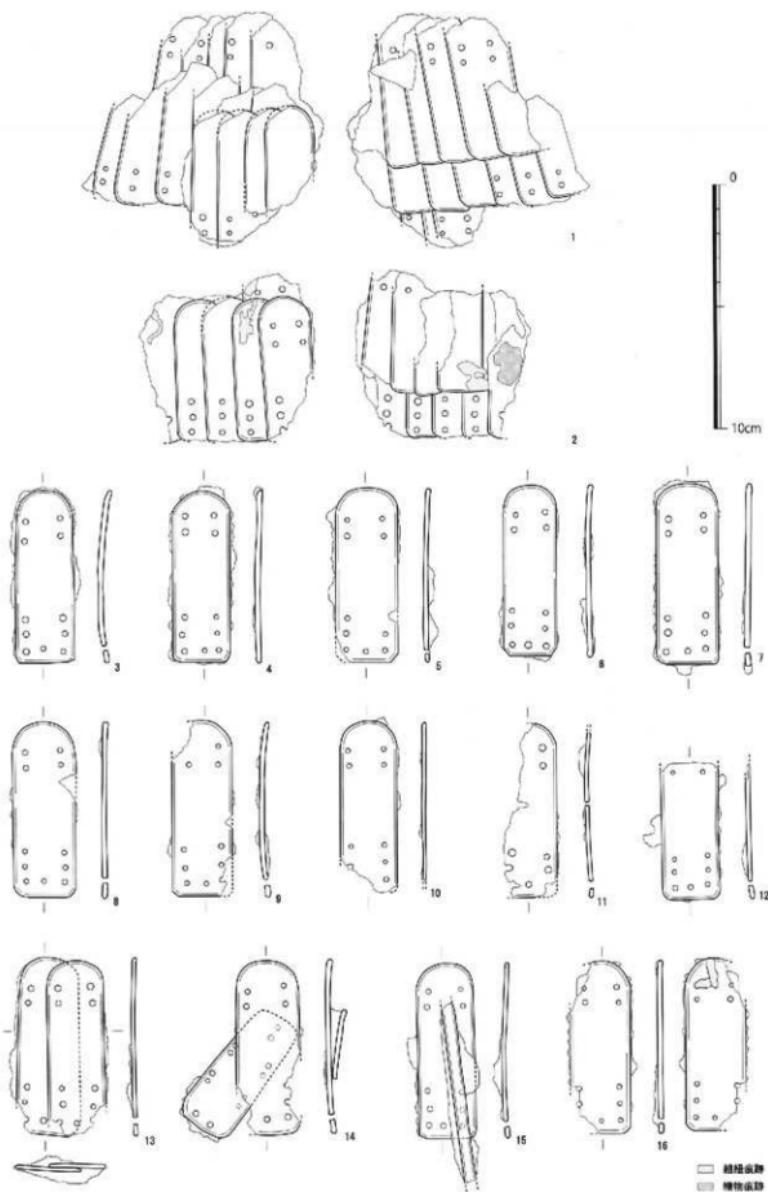
他にも縫・縫孔の位置がI類札と異なるものや、小札下部に下掘・覆輪孔とみられる多数の穿孔（6、4、3孔）が施された資料がある（第86図152～158）。

縫・縫技法／下掘・覆輪 縫・縫技法や下掘・覆輪技法などは小札甲B同様、良好な資料は見当たらないが縫孔に僅かな組紐の痕跡が認められる。

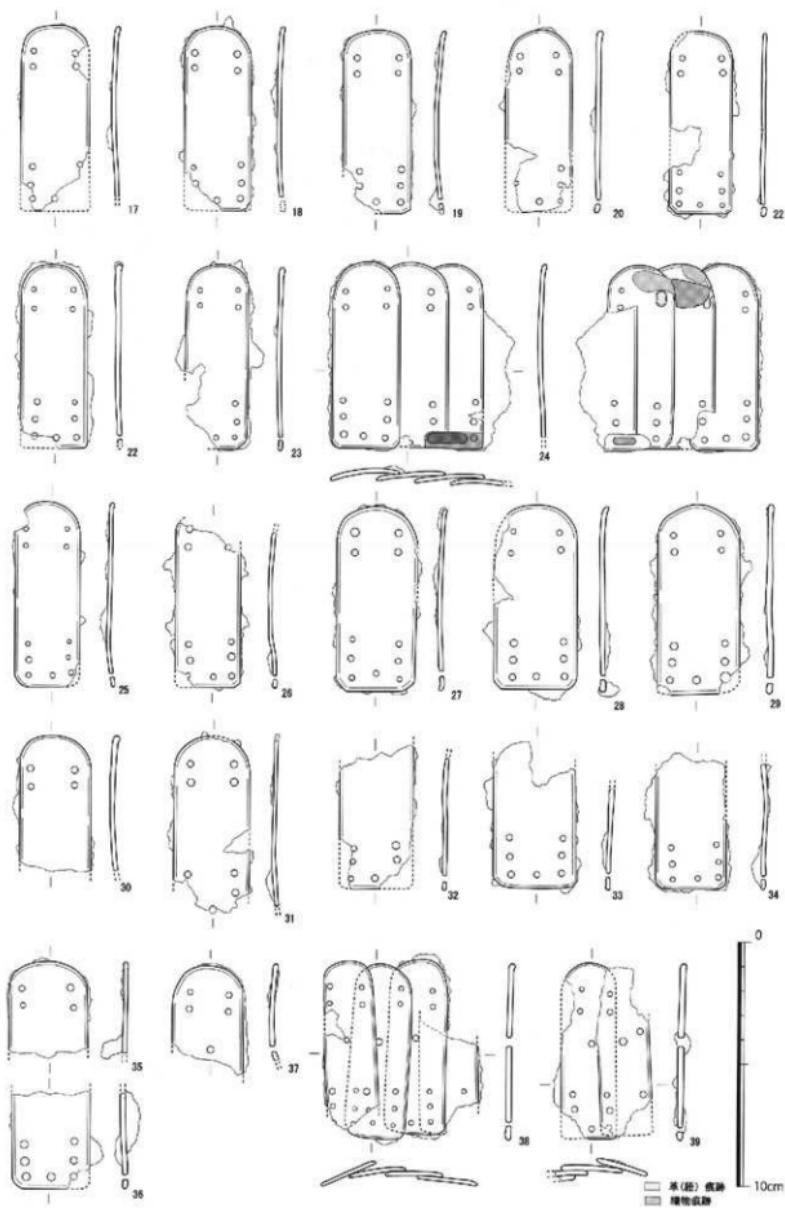
#### 附属具札（第87～91図161～294）

小札 小札甲以外を構成すると考えられる小型札が多数出土している。札形状や縫・縫孔の配列から6類7種に分類することができる。I類札（第87図161～195）は頭部が半円形の縫孔2列の平札で、小札下端は隅切が施されており、下掘孔は2孔である。長さは5.0cm、幅1.8cm程度である。資料数は破片を含めて50点程度と、他の小札に比べて出土数が多い。縫素材には組紐が確認できるが、縫・縫技法、下掘・覆輪技法などは不明である。

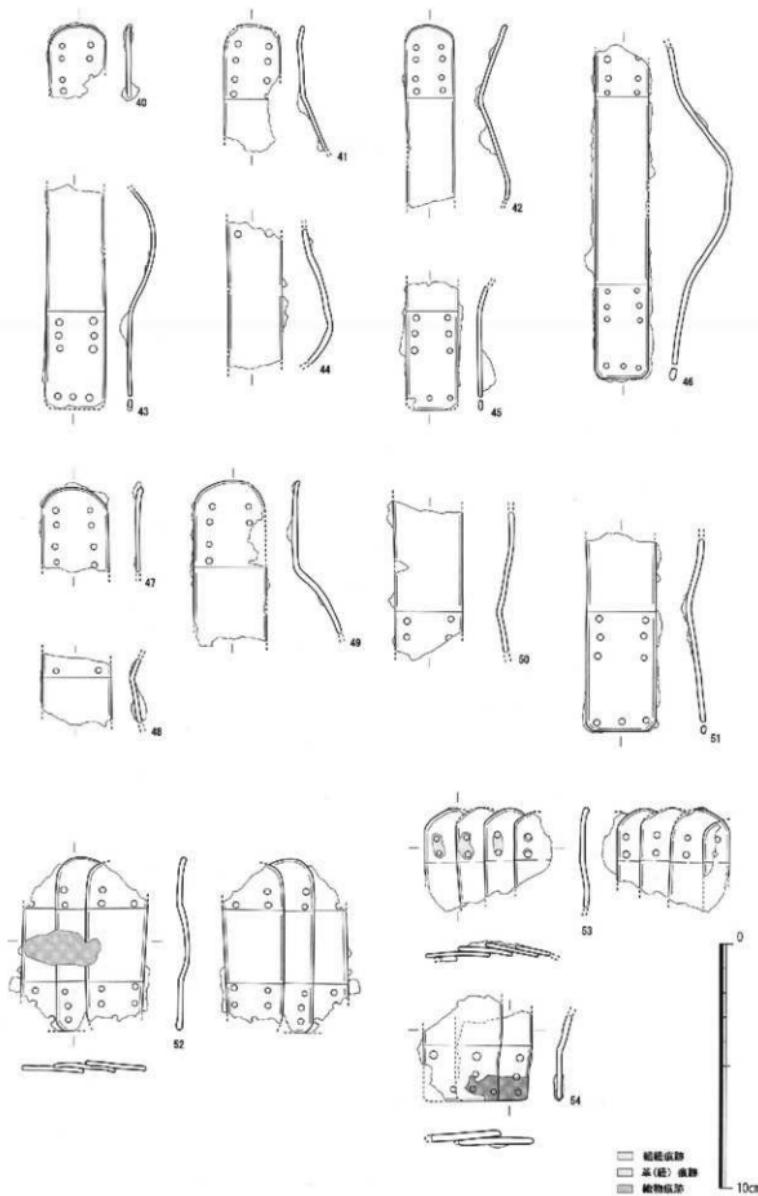
II類札（第88～89図196～271）は頭部が偏円形の縫孔1列の平札で、上幅が広く、下部ですぼまる形状をしめす「上広形」の小札であり、主に肩甲に使用されたと考えられている。小札下端は隅切が施されており、頭部縁を裏側に少し折り返す「キメダシ」や、底部を表側へ折り返す「打ち返し」がみられる。縫孔の配列から2類に、下部の形状からII-1類札を2種に細分できる。II-1類札は長さ5.2cm、幅2.1cm程度であり、孔配置は縫孔3孔×1列、縫孔は



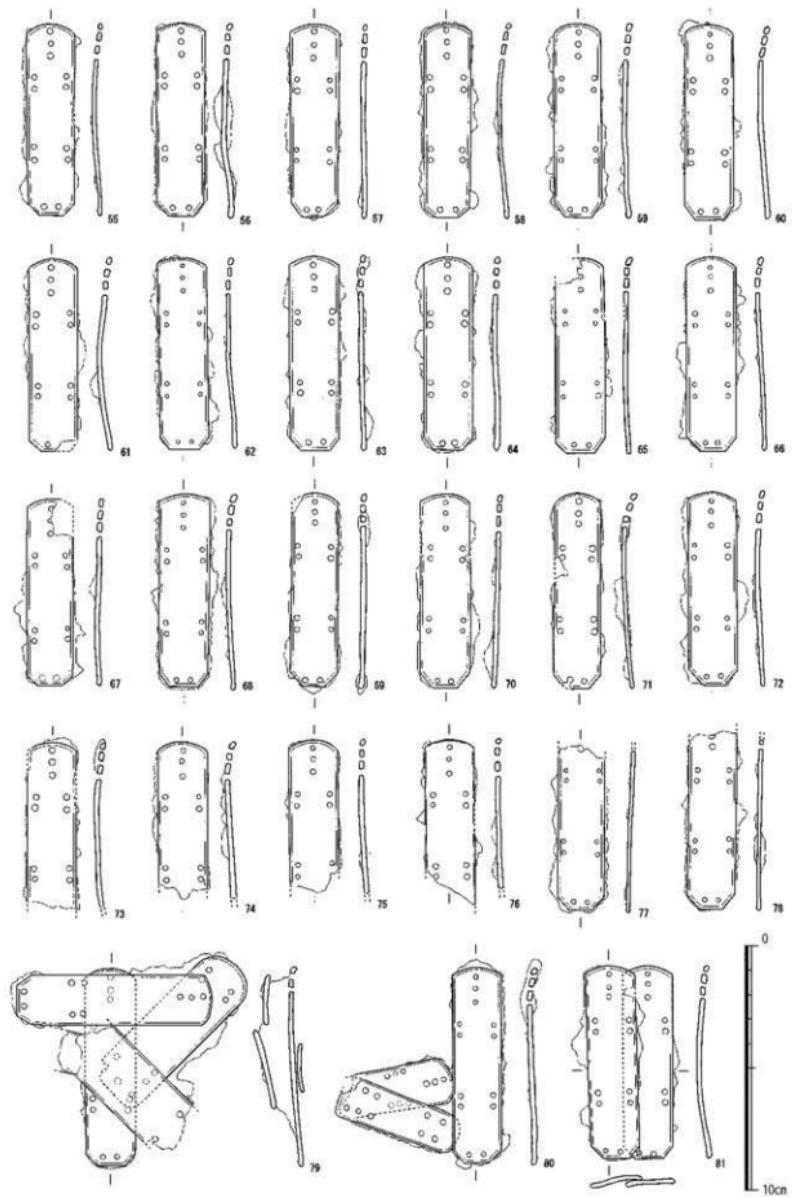
第79図 小札類実測図 (1) (1/2)



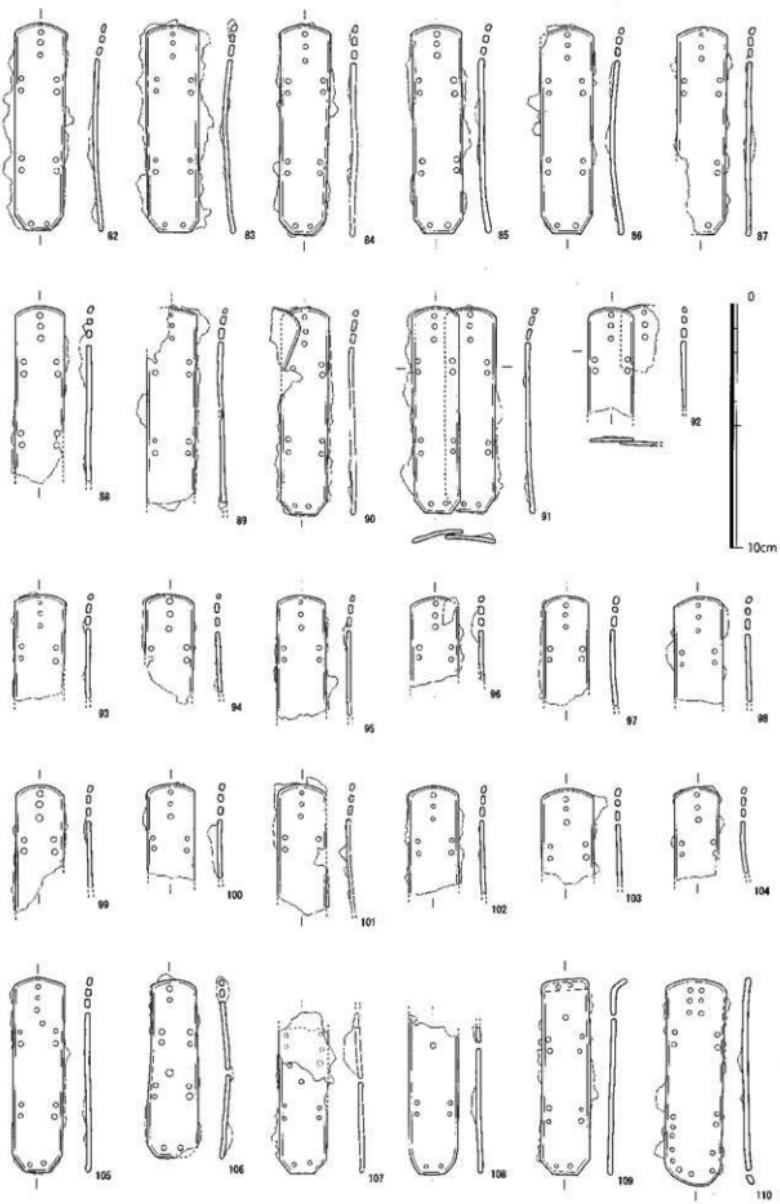
第80図 小札類実測図（2）（1/2）



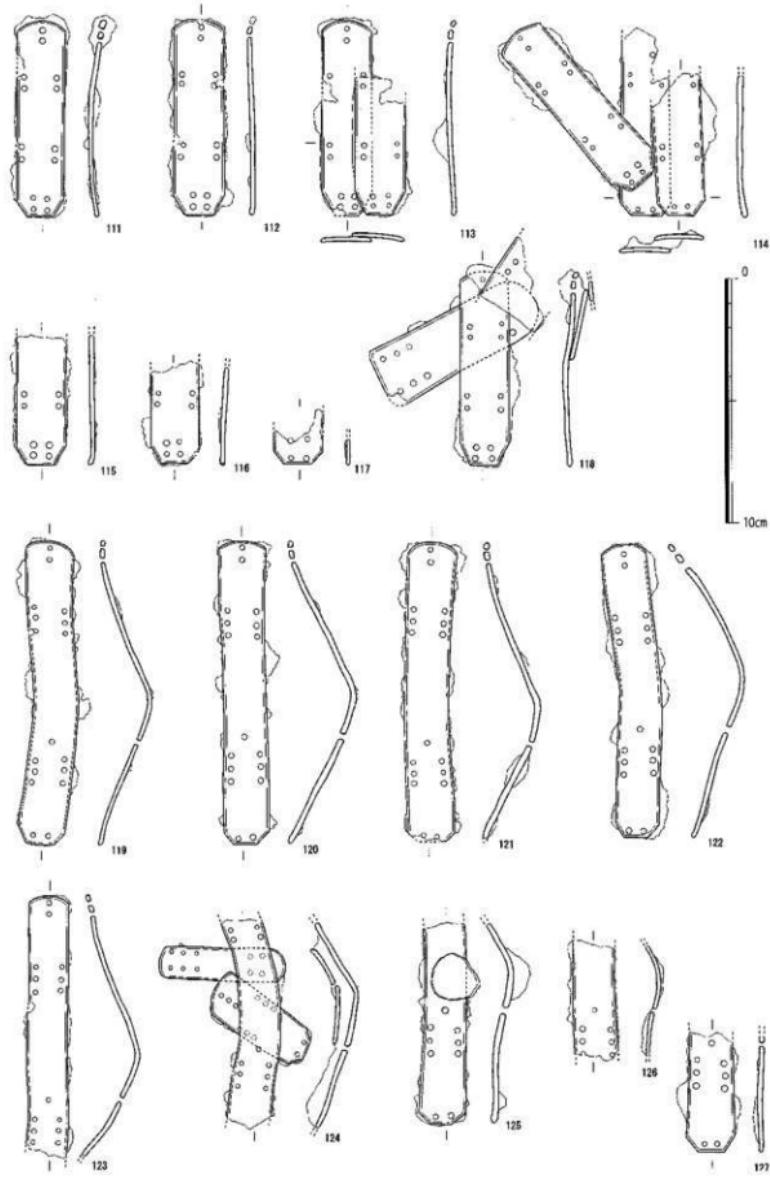
第81図 小札類実測図 (3) (1/2)



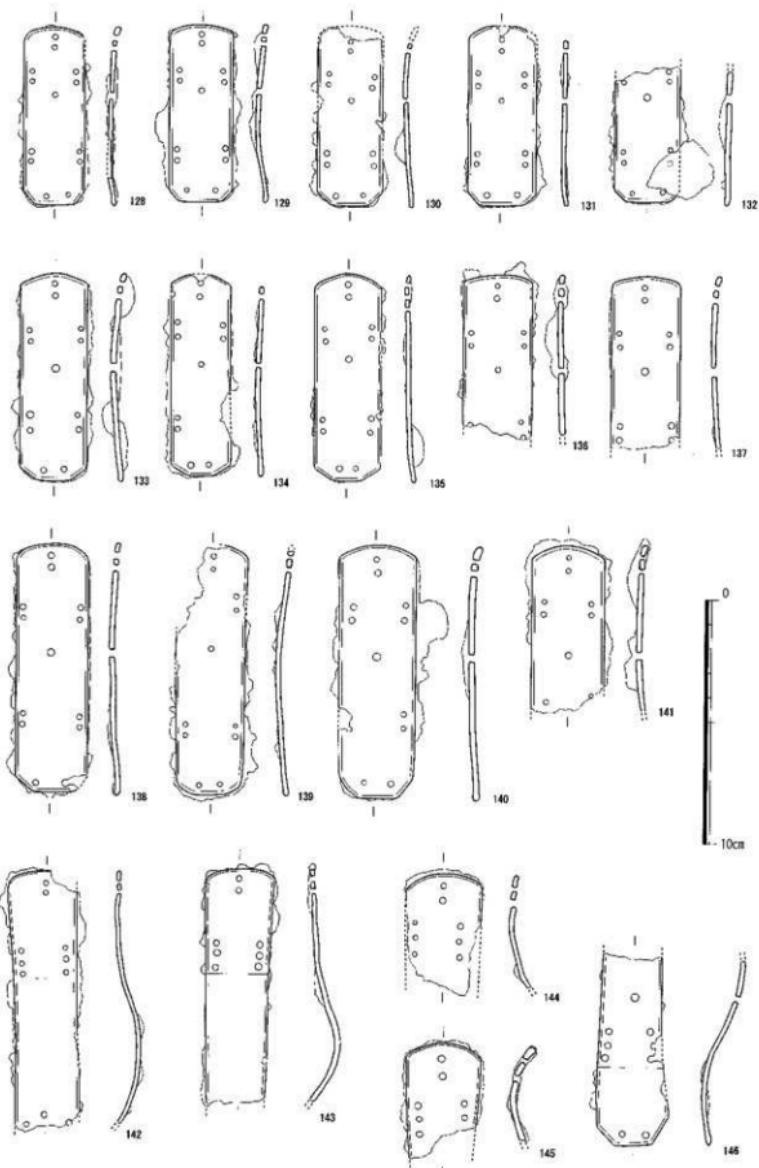
第82図 小札類実測図 (4) (1/2)



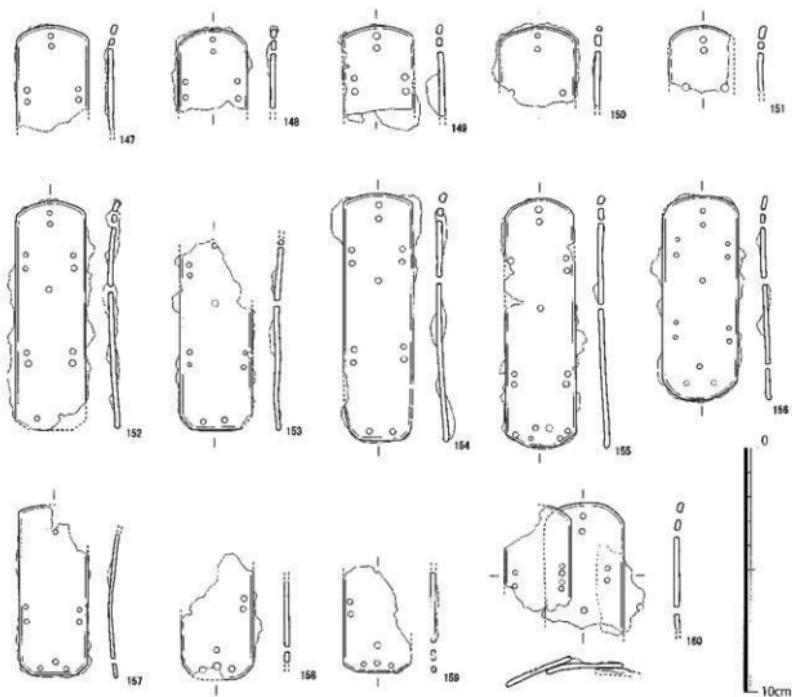
第83図 小札類実測図 (5) (1/2)



第84図 小札類実測図 (6) (1/2)



第85図 小札類実測図 (7) (1/2)



第86図 小札類実測図（8）（1/2）

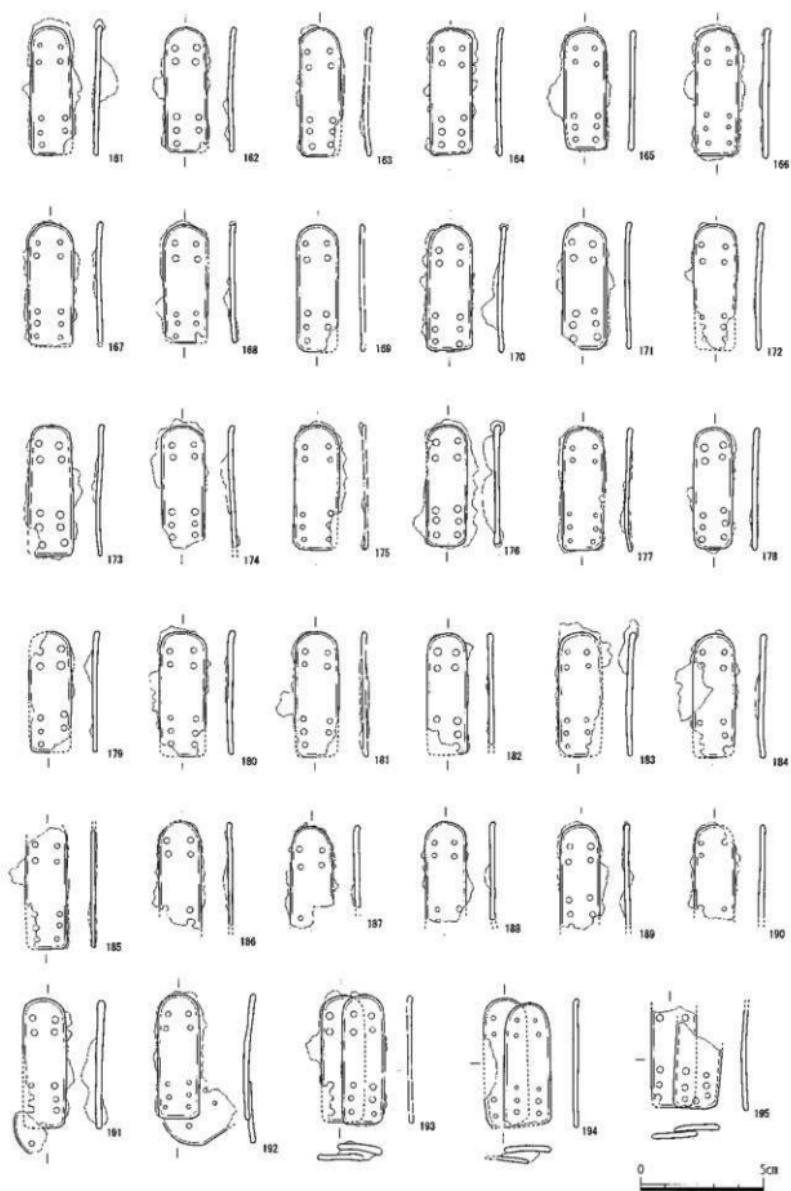
3孔×2箇所穿たれており、形の分かる資料だけでも70点以上確認でき、小札群中で出土数が最も多い小札である。b種は、a種と同じ孔配置であるが、下部が右斜めに裁断されており隅切がみられない。

II - 2類札は小札頭部に縫孔とみられる孔が5孔穿たれており、縫孔は3孔×2箇所が穿たれている。

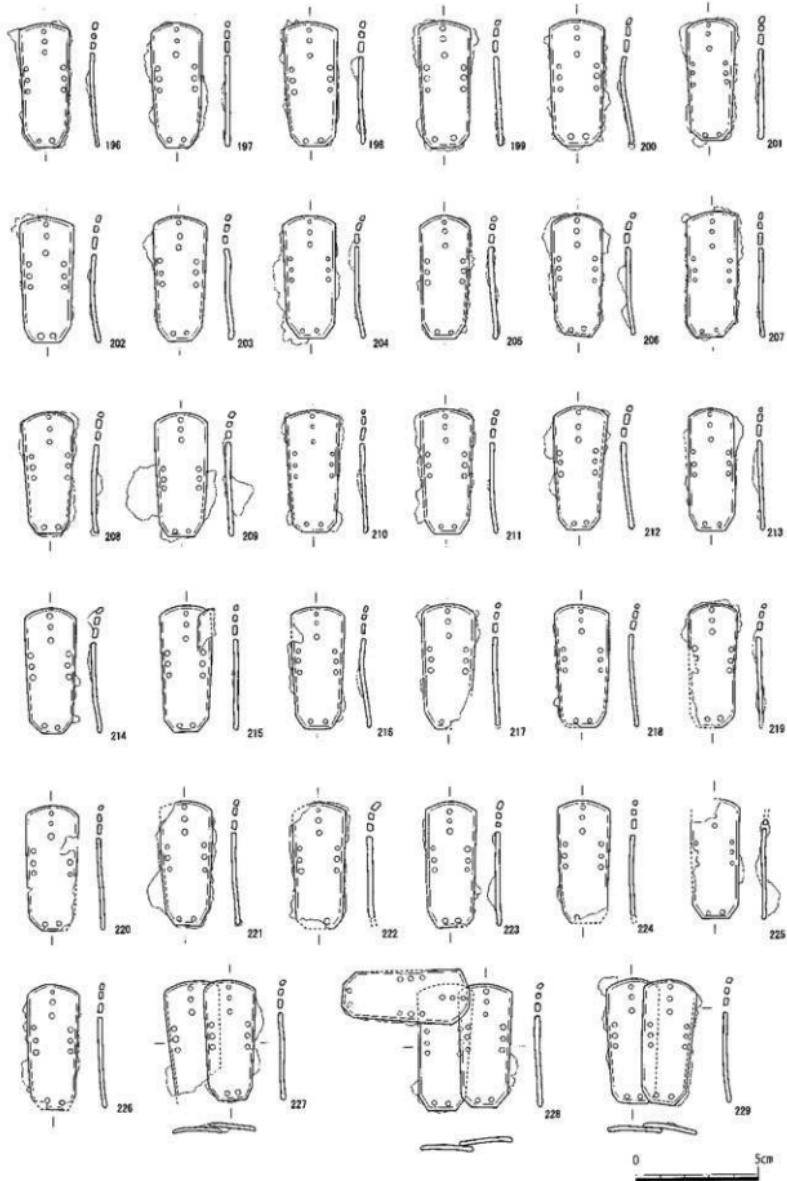
III類札（第90図272～273）は頭部が偏円形の縫孔1列の小札で、小札群中で一番小さい。札の長さは3.2cm、幅1.7cm程度で、下部は隅切が施されている。孔は縫孔1列3孔、縫孔2孔×2箇所が穿たれている。縫素材などは確認できない。

IV類札（第90図274～278）は頭部が偏円形の縫孔1列の小札である。完形での出土例がないため、全長は不明だが幅は1.6cm程度と、小札甲Bに使用されるIII類札と同様に、縫孔3孔×1列、3縫孔を穿つなど共通する要素がみとめられるが、下部に穿たれた縫孔の配置が異なることや、札幅が狭いことから、別個体と考えられる。

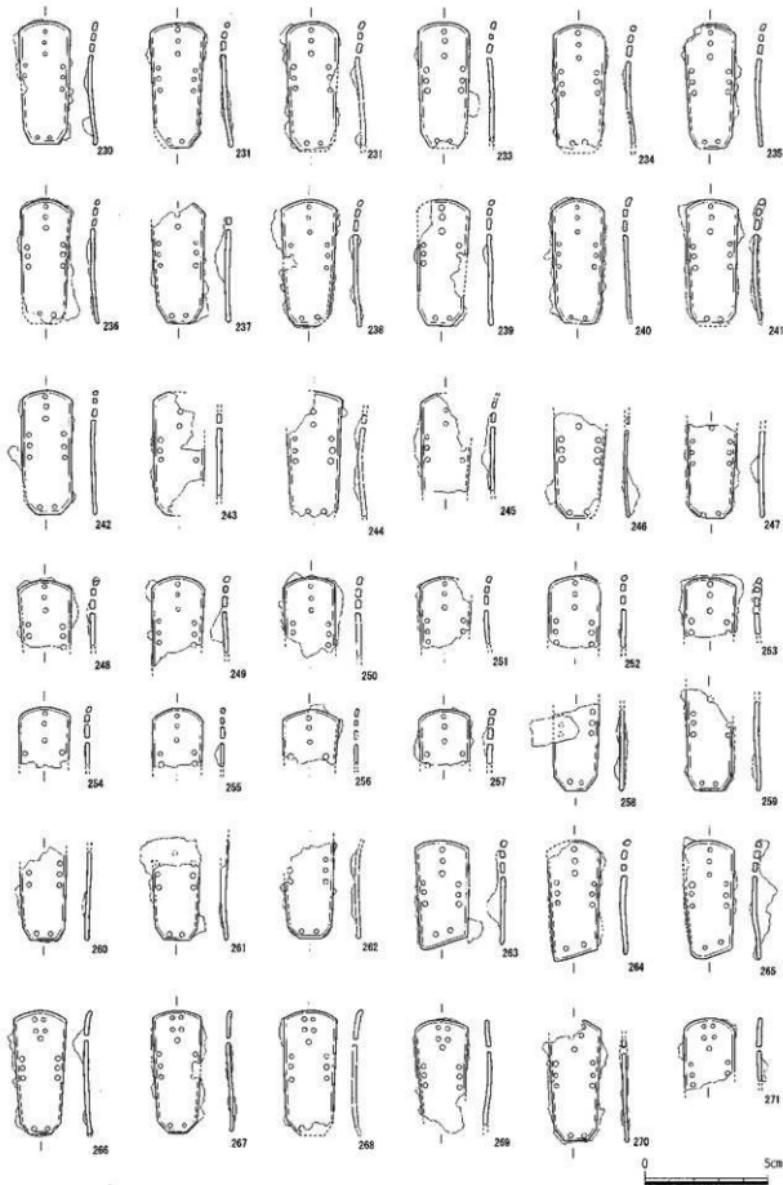
V類札（第90図279～283）は頭部が偏円形の縫孔1列の小札で、札形状がII類札とは逆に頭部が狭く、下部が広い「下広形」の小札である。第3縫孔の有無で2類に分類できる。札



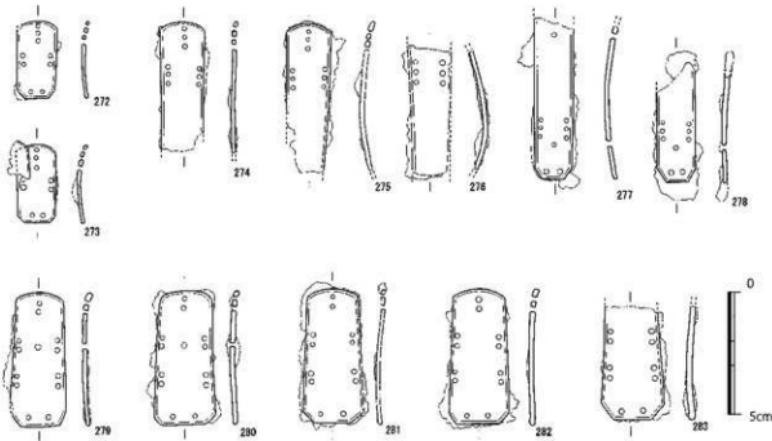
第87図 小札類実測図 (9) (1/2)



第88図 小札類実測図 (10) (1/2)



第89図 小札類実測図 (11) (1/2)



第90図 小札類実測図 (12) (1/2)

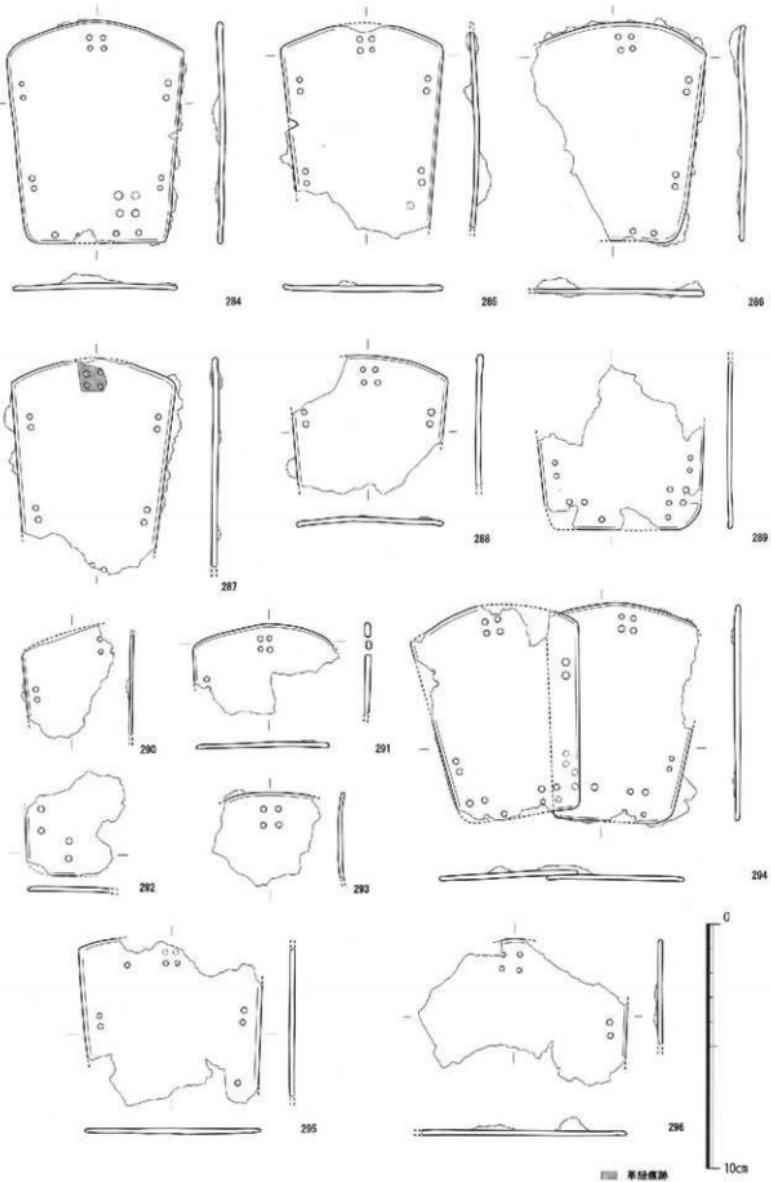
の長さは 5.5cm、頭部幅 2.0cm、下部幅 2.4cm 程度で、下部は隅切が施されている。縫孔は 2 孔 × 4 滴所穿たれている。一部の資料は小札甲 A の小札や大型札と付着したものがある(第 79 図 14、第 92 図 305)。鍼素材などは確認できない。

**鍼・縫技法／下掘・覆輪** 上記の I ~ V 類札では、鍼技法などの連結方法は、確認することはできないが、一部の資料では鍼素材に組紐が確認できる。

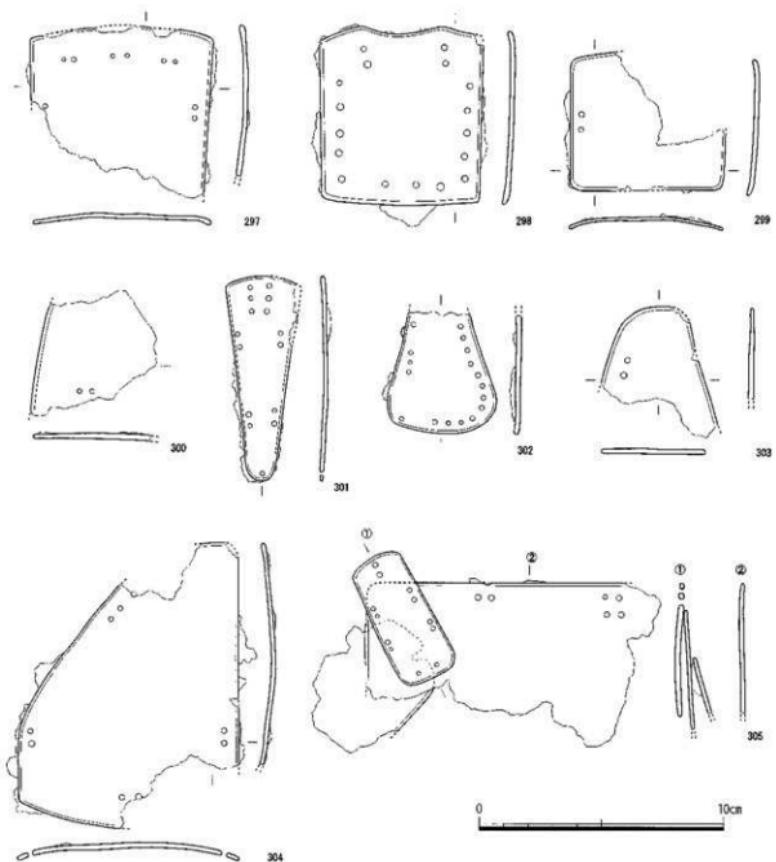
#### 不明鉄器(大型札) (第 91 図 284 ~ 305)

小札甲、附属具札以外にも大型札が出土している。完形に近い資料からの分類を試みたため、分類では 2 種類を提示するにとどまるが、他にも型式不明の札が 1 点づつではあるが出土している。また、帰属不明な断片資料が多数存在することから他の大型札が存在した可能性が考えられる。I 類札は頭部が偏円形で札全体の形状が扇形になり、下部にいくほどすぼまる。a 種は、出土している大型札のほぼ半数以上を占めており、大きさ最大長 9.0cm、最大幅 7.2cm、下端幅が 5.6cm である。頭部中央に 2 孔 × 2 列、4 孔が穿たれており鍼孔の可能性が高く、両端には左右 2 孔 × 4 滴所の縫孔が、下端には 4 孔が穿たれており覆輪・下掘孔であると考えられる。また、一部の資料には下部の縫孔付近に 2 孔 × 2 列、4 孔が穿たれている(第 91 図 284・289・294)。b 種は a 種に比べて一回り大きい資料と考えられるが、頭部の一部しか残存していないため詳細は不明である。鍼・縫技法や下掘・覆輪技法は不明であるが、鍼孔とみられる孔附近で組紐の痕跡が残る(第 91 図 287)。

他にも用途不明な札が多数存在する。断片資料であるため詳細不明だが、298 は最大長 7.0cm、最大幅 6.5cm 程度のほぼ正方形に近い札であるが、頭部形状が偏円形であるが中央が緩く内湾する形状を呈している。孔配置は頭部に 2 孔 × 1 列が 2 滴所、両端にほぼ均等に 5 孔 × 1 列、



第91図 小札類実測図 (13) (1/2)



第92図 小札類実測図 (14) (1/2)

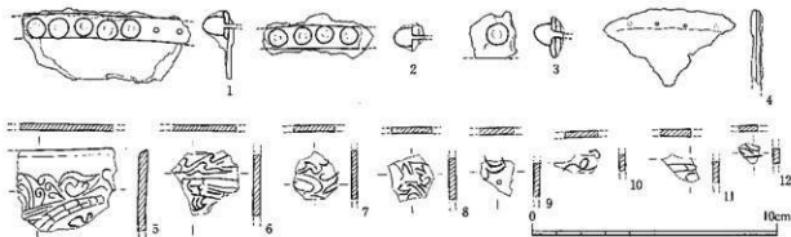
2箇所が穿たれ、下端に3孔穿たれている。断面は平坦であり、出土点数も完形1点のみである。

301は頭部偏円形で下端にいくほどすぼまる形状を呈し、下端は丸みを帯びる。最大長8.3cm、最大幅3.1cmを示す。孔配置は、頭部に縫孔とみられる孔が3孔×1列穿たれており、縫孔2孔×4箇所、下端には1孔が穿たれている。

302は断片資料であり、現存長4.8cm、最大幅4.4cm、上部にかけてすぼまる形状を呈す。孔配置は縁に沿うように無数に小孔が穿たれている。

304は最大長12.0cm、最大幅9.0cm程度の札で、大型札の中で最大である。形状は台形状を呈しており断面も縫やかに内湾する。孔は縁にそって穿たれているが縫孔か縫孔かは不明である。

縫・縫技法／下掘・覆輪 縫・縫技法や下掘・覆輪技法を留める資料がないことから、詳細は



第93図 鞍金具類実測図（象嵌金具西山要一原図）（1/2）

不明であるが、I類札の鍔孔とみられる孔付近で組紐の痕跡が残る資料がある（第92図287）。

註1 小札甲の各用語については、内山敏行（1992「挂甲と附属具について」「観音塚古墳調査報告書」）、清水和明（1993「5 挂甲と附属具」『斑鳩藤ノ木古墳第一・次发掘調査報告書』）による。（森川）

馬具 鞍金具、杏葉、雲珠、辻金具、鏡板などの破片がみられるが、ほとんどが遊離している。

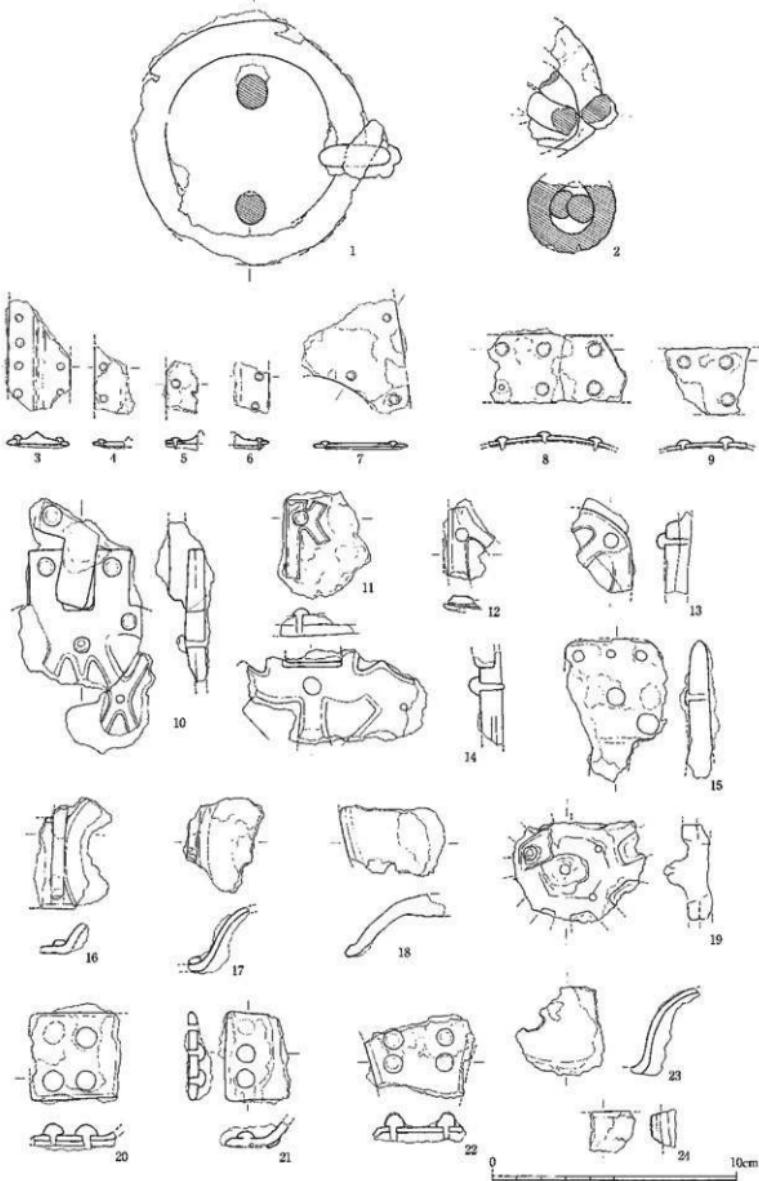
#### 鞍金具（第93図）

（1～4）は鉄地金銅張りの儀金具周縁の鉄帶の断片である。厚さ0.2～0.3cmの鉄板に同様の鉄板を重ねて鋲留している。鉄は、（1）が径0.8cm、高さ0.9cm、軸径0.15～0.2cm、（2）が径0.7cm、高さ0.7cm、軸径0.1cm、（3）が径0.9cm、高さ0.7cm、軸径0.2～0.3cmである。（1）は他の2点に比べて高く突出し、鋲留は0.9cm間隔に繁打されている。いずれの鉄にも金張りが残る。（4）は紙孔のみを残すが、重ねられていた鉄板の剥がれた円弧状の痕跡が認められる。（5～12）は鞍橋金具の海部に金象嵌を施した破片である。龍文と雲文で飾っている。詳細は第2部第1章第4節の「鞍橋金具」を参照されたい。

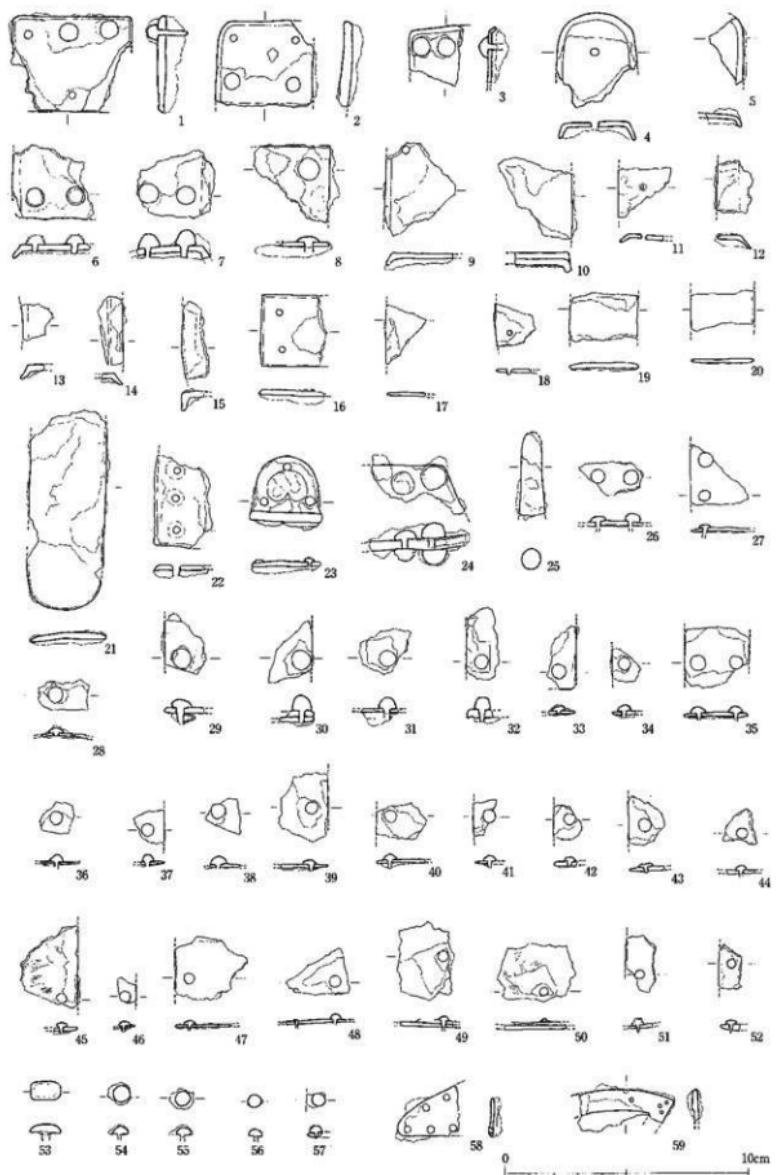
#### その他馬具類（第94図）

（1）は、径1.2cmの鉄棒を曲げて径9.5～10.0cmの円環にした素環鏡板である。立間はなく径0.9cmの鉄棒で得られた正円の環径3.0cmの銜の端環と引手の環とを直接連結している。（2）も鉄芯径1.0cmの引手と鏡板を銜により連結する形式と思われる素環鏡板で、芯径0.9cmの鉄棒で得た環径3.5cmの引手の環と銜の環が絡んだ断片である。

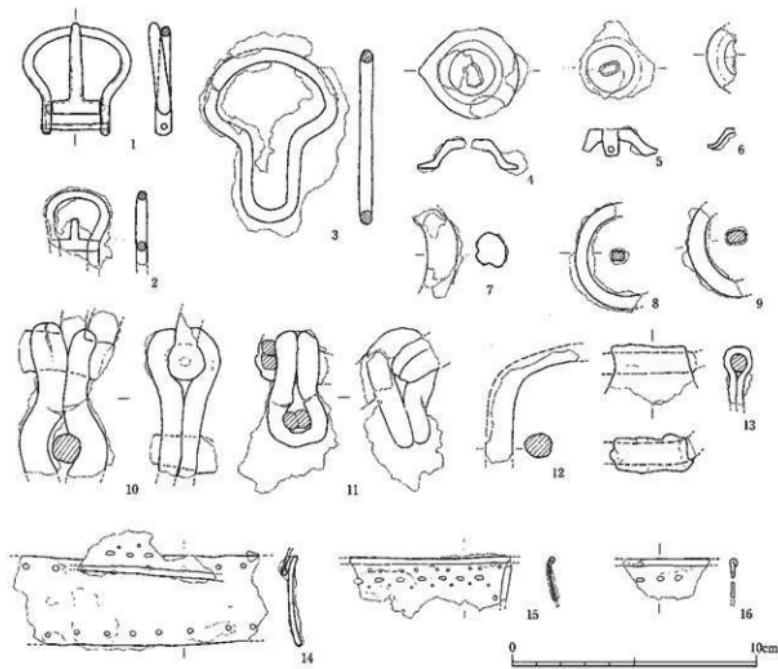
（3～9）は鉄地金銅張りの壺鎧の破片である。（3～6）は、幅2.6cmの表面に鍍金を残す兜胸金具の破片で、いずれも、裏面に木質を残すので、木心鉄装とみられる。中央が断面三角形で5立ち上がって隆起し、両端に向って薄く2mmほどの厚みとなる。縁端より4～4.5mmのところに径3～3.5mmの鉄を1.0cm間隔で留め木心に固定している。裏面では、両端より内側3～4mmのところで凹みをつけ、そこに木心が装着される。（5）の破片では厚さ1.0mmの鉄板の下に2.0mmの板を重ね、その下に木質が残り、これらを鋲留している。（7）は鏡に足を入れる壺の口縁部で、図左下のカーブするところがその内側、右側面の直線ラインが外側となる。端部から内側4～5.0mmのところの縁に沿って、厚さ1.5mmの鉄板を径3～4mm、長さ3～4mmの鉄でその下の木心に



第94図 馬具類他実測図 (1/2)



第95図 飾金具類他災測図 (1/2)



第96図 鉄具・鎮類他実測図 (1/2)



第97図 金製品実測図 (1/1)

留めている。(8・9)は壺蓋の踏込み部の側版である。厚さ1.5mm、幅2.7cmの緩やかにカーブする鉄板を径5~5.5mm、長さ6mm以上の鉢で本体に1.7~2.0cm間隔、側辺から内側5mmのところで留めている。裏面には布目痕跡が認められる。

(10~14)は鉄地金銅張りの杏葉で、(14)以外は鐘形、(14)は棘葉形の破片と思われる。腐食のため細部は分からぬが、鐘形杏葉はどの破片でも、厚さ4mm程度の基盤の鉄板に3mmほどの透かしのある別の鉄板を重ね、その上に金銅板を被せ、これを径5~6mm、長さ1.2cm以上の鉢で留めている。斜格子の交差するところは必ず鉢留である。立闇の鉢は径8mmと大きい。上辺4.0cm、高さ2.2cm、内側の方孔の幅1.3cmの立闇には方形の吊金具の鉤の部分が銘着している。

る。そこに残る鉢も立間のそれと同じく大きい。(14) の棘葉形杏葉は七棘系にみられる肩の張りに類似し、幅 3.7cm の立間の裾から左右に肩が延びる部分の破片と考えられる。肩はいったん隆起して下降する形をとる。鐘形杏葉と同じく文様の交差部には径 8mm、長さ 1.4cm 以上の鉢を留め、厚さ 4.5mm の鉄板とさらに厚さ 2mm の鉄板 2 枚を固定している。立聞きの幅は 3.8cm、内側の方孔幅は 2.4cm を測る。

(15) は鉄地金銅張りの吊鉤で木体と鉤とが一体造りである。一辺 4.0cm の方形の釣手板金具から鉤形金具が延びるが、その付け根部分だけを残して以下は欠けている。鉢留は各辺 3 個と中央に施されるが、中央と隅角に残る鉢鉢の径は径 7.0mm と大きい。鉄板を重ねて鉢で固定していると思われるが、腐食のため見えない。

(16～24) は雲珠もしくは辻金具の破片である。いずれも鉄地金銅張りである。(16) は辻金具と思われる。径 6.5cm の伏鉢部に幅 3.6cm の脚が付くもので、その付け根を幅 5.0～6.0mm の責金具で留めている。(17) も辻金具の断片であり、伏鉢部の径は 5.5cm 程度になる。脚部付け根に、幅 4.0mm の責金具の破片が残る。(18) は辻金具の伏鉢部の破片であり、弧状の一部を裾に留めている。伏鉢の径が 8.0cm 程度の大型品と思われる。(19) は径 4.0cm 程度の伏鉢の裾から 8 脚が延びる雲珠の破片である。座金は六角形をなしていたらしくその一角に鉢留があり、他の 2 箇所の角にも鉢留孔がある。伏鉢部分は圧し潰れている。中央には径 5.0mm 前後の鉢留の痕跡があり、装飾付きの雲珠であった可能性がある。鉢が激しいが少なくとも 2 枚の鉄板を重ねているのがうかがえる。(20～22) は雲珠の脚部断片である。(20) は幅・長さ共に 3.5cm で、厚さ 2.0mm の鉄板を 2 枚重ねて径 8.0mm の鉢を用い 4 箇所で革帶に留める。(21) は厚さ 4.0mm・幅 3.8cm、長さ 2.5cm の鉄板で、前側辺に沿って径 7.0～8.0mm の鉢で革帶に留める。脚部付け根の表面には責金具の外れた痕跡が、裏面には責金具の一部が錆着している。(22) は付け根側では幅 4.5cm、先端側では幅 3.5cm を測る脚部の断片である。厚さ 2.0mm の鉄板の両側を斜め下に曲げ、径 8.0mm の頭の大きい鉢で革帶にかしめている。(23) は伏鉢の破片で立ち上がりは大きい。(24) は雲珠の脚部の破片で、厚さ 2.0mm の金張りを残す鉄板 2 枚とその下に基盤となる 3.0mm の鉄板 2 枚を重ねる。上の 2 枚の鉄板の断面が上辺幅 0.9cm、下辺幅 1.3cm の台形となる。(19) の雲珠の脚部に当るものかと思われる。

#### 飾金具類ほか（第 95 図）

原形を復し難い断片であるので飾金具として説明する。(1～15) は鉄地金銅張り革帶当金具の破片である。(1) は厚さ 3.0mm、3.9 × 4.8cm の長方形で、側辺端面はすべて斜辺となり、長辺に沿って 1.6cm 間隔で径 8.0mm、軸長 1.7cm の鉢を 3 箇所で留めている。表面に鍍金が残る。(2) は幅 4.0cm、厚さ 4.0mm の鉄板を用いた帯先当金具で、先端両角は丸みを帯びる。側辺より内側 6.0mm に径 5.5～6.0mm の鉢を 4 箇所で留める。表面は四面となる。(3) も方形の帯先当金具で、側辺から内側 8.0mm のところで、厚さ 2.0mm の鉄板 2 枚を径 7.5mm の鉢を用い 1.0cm 間隔で留めている。(4・5) は先端円形となる帯先当金具で、(4) には厚さ 2.0mm の鉄板の中

央に径 3.0mm の鉢留孔を残す。側縁は斜め下方に 6.0mm 曲げている。(7) は鉢頭の径が 0.9cm・高さ 7.0mm と大きく高い。(6・7) には裏面に革の痕跡がある。(10) は 2.0mm と 3.0mm の鉄板を 2 枚重ねている。

(16) は厚さ 2.0mm の鉄板の側辺端面を斜めにカットし、(17～20) は、丸みをつけて仕上げている。(17・18・20) は厚さ 1.0mm と薄い。(17) には裏面に木質を残す。(21) は一端が弧状となる幅 3.1cm、最大厚 2.8mm の鉄地金銅張りで、表面全体に鍍金が残る。鉢留孔はない。裏面に有機質の付着が見られる。(22) は厚さ 2.0mm の鉄板の側辺端面を斜めにカットするもので、径 3.0mm の鉢留孔が側辺に沿って 1.1～1.3cm の間隔で穿たれている。鉢頭の径は痕跡から 8.0mm。(23) は内側にハート形透かしの銅製薄板を厚さ 1.5mm の鉄板に重ね、これを径 3.0mm の銅製紙を用いて 3 箇所でかしめた革帯先端金具で、幅 4.0mm の銅製貴金属具が付く。裏面に皮革の痕跡を認める。帯先金具あるいは雲珠・辻金具類の脚部の可能性もある。(24) は、金具の端部片で、表裏から鉢留めする金銅製品である。(25) は鉄地金銅張りの歩橋の芯頭である。最大径 1.0cm、頂部は球形をなす。底面は剥離痕がある。(26～57) は、大小各種の鉢留の例である。(53) は他の鉢と異なり、短辺 7.5mm・長辺 13.0mm の長方形、高さ 3.5mm の断面蒲鉾形の鉢で、銀張りである。(58) は厚さ 1.0～1.5mm の鉄板の下に布地と木質を重ね、これを径 3.0mm 前後の鉢で留めるが鉢頭は扁平である。(59) は幅 8.5～9.0mm・厚さ 1.0mm の弧状の鉄板を厚さ 2.5mm の基盤となる鉄板に重ね鉢留している。鉢留孔は弧状帯が直線帯に屈曲する角にある。  
鉗具・鎖類ほか（第 96 図）

(1～3) は鉗具である。(1) は長さ 4.5cm・幅 4.5cm の帶先の金銅製鉗具である。刺金基軸径は 5.0mm で、先端は細くなる。革帯飾金具を取り付ける基軸は、長さ 3.7cm・径 2.0mm である。輪金の断面は円形であるが、基部に至って側辺面取りをなす。(2) は鉄製で、残存長 3.1cm・幅 2.6cm、輪金の径は先端で 3.0mm・基部で 5.0mm 弱、刺金軸の長さは 2.0cm・径は 4.0mm。(3) は地金鉄製で長さ 7.1cm・輪金幅 5.5cm、基部幅 2.5cm・径 5.0mm で、軸に取り付く駒か。このほかに全長 6.3cm、輪金幅 5.8cm、軸径 5.0mm の鉗具がある。指金基軸は金銅製で、幅 2.1cm、径 4.0mm である（図版 114）。

(4～6) は鉄地金銅張りの座金である。(4) は幅 3.7cm のハート形に、裾回り径 2.6cm・隆起部径 1.8cm・高さ 1.1cm の座金で、吊環通し孔がある。(5) もほぼ同様の座金であるが、径 2.0～2.5mm の孔をもち、幅 5.0～6.0mm・厚さ 0.5mm の吊環の銅製留具（残存長 1.1cm）が残っている。(6) は、裾回りの径 3.7cm・隆起部の径 2.3cm・高さ 1.0cm の座金片で、鍍金は剥離している。

(7～13) は、鎖類である。(7) は径 5.0～7.0mm の鉄芯を 3 本合わせて鍛造し、径 1.4cm 前後の鉄棒とし、これを曲げて径 9.0～10.0cm の鉄環としている。素環鏡板の破片か。(8・9) はいずれも断面長方形の鉄棒を用いて径 4.8～5.0cm の鉄環としている。(8) の断面は 4.0×5.0mm、(9) のそれは 5.0×8.0mm と後者が太い。雲珠の可能性も考えられるが皮革の痕跡はない。

(10・11) は兵庫鎖である。(10) は、径 0.8 ~ 1.0cm・長さ 26.0 ~ 28.0cm の鉄棒を二つ折りにして両端に別の鉄棒を通す径 1.4cm の環を拵え、その両端以外は接合させた後、さらにその中央で二つ折りにし、先の両端の環を合わせ、一方、中央で折り曲げた部分にも環を作る。このようにして全長 6.5cm の二重の鉄棒の両端に、互いに直交する環を得ている。(11) は素材としての鉄棒の径が 0.6cm 前後で(10) に比べて細く、全長も 18.0cm 程度と短い。いずれも鎧鉤と思われる。(12) は径 1.1 ~ 1.2cm の鉄棒を U 字形に曲げたもので、鎧鉤の鎖の頂部逆 U 字形となる出金具で、この下に兵庫鎖を吊り下げると考えられる。(13) は厚さ 0.2 ~ 0.3cm で、幅は一端が 3.0cm、他端が 3.5cm の鉄板の、その短辺側で折り曲げて、径 0.7cm・残存長 3.5cm の鉄棒を通して通している。通された鉄棒の一端は緩やかに曲げている。用途は不明である。

(14 ~ 16) は薄い鉄板の側辺に小孔を連ねている。(14) は幅 3.5 ~ 3.6cm・厚さ 2.0mm 前後の凹みのある鉄板で、端部は丸みをつけ、その端部から内側に 3.0 ~ 4.0mm のところで側辺沿いに径 2.0 ~ 3.0mm の孔を 1.0 ~ 1.5cm 間隔で穿っている。(15・16) は厚さ 1.0mm に満たない薄い鉄板の側縁を外側に曲げたもので、その側辺から内側 8.0mm のところに長さ 3.0mm の横凹形の孔を 4.0mm 間隔で穿っている。(15) にはこの孔の列の上下にさらに径 1.0mm の小孔の列がある。これらの孔は鍛留孔ではなく、なんらかの材質の異なるものを紐通しによってこの金属板に固定するために穿たれている。すると、用途としては障泥の縁金のようなものが考えられる。(15・16) の側縁の折り曲げ部分に鍛金の残るところがある。

#### 金製品・鉢（第 97 図）

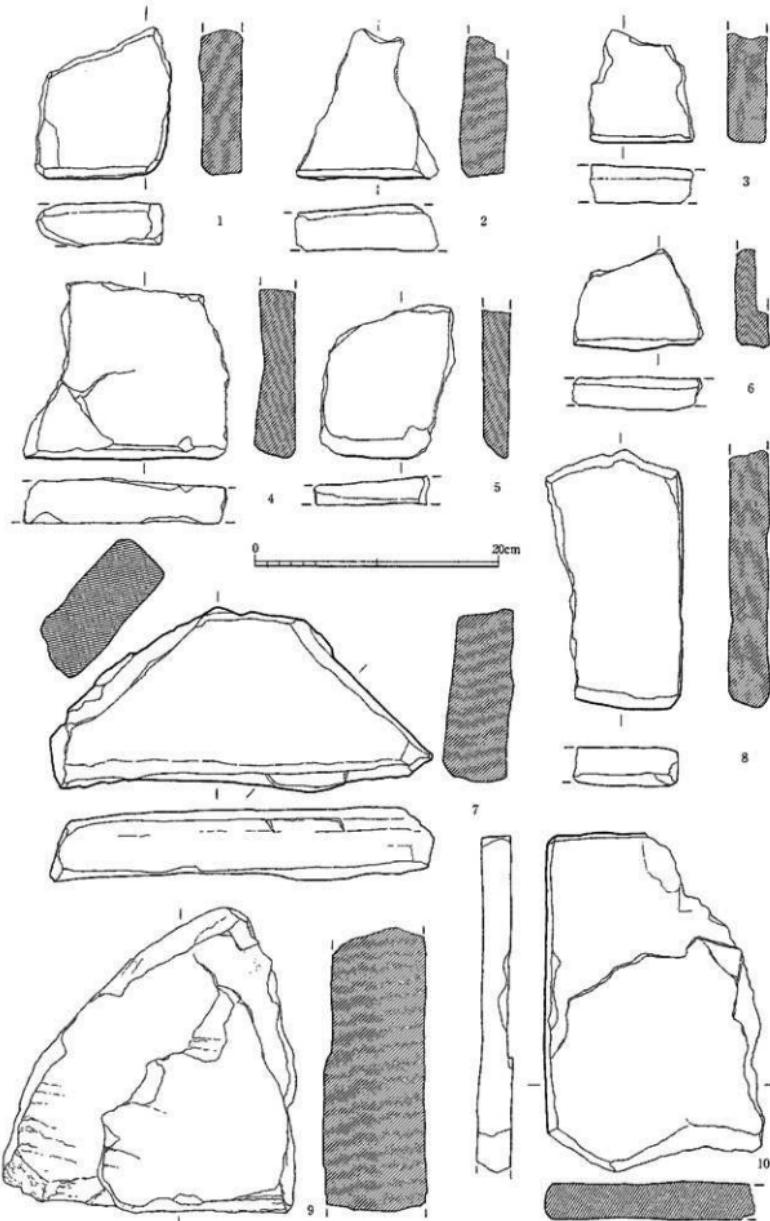
(1) は厚さ 0.09mm、(2) は厚さ 0.07mm、(3・4) は厚さ 0.1mm の薄い金板である。(1) は 1.0 × 0.9cm、(2) は 1.2 × 1.1cm の方形、(3) は底辺 1.8cm・高さ 5.0mm の三角形で、両斜辺は端部を切り取らずに残している。(4) は幅 2.4cm・高さ 1.2cm の木の葉形に切っている。いずれにも孔はみられない。

(5) は鉄製の鉢で、鉢頭径 2.0mm 弱・軸径 0.5mm・軸長 6.0mm である。(6 ~ 10) は金製鉢で、鉢頭径 1.3 ~ 1.47mm・軸厚 0.7 ~ 0.9mm で下方に窄まり、いずれも断面は下半あたりから多角形となる。全長は 5.0 ~ 5.6mm で、鉢頭高 0.7 ~ 0.8mm でその頂部は平坦もしくは凹んでいる。

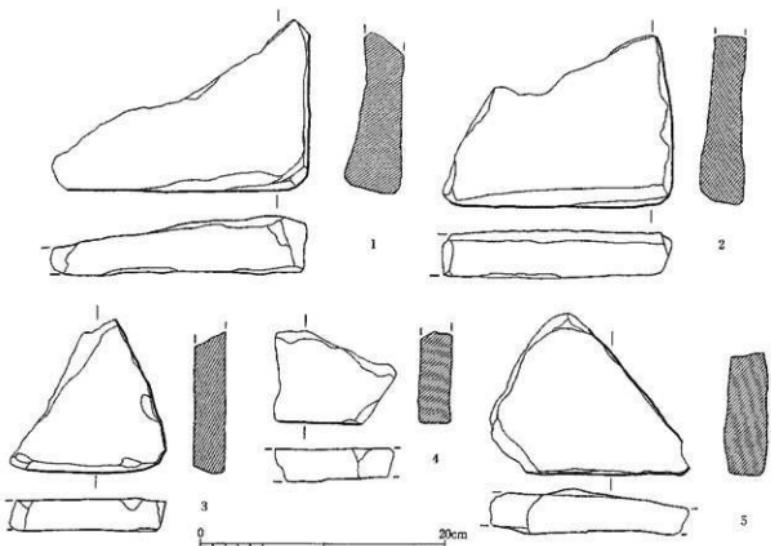
#### 石材（第 98 ~ 100 図・図版 146）

奈良県室生郡一帯に分布する流紋岩質熔結凝灰岩（室生安山岩）、いわゆる「棟原石」の破片が石室、羨道、第 6 トレンチ南端の後世の擾乱土より出土している。出土層は石室内堆積土（第 186 ~ 207 層）、削られた墳頂南斜面の現在の耕土下の一連の盛土（第 6 トレンチ南北断面第 53 図第 157 ~ 172 層）、さらに、周辺では前面テラス状施設南端の擾乱盛土（第 6 トレンチ南北断面南端第 53 図第 271 ~ 276・289 層）から、小片も含め 100 数点採取された。その中には接合可能な破片が 10 数点あり、石室内の堆積土から出土した破片が、前面テラス状施設の南端擾乱土の破片と接合できるものも含まれている。

破片には、側辺の端面や稜角、一部平坦面を削っている痕跡が認められるものがある（第 99



第98図 石室内攪乱土出土榛原石・アプライト片実測図 (1/4)

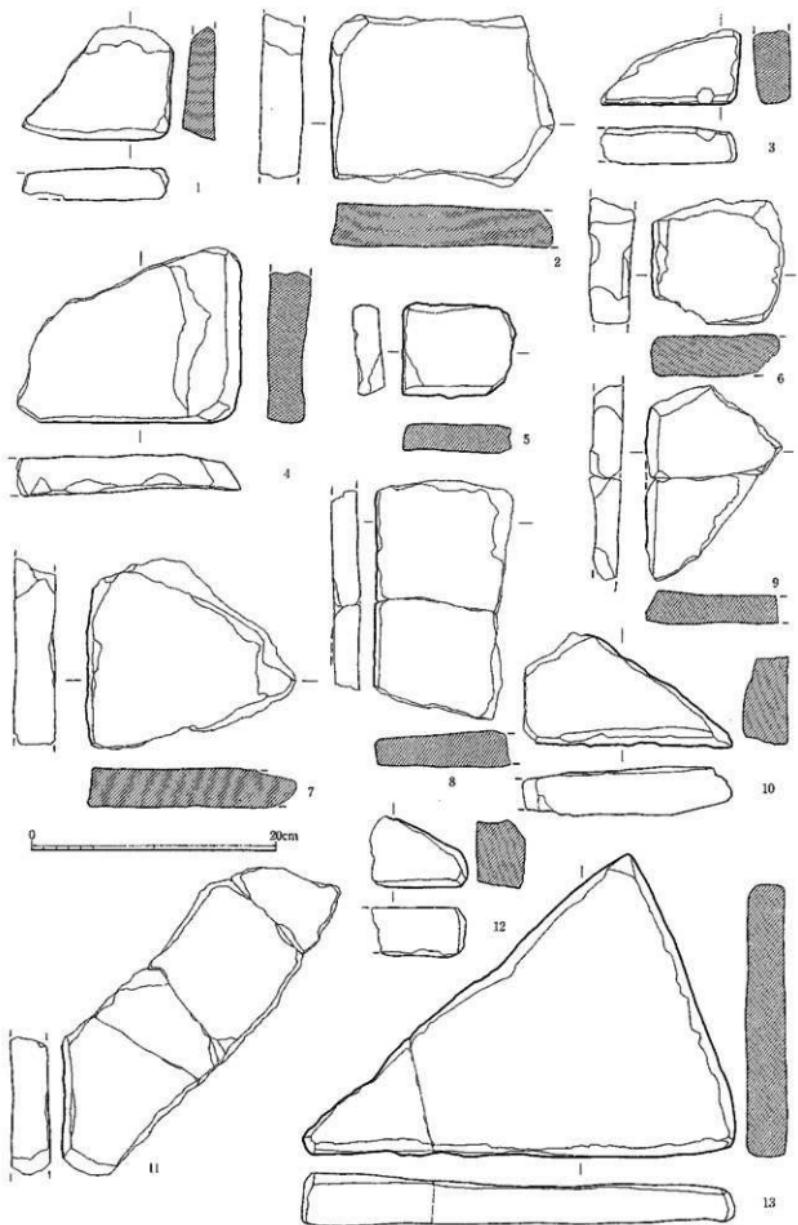


第99図 美道部搅乱土出土榛原石片実測図 (1/4)

図1・2、第100図8)。また全周に加工を施す例もある(第98図8、第100図7)。平面的には三角形(第98図7、第99図3・5、第100図10・13)のものや方形であったと思われるもの(第98図10、第99図1・2、第100図1・3・4)の破片が見られる。厚さは1.0～6.0cmにわたっているが、2.5～4.5cmが多い。現地調査の時点で採取された破片以外に、室内洗浄の過程でも小破片が見つかっている。その他の石材としては、板状のアライト片が石室内堆積土より1点出土しているほか、仕切石に用いられた例を別として、細片・細粒となった凝灰岩がコンテナ(57×33×13cm)にして4箱分を採取している。一部に面をなすものも認められるが、具体的な形状は不明である。破片の中には搅乱土の堆積過程で漆塗籠棺片の朱漆が付着した破片や、土圧によって十混じりの凝灰岩の屑に籠の編目そのものの痕跡がとどめられた例もある(図版118)。

#### 漆塗籠棺(図版116、145)

すべて破片状態で、大は10.0～13.0cm四方の破片から屑粒のものまで、総量は遺物コンテナにして8箱程度出土した。石室内堆積土のみならず、外部の周溝埋土、棚田造成に伴う搅乱土からも出土している。第23トレンチでは、周溝の底面に土が溜まり始める頃の堆積土である第30層からその細片2点が出土した。同様の土層は第8トレンチでも確認され、そこから須恵器杯身、甕の破片(第67図22、24)が出土している。このことは埋葬施設の盗掘または破壊が少なくとも8世紀中頃までには行われたとみられる。全形は知りえないが容器の口縁部、体部または底部、コーナー部分、底部から体部にかけての破片がある。その破片を全て面積計算し



第100図 第6トレンチ南端搅乱部出土榛原石片実測図 (1/4)

たところ、全体で 1.0 m<sup>2</sup>足らずであった。

これらの破片について復原研究した結果が第 2 部第 2 章第 5 節に掲載されている。

## 第 2 節 駕田古墳

この調査区は平成 13 年度第 20 レンチの東端にあたる。その際の調査ではここには南北溝が検出されていた。しかしレンチ南側のコンクリート擁壁(高さ 3.5 m)が、圃場整備事業によって取り去られることとなったため、事前に取り外しを行なったところ、その壁面に東西 16.0 m 余にわたって古墳の石室正面、墳丘盛土、堀削、石室構築土などが露呈し、その結果新たに古墳 1 基が発見されるに至り、約 450.0 m<sup>2</sup> の範囲で調査を実施した。ただし平成 14 年度の調査では埋葬施設の内部調査は行なわず、古墳の規模・形状・残存状況を確認するにとどめ、古墳は圃場整備事業では盛土を行なって保存されることになった(第 101 図)。

### 1. 位置

平成 13 年度に調査したシヨツカ古墳の北東約 50.0 m に張り出す尾根の南端にあたり、シヨツカ古墳に非常に接近している。地籍図には「駕田」とあるので、「駕田古墳」と命名した。背後には、シヨツカ古墳の場合と同じく、標高 238.9 m の「一の禿」から派生する主尾根に連なる標高 186.6 m の山頂が迫り、背後にこの山を意識して築かれたことは明白である。

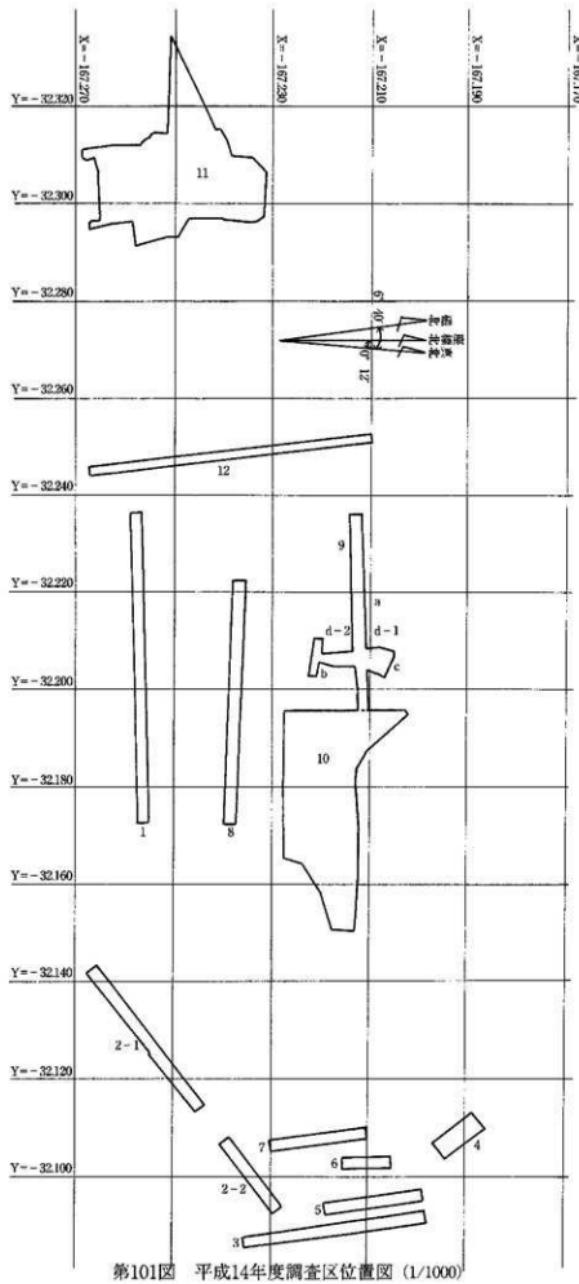
### 2. 墳丘(第 102 ~ 108 図)

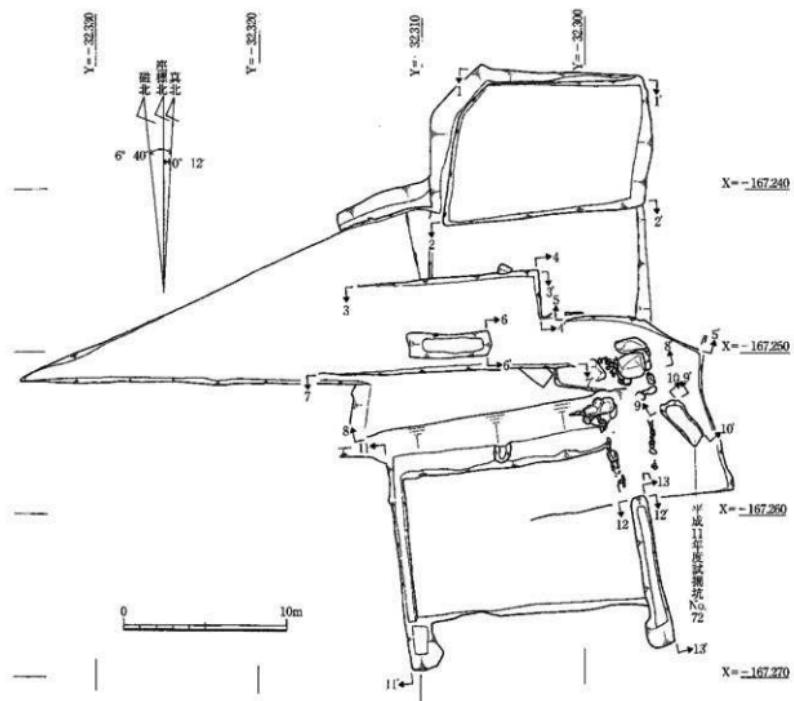
後世の棚田造成により削られて全形をとどめていないが、西側は墳丘から堀削の肩までが確認できる。墳丘盛土は削られているが高さ 2.0 m 程度が残り、石室の天井石が一部露呈した状態である。掘られた墳丘の北西コーナーと石室前面との位置関係から、平面形態は東西 15.0 ~ 16.0 m、南北 9.0 ~ 10.0 m の長方形となる方墳で、周囲には北西から下る尾根の先端を南西 ~ 北東方向に断ち切って掘り込まれた、幅 6.0 m 程度の掘り割が墳丘の西側そして北側をめぐる。東側は損なわれて原状をとどめていないが、地形からみて、尾根の西側と北側の二方を大きく逆 L 字形に切って堀削とし、その南側に墳丘を築いている。

墳丘の盛土はコンクリート擁壁を取り除いて露呈した古墳前面の南側の東西断面(第 19 図 8 - 8')と搅乱された墳丘東北部の断面(同図 5 - 5')によって観察した。東西断面では北西から南東にのびる尾根の先端を北東 ~ 南西に断ち切ってある程度の平坦面を確保した後、この平坦面に石室構築の基盤を築く盛土を行なっている(第 19 図 8 - 8' 断面図第 198 ~ 272 層)。また石室周囲では側石を据えた後、その下半を固定させ(173 ~ 178 層)、上半は何層も薄く土を盛り上げている(第 139 ~ 172 層)。墳丘北半部の搅乱部分の断面では層厚 2 ~ 3 cm の粘質土と砂質土を概ね交互に積み上げる版築状盛土を観察できた。

### 3. 埋葬施設(第 107 図)

本墳は 1 つの墳丘に石室を 2 つ同時に並列して築く双室の形態をとっている。規模、主軸、構造とともに同じ企画のもとに築かれ、墳丘の南北中心軸を挟んで東西に対称的な位置関係をとっ



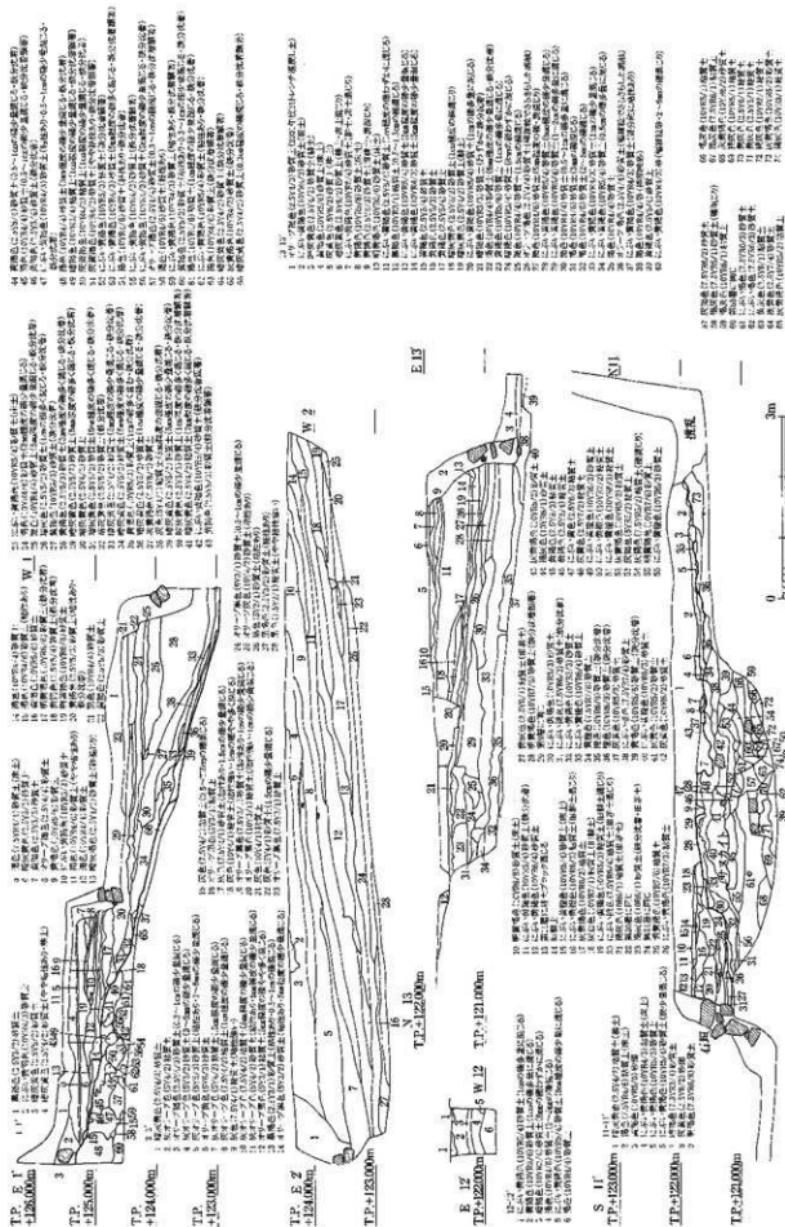


第102図 第11調査区平面図 (1/300)

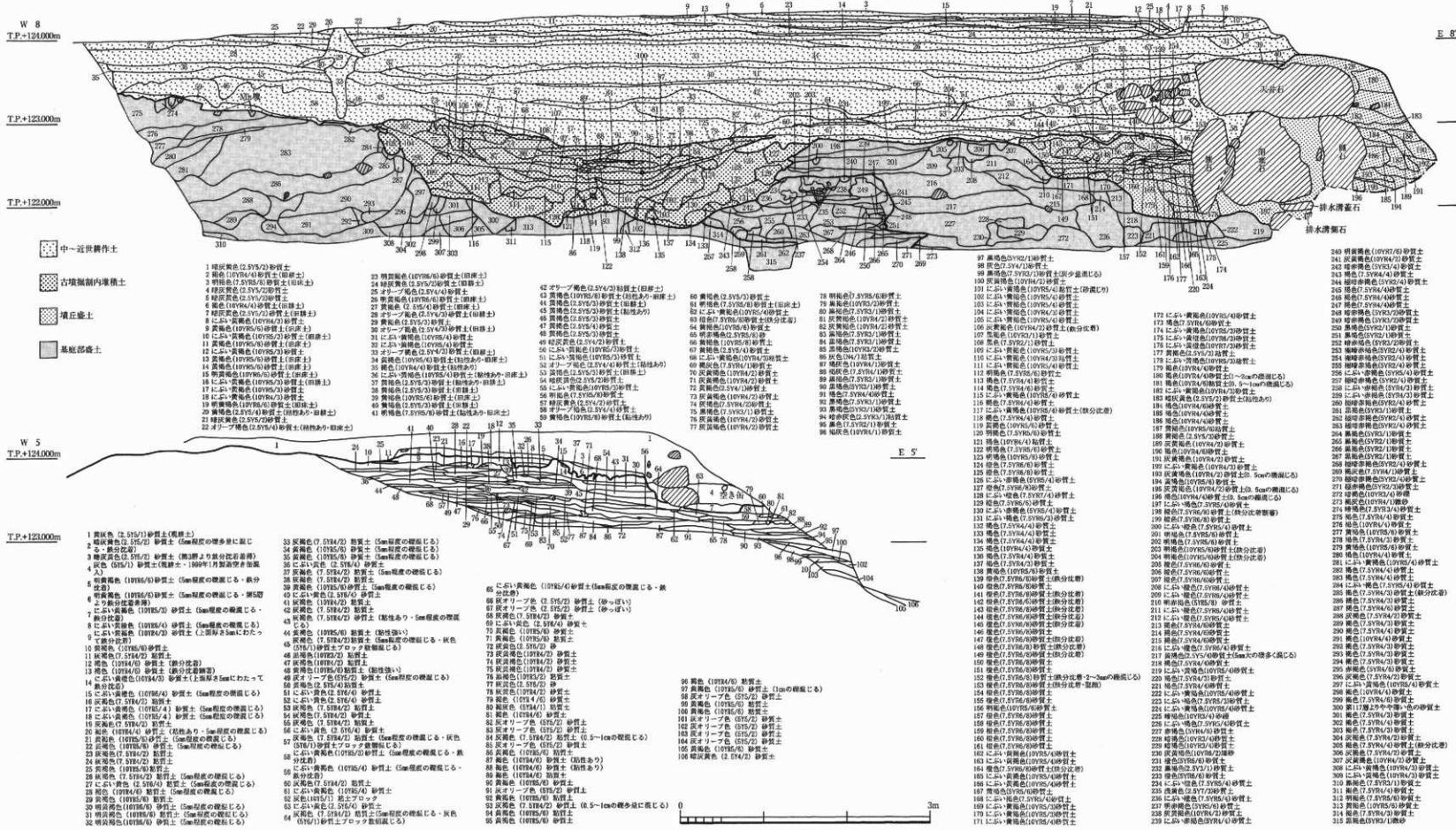
ている。石室の前面にはそれぞれ排水暗渠が設けられている。

東石室は損壊が激しく、入口天井石とその側石が既に取り外されて、側石抜き取り穴だけがその痕跡をとどめ、また2枚目の天井石は東端がそれを支持する側石の内側に落ち込んだ状態であった。さらにその天井石の西側には盗掘の痕跡と思われる礫溢りがあり、北西側斜め上から盗掘坑を入れて東石室に侵入したことがあったようである。礫に紛れて近世磁器碗(105・106)が出土しているので、18世紀前半にはこの盗掘が行なわれたとみられる。

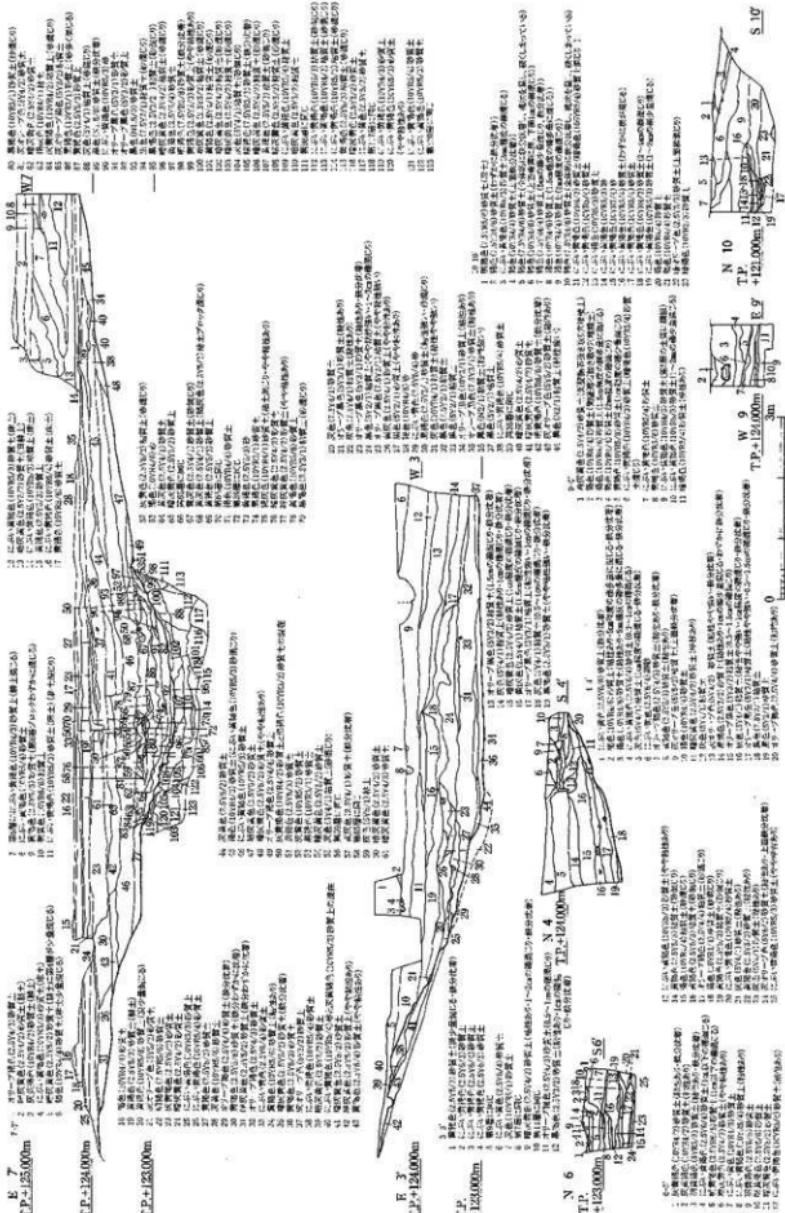
東石室内は天井まで泥土が溜っていたが、筆者が現場に不在の間に、手違いで現場作業員がこの天井石の下の泥土を床面より15.0cmの高さまで搔き出してしまっていた。入り口の両側石の抜き取り穴の間には板状の凝灰岩の一部が露呈していたが、これが床石の一部であるかどうかはわからない。全体が露出した南から2枚目の天井石の大きさは1.7m四方・厚さ0.8mの自然石であった。厚みが減じる西端の下では、長さ30.0cm・厚み14.0cmの板状の川原石を側石の上に置いて内法の高さを整えている。床面の状態を確認するため10.0cm四方を掘り込むと、床面直上1.0~2.0cmの間には赤色顔料が付着し、その上に2.0cmほどの微砂混じりの粘土が堆



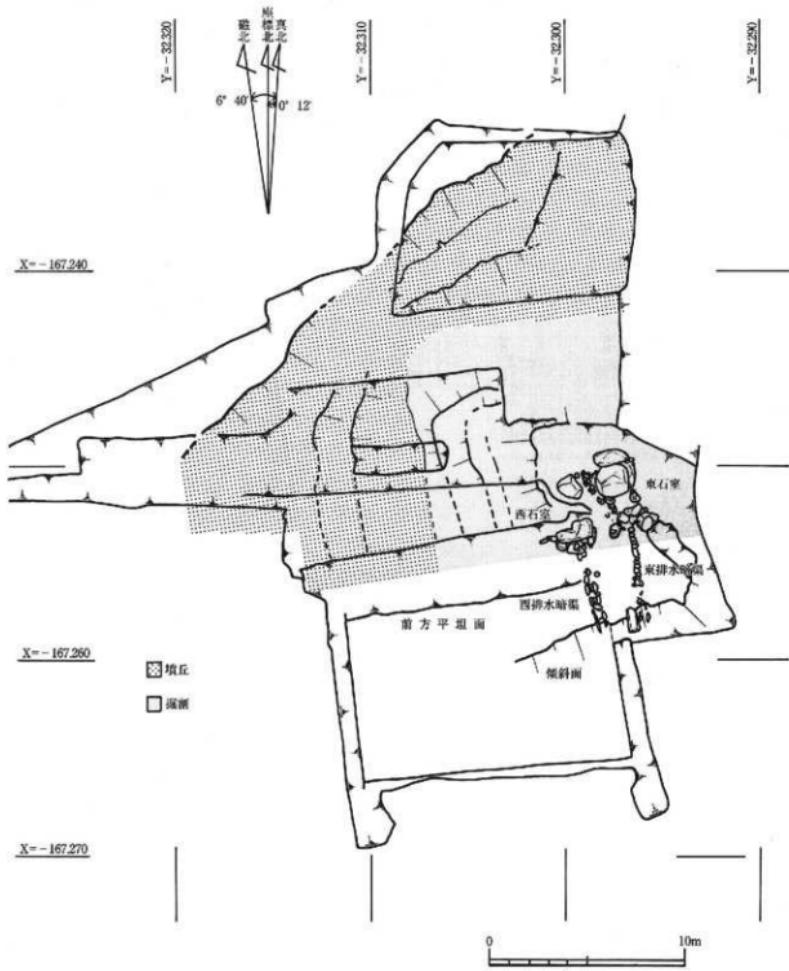
第103図 第11調査区断面図（1）(1/80)



第104図 第11調査区断面図（2）（1/40）

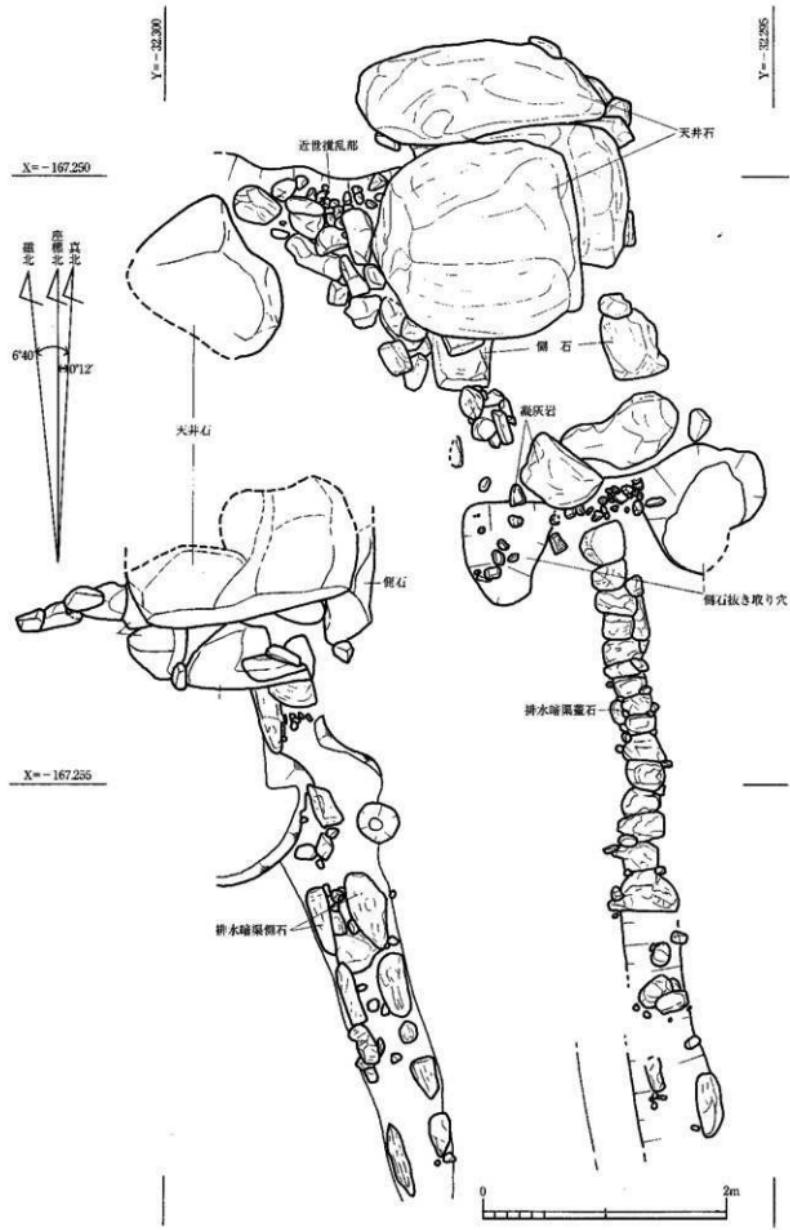


第105圖 第11調查區斷面圖（3）

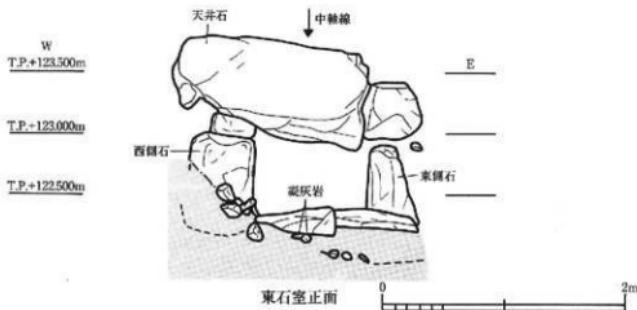
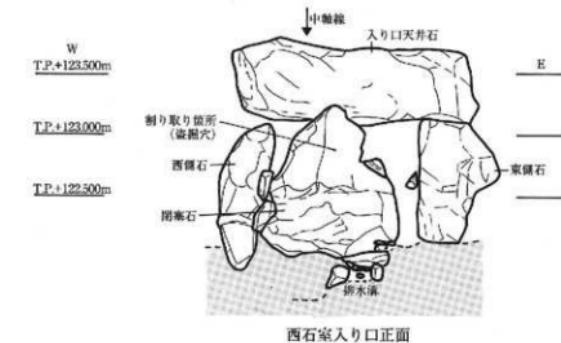


第106図 鶴田古墳平面図 (1/250)

積し、それより上は上記の粘泥であった。床石を洗うと暗褐色に沈着した鉄分の付着が確認された。おそらく棊原石を使用しているものと思われる。さらに入口から5cm間隔に奥行き2.9mまで鉄ピンにて床面高を探ると、T.P.122.260～122.277mを計測したので、床面はほぼ平坦であり、床石は完存していることが分かった。なお石室床面上に堆積した微砂混じりの粘土から長さ2.11mm・径1.69mm・重量0.1g以下の管玉が1点が出土した(図版126)。黒みを帯びた



第107図 駕田古墳埋葬施設平面図 (1/40)



第108図 駕田古墳東西石室前面立面図(1/40)

赤色のガラス製で、縦縞がある。石室の奥行きはほぼ2.3 mが残る。入り口での石室幅は0.9 m・高さ0.8 mの石柳状であり、自然石の平坦面を内側にしている。

西石室は、入口天井石とおそらく2枚目の天井石と思われる一部が露出していた。しかし、東石室とは異なり、上部に攢乱の痕跡はなく、入口正面に高さ1.3 m・幅1.2 mの自然石を立てて塞いだ閉塞石が残っていた。右上隅を0.5 m四方に割り取っているので、この部分から盜掘が行われたようである。このように西石室は原形をよくとどめている。天井石幅は約2.0 m・厚さは0.7 mで、入り口の高さは2.0 m、左側石は幅0.6 m・高さ0.95 m、右側石は幅0.4 m・高さ1.2 mで、閉塞石と両側石の隙間には長さ25.0～30.0 cm・厚み10.0～20.0 cmの川原礫を詰めている。また閉塞石の右下にも安定を図るために同様の礫がいくつか詰められていた。石室は奥行き3.0 m程度とみられ、幅・高さともに1.0 m程度で、東石室と同様の石柳状である。磁北と石室の主軸の北での振れは、東石室がN-6°-W、西石室はN-4°-5°-Wと推定され、両石室の中軸線は2.6～2.7 mを隔ててほぼ平行している。

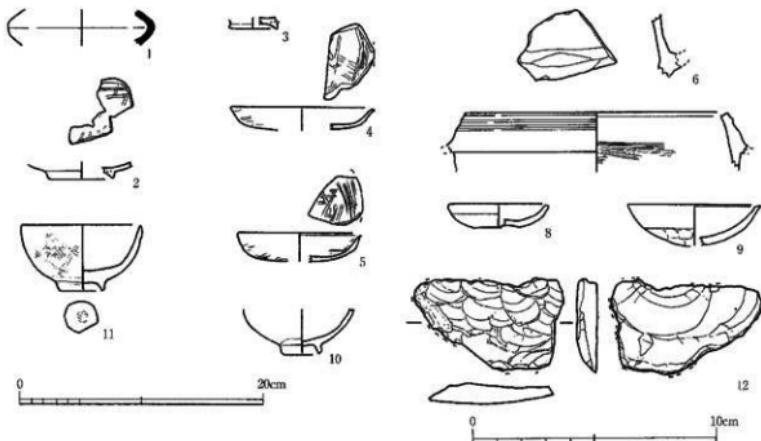
#### 4. 排水施設

石室前面では耕作土を除去すると直ちに暗渠の蓋石が露出し、排水溝の掘り方上面が現れ、東西両石室の前面に南へ排水暗渠が延びていることが判明した。そして、この暗渠の途切れるところから南側は傾斜面となっている。東側石室から延びる暗渠は、延長約5.0mで、南端より北へ2.0mの間には既に蓋石ではなく、一部に壠方に据えた側石が残るのみであった。蓋石は長辺25.0～50.0cmの川原石を横長に置いていたが、15個の石が原状をとどめていた。蓋石のない部分では溝の内法は30.0cm程度で、掘り方は50.0～70.0cmである。深さは20cm程度である。

西側石室から延びる暗渠は、閉塞石下より南端まで約4.5m、蓋石の残ることころはなく、幅55.0～80.0cmの溝の掘り方内側に35.0～60.0cmの長手の川原石を縦長に置き連ねて側石としている。溝の内法は20cm程度、深さは20cm程度である。いずれの暗渠も石室の主軸の延長線上に位置するが東のそれは中ほどでやや西に振り、西のそれはやや東に振る傾向が認められる。堀割 幅6.0m・深さ約1.0m程度で、最初に述べたように、墳丘の西と北の二方で画されている。南側断面では、堀割の底面に最初に崩落したブロック状の土塊（第100～138層）が深さ0.5～0.6m堆積した後、基本的にはレンズ状に堆積を繰り返して徐々に埋没する過程が観察された（第69～99層）。このうち崩落土と思われる第123・128層から土師器・須恵器片が出土した。

#### 5. 出土遺物（第109図）

本調査区の出土遺物のうち古墳に伴うものは東石室床面堆積土より出土した管玉のみである（図版126）。それ以外に堀割の埋没過程で混入した第123・128層出土の土師器・須恵器の破片がある。このうち形態の判明したのは、第123層出土の土師器杯身（104）、堀割の北側底面より出土した須恵器小型壺（96）、排水施設の検出された古墳前面の平坦面に堆積する床土出土の瓦器（97・99・100）、土師器壺または鍋の把手（101）、東側斜面の攪乱堆積土内出土



第109図 第11調査区出土遺物実測図 (1/4・1/2)

の瓦質羽釜（102）、そして墳頂部壇乱石溜りの磁器碗（105・106）などがある。

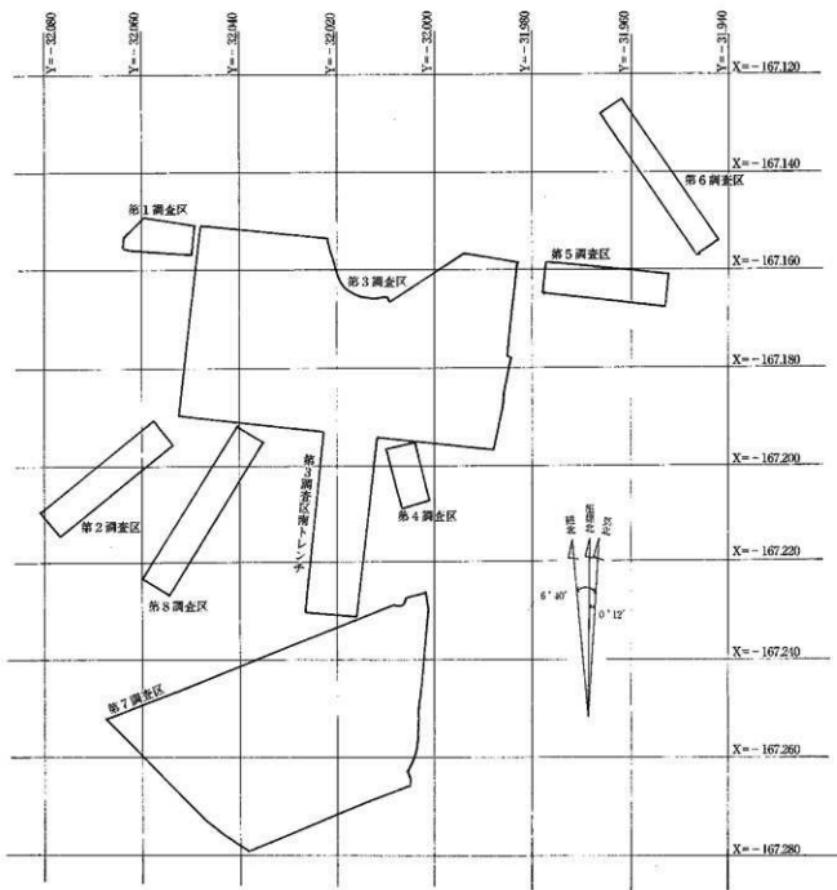
### 第3節 アカハゲ古墳

#### 1. 調査前の地形（第110～112図）

アカハゲ古墳の墳頂南縁に立つと、南西方向に平石谷開口部への展望が拡がる。そしてこの開口部を塞ぐように後方に巌山が聳え、その前面には石川を挟んで富田林方面の平野部が展開する。一方、平石谷開口部（T.P.102 m）に立って谷の内奥を望むと、このアカハゲ古墳の南西側の輪郭がまず目に飛び込んでくる。仮に、谷伝いに葛城山西麓へ至る古代の往来を想定すると、南に突出する平石谷右岸の数カ所の段丘は、山塊から谷水に下る景観に変化を与え、視覚的効果をもたらす格好の地形を提供している。そこに仰ぎ見るような古墳を築くのは、自然景観を巧みに取り込もうとする造形意識が働けば、自然なりゆきであろう。アカハゲ古墳はその最も顕著な地点を占めている。

アカハゲ古墳一帯の現状は棚田であり、石室開口部前は疎らに果樹の植え込みがある平坦な畠地である。墳頂はT.P.143.4 mの平坦なコンクリート敷き民有地350 m<sup>2</sup>で、3×5 mのプレハブ物置2棟、同3×6.5 m 2棟が配置され、その南は墳頂縁辺に沿って栗の木を植えた畠となっている。北側は、府道竹内河南線が南に張り出すカーブにあたる。この府道を越えた北側は、昭和39（1964）年の宅地造成によって破壊され、現在は造成頓挫して放置状態になっているが、本来はT.P.221.2 mの山頂から南西に下る舌状の山塊が屹立していた。墳頂はその先端にあたる。したがってアカハゲ古墳の占地には、平成13年度に調査されたシヨツカ古墳でみられた山頂から南下する尾根の稜線下降ラインを意識したような造営プランを再確認できた。ここをほぼ中心として、東西両側で谷地に下る軽い脊梁が南に延びている。古墳は、その間約80 mの東西に拡がる空間で尾根の比較的安定した張り出し部を占め、比高差9 m以上、棚田にして5～6段に整えられた斜面に築かれている。平石谷ではこのような安定した小地形は無駄なく棚田として利用されるのが一般的であり、後述するように壇上にさらに3段の墳丘を築いた本墳のような方墳であれば、棚田としての再利用になおさら好都合であったろう。

石室は、閉塞石上に被る表土と一部前端が露出する犬井石との間、高さ0.35 m・幅1.20 mをなして開口した状態である。地元の方々によると、1940年代には石室の天井石が露呈していた状況で、それ以後当該地が物置場として利用され始めた頃、府道の高さと合わせるために天井石の上に盛土をしたという。そうであれば現在石室を覆う盛土は必ずしも本来の墳丘を反映するものではない。平面的にみると西辺は比較的直線的に南に突出するのに対し、東辺は北東～南西の不明瞭な斜辺となっているのもそのためである。地籍図では墳丘部にあたる棚田に「赤几（=禿）」、その南の東西に長い棚田に「塚廻り」の字名がみえ、古墳の範囲をうかがわせる。「アカハゲ」とは墳丘盛土が露呈して、赤土が見えていた状況を指しているとも考えられる。この範囲では棚田の縁に集められた礫の中に、榛原石の破片が混じっている個所があり、それを採取するだけ



第110図 平成15年度調査区位置図 (1/1000)

もコンテナ数箱になった。この種の石は平石谷の飛鳥時代の古墳に用いられる特徴的な石材であることが知られている。おそらく、古墳が開墾に伴って攢乱され農作業の妨げになった結果、各所に集められたのであろう。

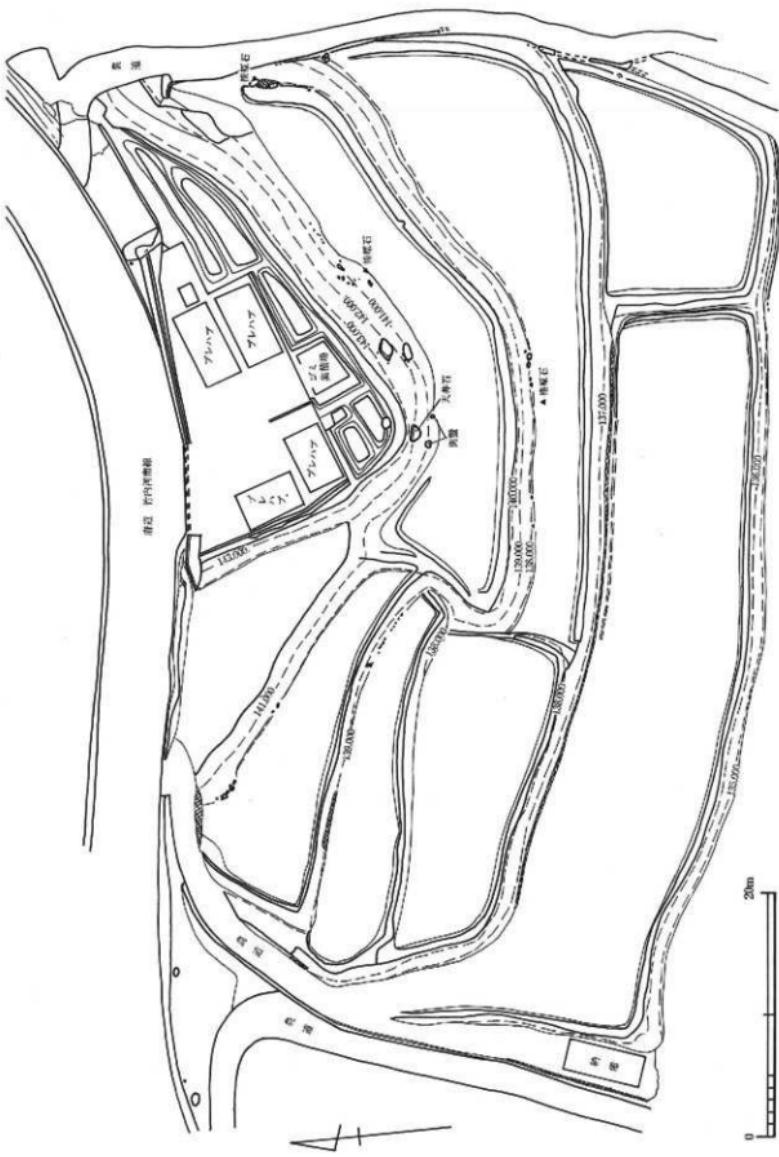
墳丘の南の古墳の壇に相当する棚田は他の部分に較べて、水はけが悪く、秋の収穫期を迎える水を流さなくなても、常に湿地のような状態であった。このことは農業用水には必ずしも関係なく、東西を谷で画されたアカハゲ古墳の範囲の地下水の浸透による可能性が高く、この水仕舞いが古墳築造にあたっても課題のひとつであったにちがいない。

平成11年度に実施した平石谷一帯の試掘調査では、アカハゲ古墳周辺に12箇所の試掘坑を設



第111図 調査区と地籍の位置関係図

定し古墳の形状、範囲、残存状態の把握に努めた。石室開口部の墳丘周辺では傾斜面や石の集中個所を認めたが、それより低い棚田でも一部に石の集中するところがあり、古墳の外部施設の可能性は高まった。ただ墳丘の西辺に設定した試掘坑で南北方向の直線的な地形変換ラインを認め、從来想定されてきた円墳のイメージは薄らいだが、それでも古墳の範囲は、後世の墳丘盛土の形状に目を奪われたことも相俟って、石室開口部のある墳丘を中心とする径 10 m 程度の円墳以上の規模を想定する根拠は得られなかった。調査担当者として、棚田に反映される方形墳の姿を積極的に想定できるようになるのは、やはり平成 13 年度のシショツカ古墳の調査以後のことである。



第112図 アカハゲ古墳調査前の地形図 (1/400)

## 2. 墳丘

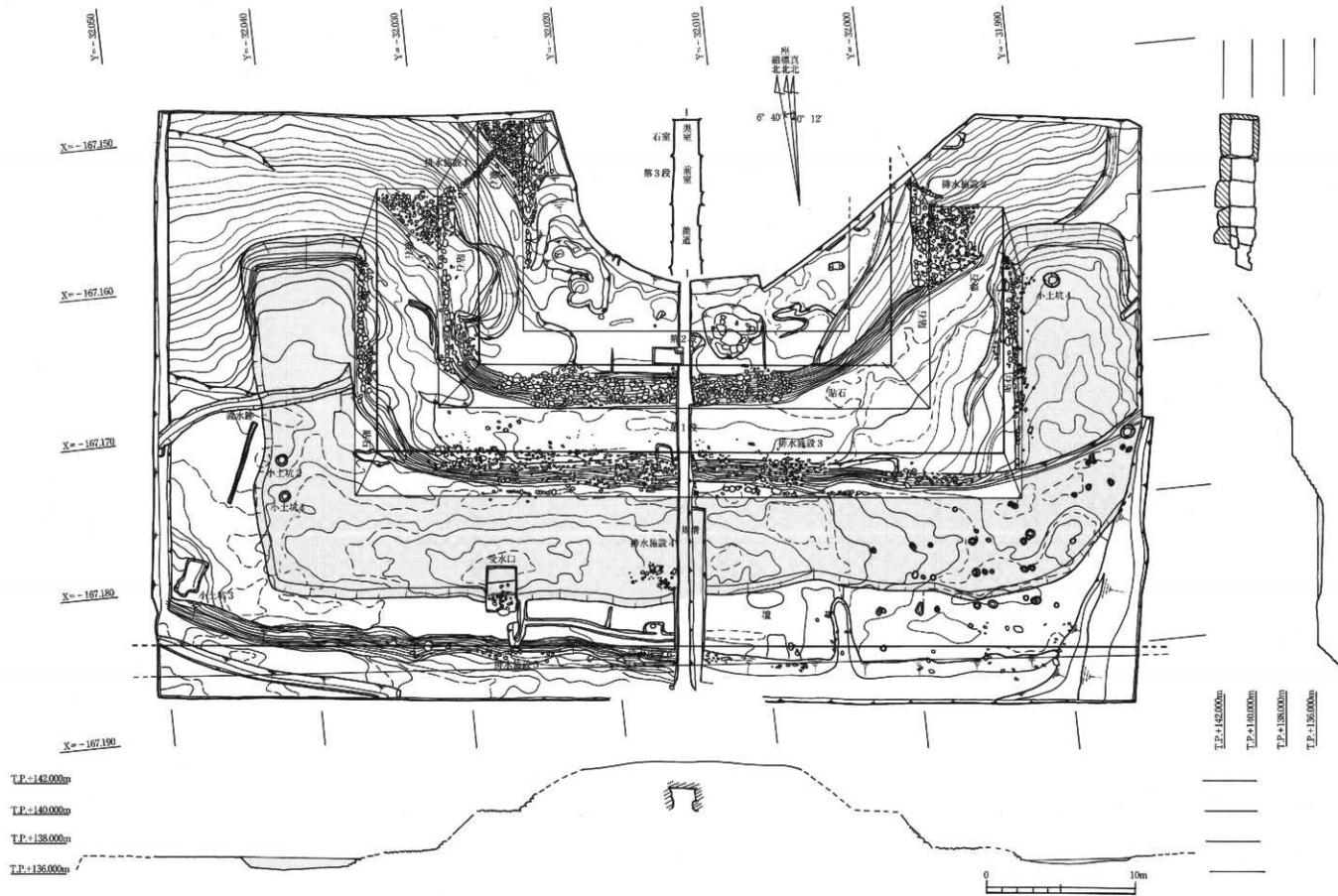
### (1) 墳丘の形状と規模 (第 113 ~ 118 図)

墳丘は 3 段築成で、形状は横長の方墳を企画している。この墳丘がその南に前もって築かれた壇の上に積み上げられるので、一見すれば 4 段築成にも見える。壇上面(T.P.135.9 ~ 136.3 m) と現状墳頂(T.P.143.4 m)との比高差は 7.1 ~ 7.5 m を測る。墳丘の搅乱は各所に及び、各段のコーナー部分を中心として、当初の輪郭はかなり損なわれていた。最も損壊が激しいのは、3 段目の南側から東側にかけてである。この箇所は昭和 40 年(1965)の調査以後も開墾が行われ、石室構築石材の一部が  $3 \times 4$  m、深さ 1.5 m 以上の不定形に掘り込まれた穴に、廃材や黒色のビニールゴミ袋の破片と紛れて投棄されていた。しかし、東西・南北の辺を留めるところを結んで辺長は復原でき、そのラインは墳丘に石を貼る際に用いられた黒褐色の粘土の残る部分をたどって得られるラインとも合致した。

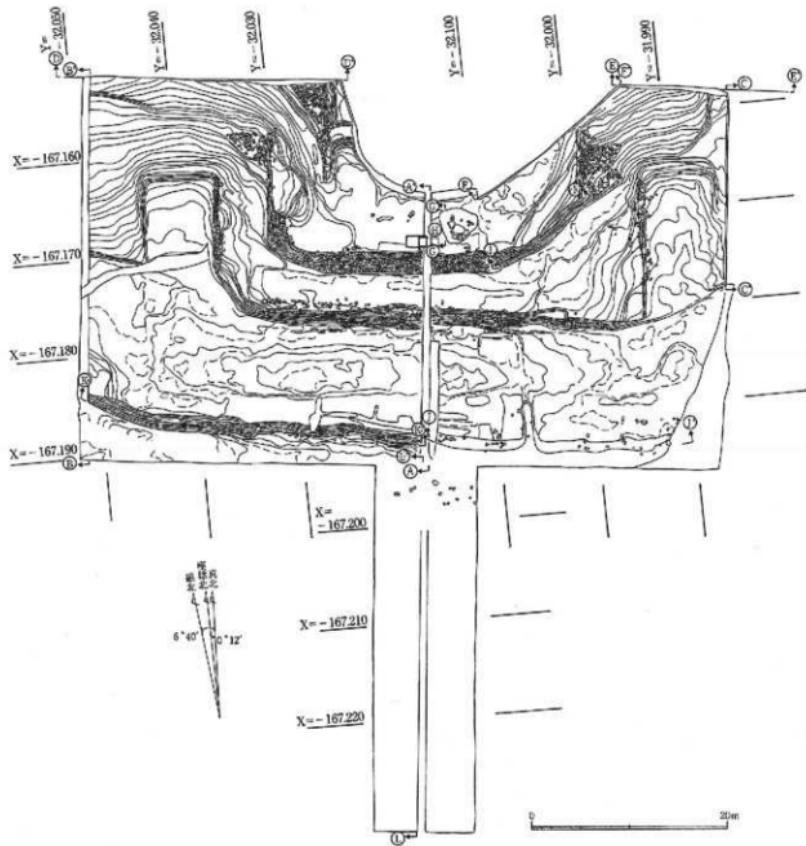
まず、東西辺長をみていくと、第 1 段上場 41.7 m・下場 44.4 m、第 2 段上場 27.5 m・下場 32.8 m、第 3 段下場 21.7 m を得る。南北辺長は南から北へほぼ水平に延長したラインが尾根の斜面にあたるところで終えており、数値は一定していない。第 1 段西辺では上場 17.5 m・下場 16.0 m、東辺では上場 16.6 m・下場 15.0 m、第 2 段西辺では上場 16.5 m・下場 14.6 m、東辺では上場 11.6 m・下場 13.5 m、第 3 段西辺では下場 14.4 m 以上、東辺は調査区内では完全に失われて不明であるが、かろうじて残った土色の変化からすると下場 7.0 m 以上となる。得られた数値を比較すると、東西辺長では第 1 段から第 3 段への縮小率は 66 ~ 74 % である。南北辺長は第 1 段では東側が長く西側が短く、上場と下場は 0.9 ~ 1.0 m の差があり、第 2 段上場下場では 1.1 m の差がある。当然、この差は、尾根の張り出し具合が東と西では異なる地形的制約に起因している。しかし、1.0 m 内外の差は、その地形を一定のプランに取り込もうとする強い企画性がなくては生じ得ない差と考えたい。第 3 段は北端が調査区外に及び、下場の長さ 14.4 m 以上というしかない。

墳丘第 1 段裾から現状の墳頂までの高さは、南辺中央で 7.4 m、東辺中央で 6.6 m、西辺中央で 6.8 m を測る。各段の高さは、第 1 段は南辺で 1.6 m、東辺で 1.1 m、西辺で 1.5 m、第 2 段は南辺で 1.8 m、東辺で 1.3 m、西辺で 1.3 m、第 3 段は現墳頂から西辺の貼石巻高さとの比高差 3.4 m となり、第 3 段は第 1・2 段の 2 倍程度の高さとなる。東に高く西に低い緩やかな斜面地で東西のバランスをとつて墳丘が構築されていることは、東西周溝底面の高さのわずかな比高差 0.2 ~ 0.3 m にも現れている。段の傾斜角を貼石の残るところでみると、第 1 段南側では  $40 \sim 42^\circ$ 、東側では  $43^\circ$ 、西側では  $35^\circ$ 、第 2 段南側では  $32^\circ$ 、東側では  $44^\circ$ 、西側では  $42 \sim 43^\circ$ 、第 3 段西側では  $45^\circ$  を測る。

各段の上面はテラスとなる。第 1 段では南側で幅 4.0 m、東側と西側では削られてはいるが、段斜面の傾斜角との関連から、それぞれ幅 4.8 m・4.3 m となる。第 2 段のテラスでは同じように計測すると、南側幅 2.3 m・西側幅 3.1 m を得る。東側は 2.9 m と復原される。



第113図 アカハゲ古墳全体図（1/250）

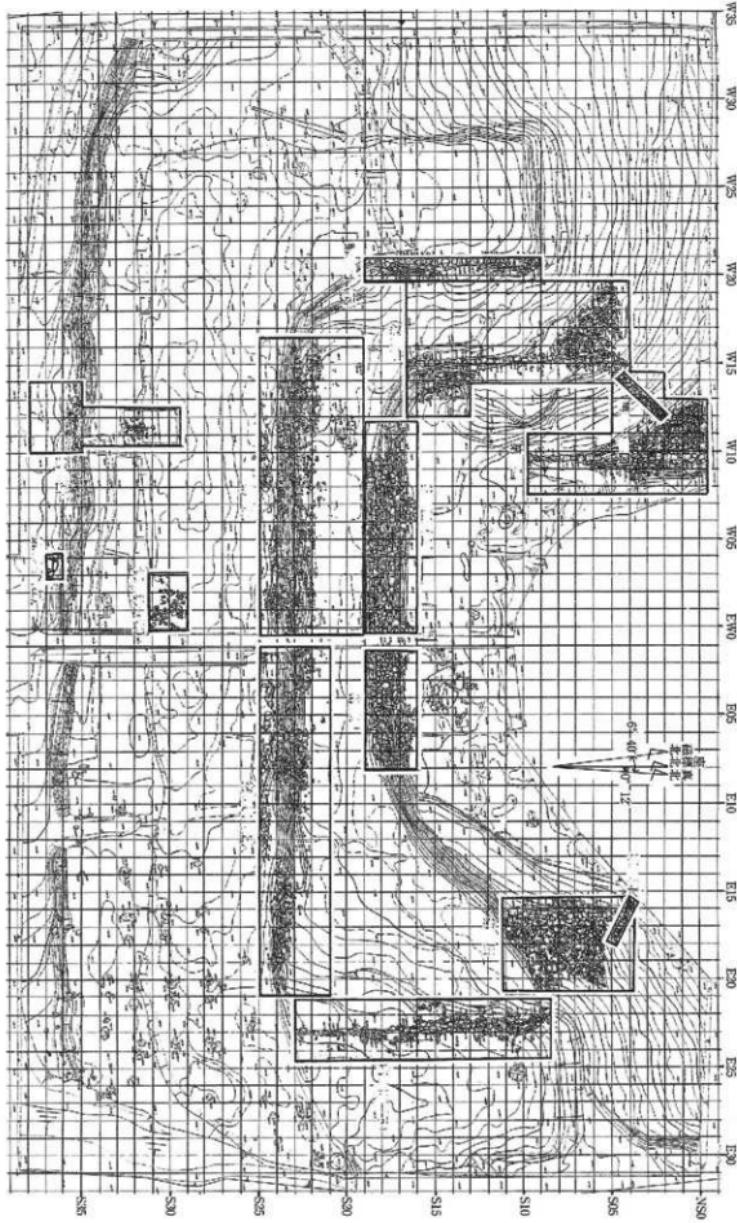


第114図 第3調査区断面図観察位置図 (1/500)

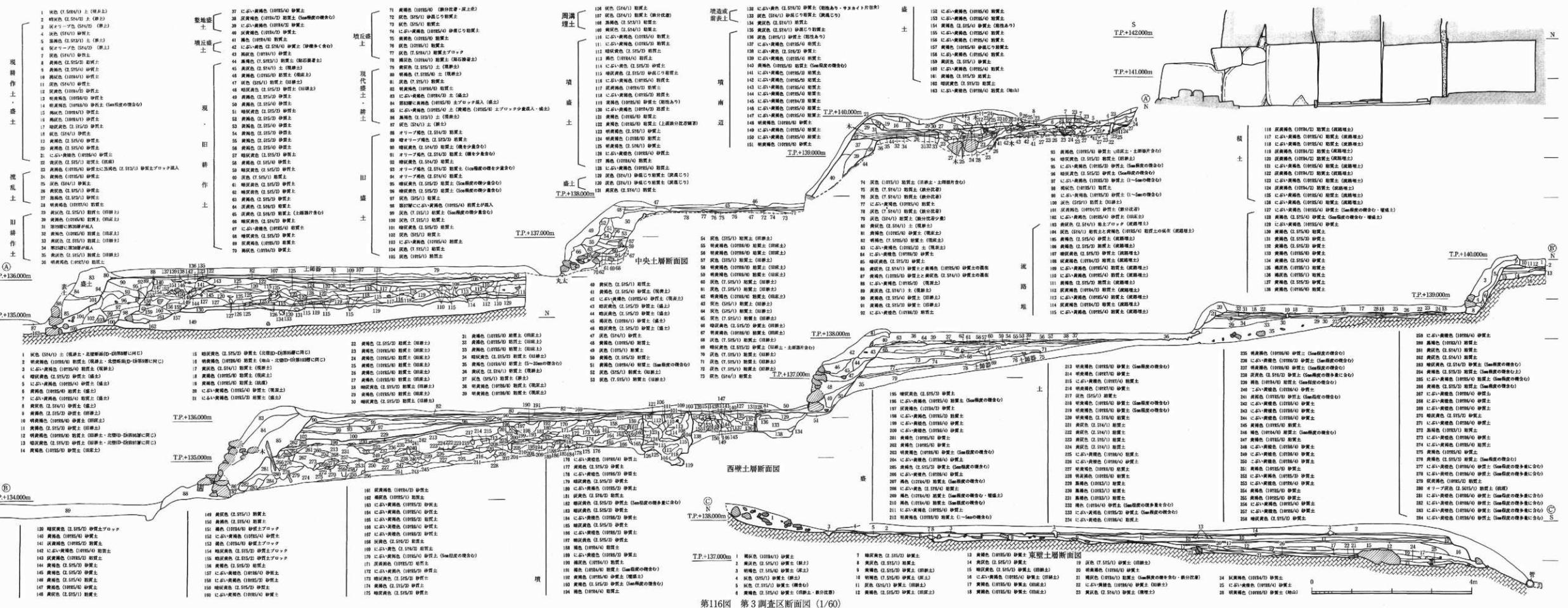
(2) 塗丘の構造 (第118図)

開墾により損なわれ、貼石下の盛土が露呈した部分や、攪乱坑を利用した最小限度の狭小な補足トレンチを設定して、出来る限り現状を損なわない形で塗丘の構築状況を観察することに努めた。第1段では、大きく削り取られた南東コーナーの斜面を清掃し、また第2段上面テラスでは、石室開口部前の攪乱坑の四面を整えてそれぞれについて断面を観察した。

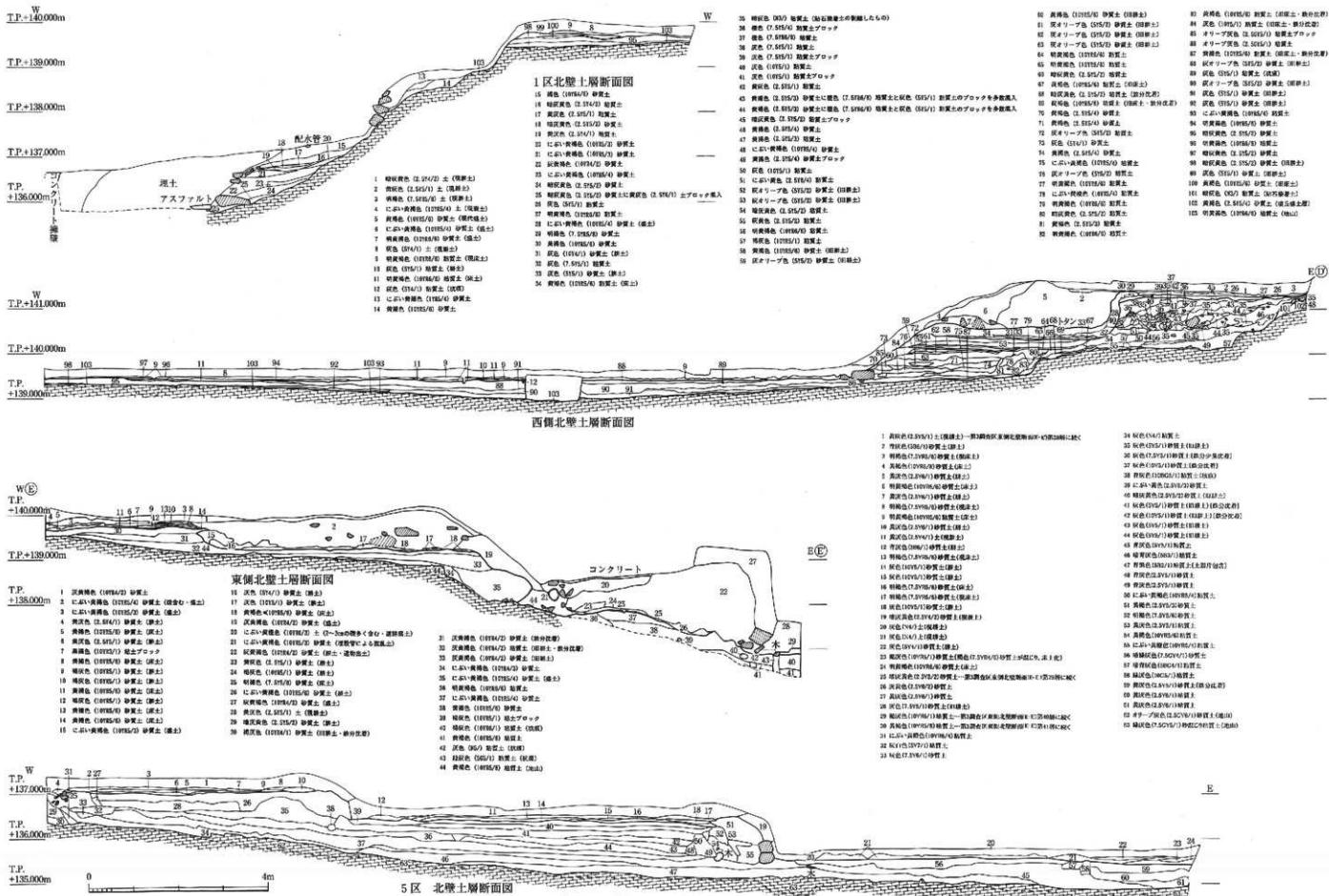
第2段の構築状態の一部を反映すると見られるのは、削り取られたその南東コーナーのE7～20にかかる断面である (I-I'断面)。第1段の盛土の上に高さ1.7mまで積み上げている部分がみられる (E7にかかる付近)。盛土は、大きいまとまりでみると3次に渡っている。第1次の盛土は、第1段盛土面より上に40～90cmの厚みで積み上げられている。断面位置が塗丘



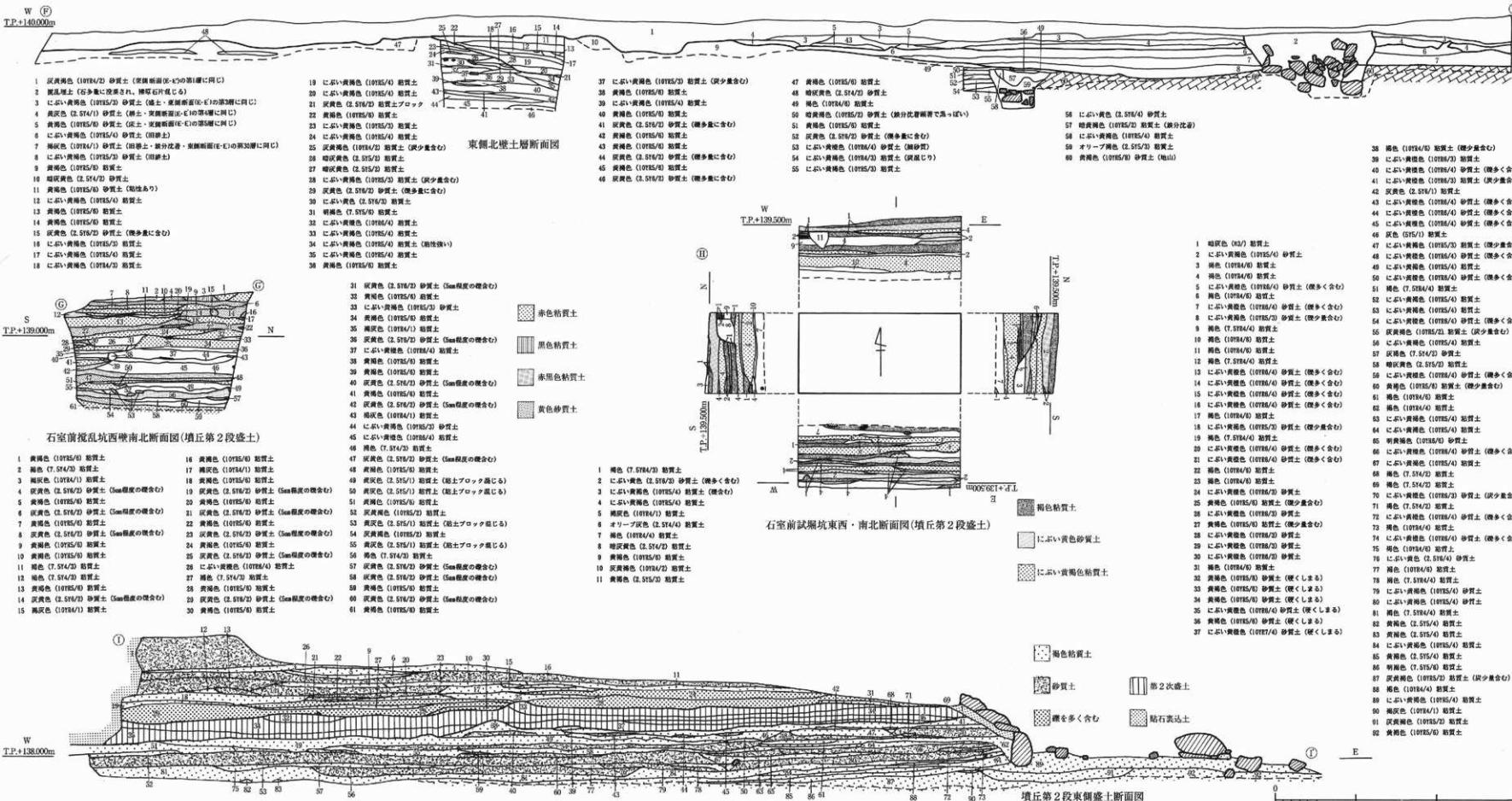
第115図 アカハゲ古墳詳細図位置関係図



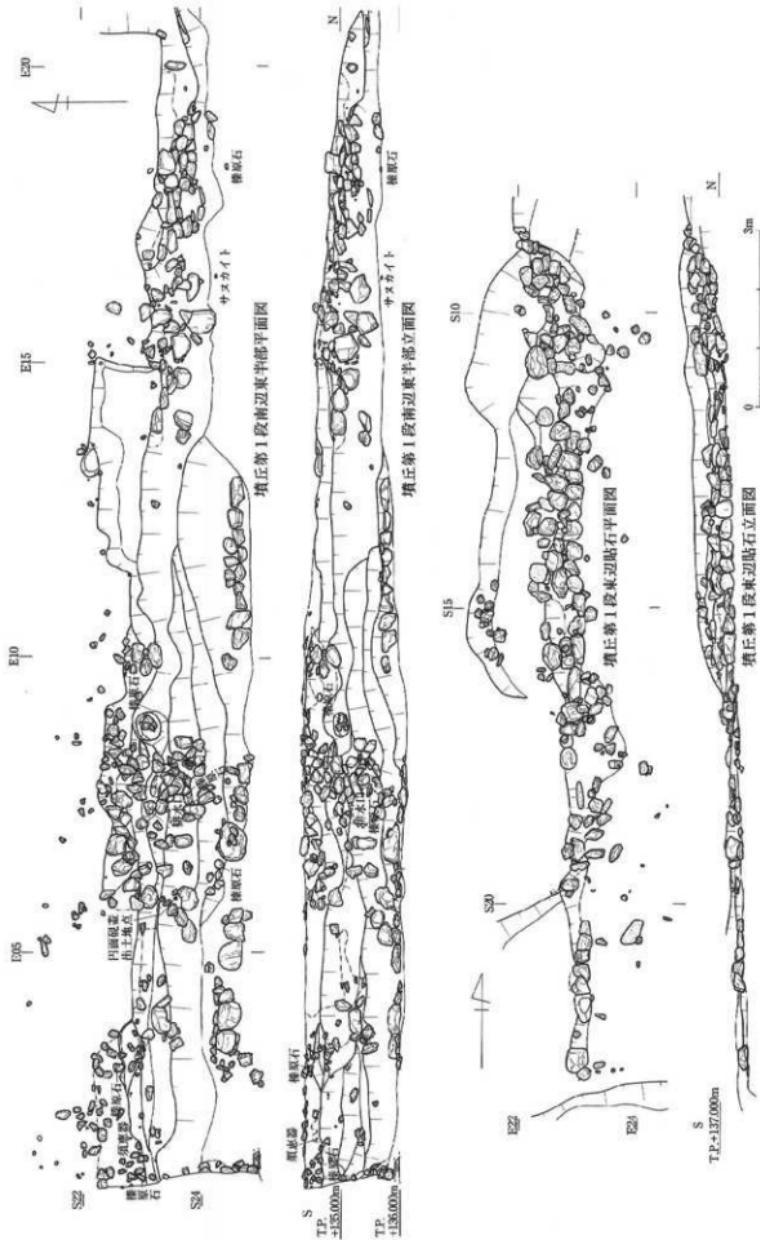
## 査区断面図 (1/60)



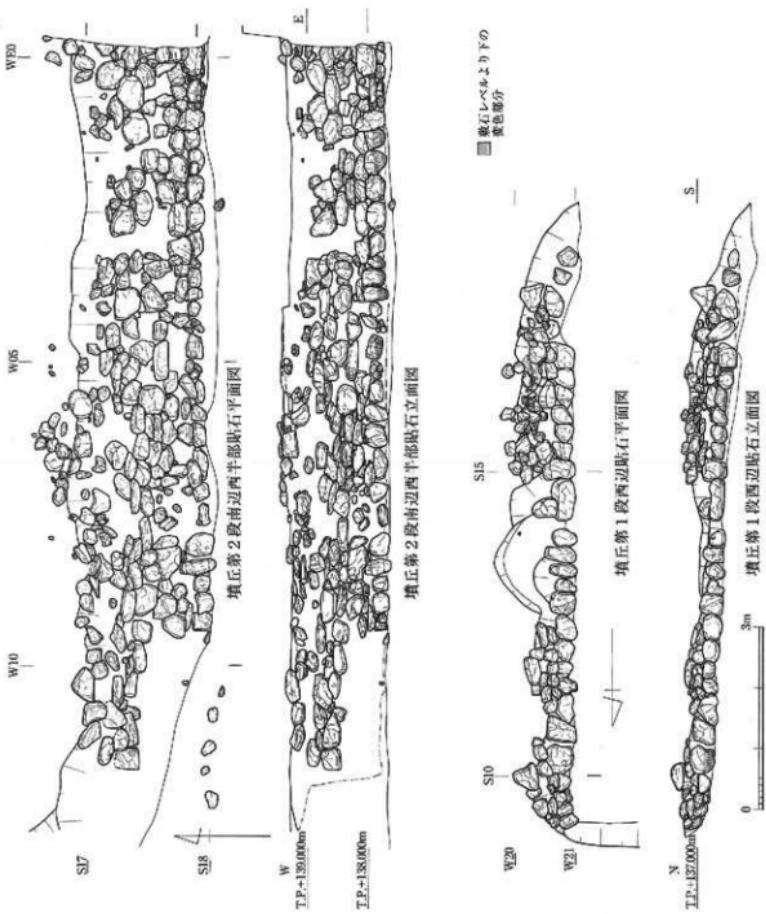
第117図 第1・3・5調査区断面図



第118図 墳丘盛土断面図 (1/40)

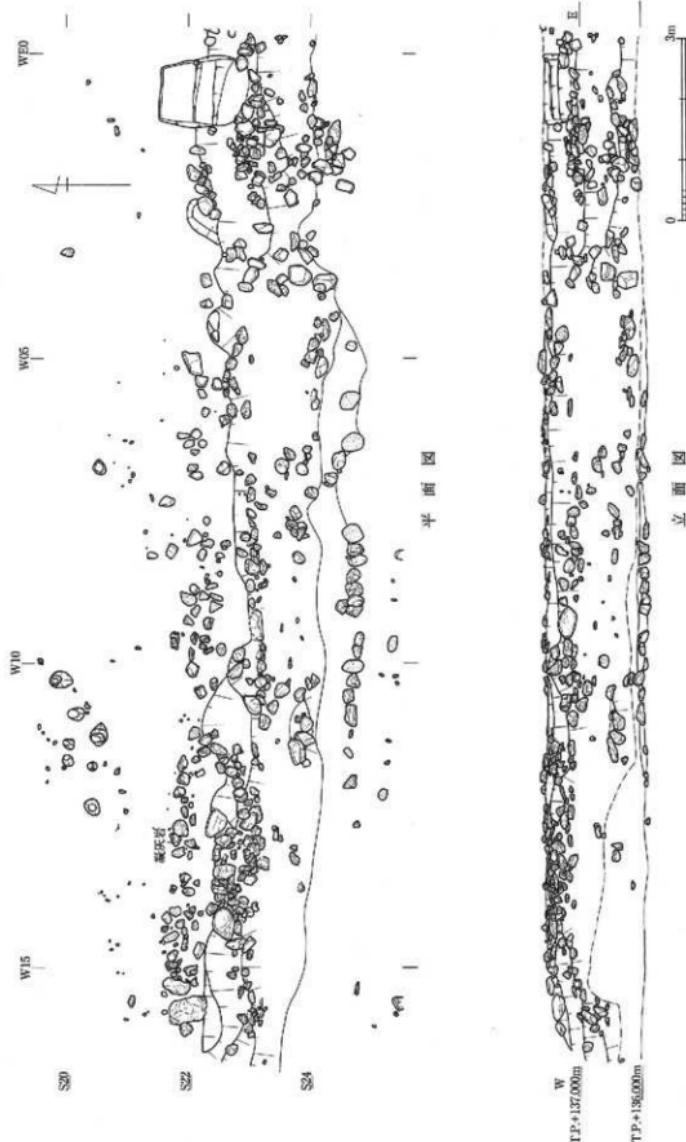


第119図 墳丘第1段南辺東半部および東辺貼石平面図・立面図 (1/80)



第120図 填丘第1段西辺および第2段南辺西半部貼石平面図・立面図 (1/80)

南東コーナーを斜めに削った面となるので、断面図の東側のそれぞれの層界がやや高くなるのは、正確には北にやや高くなっているのであり、つまり、北から南へ若干傾斜した面が反映されていることになる。下層に 15 ~ 40cm の厚みの粘質土を何度も積み、それより上位に 5 ~ 10cm 厚の砂質土とやはり同じような厚さの粘質土を交互に積んでいる。次いで第2次の盛土が施されているが、これは層厚 20 ~ 30cm の非常に堅くしまった砂質土を 5 ~ 6 層水平に盛っている。土圧により下位の粘質土に沈み込んでより安定した上面が得られている。この工程の後、最後の盛土がなされるが、まず盛られるのは礫を多量に含む粘質土、もしくは砂質土である。この盛土



第121図 填丘第1段南辺西半部貼石平面図・立面図 (1/80)



填丘第2段西辺貼石および第1段西辺敷石平面図



填丘第2段西辺貼石および第1段西辺敷石立面図

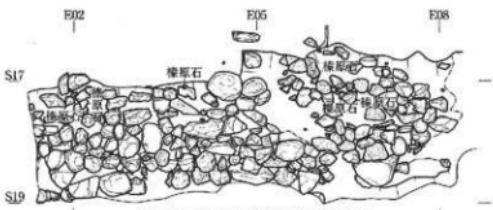


填丘第2段西辺敷石および第3段西辺貼石平面図



填丘第2段西辺敷石および第3段西辺貼石立面図

第122図 填丘第2段西辺・南辺東半部貼石および第1段西辺敷石平面図・立面図 (1/80)



墳丘第2段南辺東半部貼石平面図



墳丘第2段南辺東半部貼石立面図



墳丘第2段東辺貼石および第1段東辺敷石立面図

第123図 墳丘第2段南辺東半部・東辺貼石および第1段東辺敷石平面図・立面図・断面図 (1/80)

の上から、それより下の盛土をしっかりと固定させるかのように、最終的に厚さ70cmの粘質土と砂質土が互層となって積み上げられる。特にその粘質土の部分は赤土のように見え、墳丘第3段裾の擾乱個所の露呈した土質に似ている。以上の段の盛土を終えてから側面に黒褐色粘土を用いて石を貼った様子が、この断面の東斜面によく現れている。ここでは粘土の厚さは10cm程度

であり、また盛土の崩れを防ぐために厚さ25cm程度の石を立て据えていた。

石室開口部前の攪乱坑を利用した断面（G - G'断面）観察も第2段の構築状態を示し、面積は狭小ながら、こちらは南北方向からの積み上げ状態が観察できる。これによると観察された断面には大きく2回の工程がみられた。最初の工程は、10cm以下の薄い層と10～15cmの厚い層を交互に水平に盛り上げ、南側をいったん斜面としてから、再びその南側斜面を覆っていくようく厚さ5cmの土を水平に盛り上げている。ここでも粘質土と砂質土を交互に用いていた。これらの盛土は第1段のそれとは異なり、比較的薄い層を細かく積み重ねている点で、版築状の盛土といえるかも知れない。この工程を経て、盛土は貼石を施工する前の盛土、つまり墳丘の原形となる。同じような断面は調査区東側の南西～北東方向の壁面に設定した補足トレンチ（F - F'断面中央）でも確認された。そこでは東に傾斜する層界を観察したが、やはりこのラインを挟んで2工程の盛土となっている。これらの断面は南側から東側へと、墳丘の最初の盛土を巡るようにその外側に積み上げられた一連の作業を示すと考えられる。このように少なくとも第2段の構築には、前後2回の過程があったことが知られた。しかしそれが中心から周辺に向かって積み上げていく単なる過程に過ぎないのか、その間に何か別の工程を挟んでいたのか、それを判断できる証拠は得られなかった。水平に盛り上げていく各土層の中に、このように前後2回に渡る工程が識別され、その層界のラインが石室からみて南と東に傾斜する形となっている。そして最初の工程を終えた段階で、墳丘第2段の土台はできあがっているとみられる。つまり、石室構築の基礎はこの段階で得られていることになる。

### （3）貼石（第115～123図）

貼石が良好な状態で残っていたのは第2段南側で、ここでは段幅からテラス面までほぼ斜面全体の様子を掴むことができた。しかし、その他の部分については、各段に壠の貼石だけが残る状態であった。さらに墳丘のコーナーの貼石については、既に述べたように墳丘角がすべて削られていた関係上、どのように石が貼られていたのか分からぬ。全体的にみると南側と西側の貼石は、まず墳丘裾に縦長のほぼ一様な石材を用い、それより上位の貼石の基礎としている。規模は東側のそれと較べて大きく、均一な材を使用しようとしたことが明らかである。すなわち、墳丘第1段西側、第2段南側、第3段西側では50～70cm×30～40cmの石が多く使用されているが、第1段東側や第2段東側では50cmを超えるものは非常に少ない。貼り方についてみても、南側から西側にかけては比較的整然としているが、東側は雑然とした印象を受ける。また西に近く東に高い地形に制約されるので、西側の段の高さを東に延長すると、どうしても段そのものの立ち上がりが東側では際立たなくなる。このことからみて、平石谷開口部に面する南西側の側面が、ここでは重視されざるを得ない地形となるのである。

貼石の良好に残る部分についてみると、特に、最初に据えられる石は基本的に直方体の石を選んでおり、これを縦位置と横位置で据える。墳丘第2段南辺を例にとると、中軸線より西では、W2・W5・W7・W9、東側ではE3・E5、第1段西側ではS11・S13・S15・S17などに縦位置

で用い、その間を横位置で貼る傾向が認められる。作業の区切りとして何か目印のようにそうするのであろうか。南辺の縦位置の石の部分を少し浮かせて裏面を見てみたが、黒褐色粘土が存在するだけで、特段注目されるような事実はなかった。

貼石と敷石の施工上の関係を示唆するものとして、第2段南側や西側の裾の貼石に水平方向に変色部分が認められる石がある（第1段西側南北のS14～17にかかる貼石、第2段西側南北のS11～12にかかる貼石、第2段南側東西のW2～3、4～6にかかる貼石）。この変色のラインは1段目でT.P.136.5～136.7m、2段目でT.P.137.9～138.0mを測り、ほぼ一定している。このことから石が貼られた後、テラス面が整えられ、その上に石が敷かれたので、貼石の側面の下部はある程度埋まり、それより上位は残呈したままになったため風化により変色したと考えられる。

貼石の残る部分には、墳丘の構造で述べた黒褐色の粘土が必ず用いられている（第119～122図のトーンで示した部分）。石はこの粘土に押しつけて貼られている。また、貼石が外れた部分でもこの粘土の残るところがある。粘土は貼石をより強固に固定するために用いられたようである。貼石の中にはいわゆる榛原石が散見される。しかしそれは特にこの石材でなければならないというような状態ではなく、大きさもまちまちである。一般に石室内に用いられるのがこれまでの調査で判明しているので、おそらくその余りを外部にも用いたと考えたい。

#### （4）敷石（第122～123図）

各段上面のテラスに石を敷き詰めたもので、第1段・第2段の北西隅、第1段の北東隅において検出された。第1段北西隅では7.0m<sup>2</sup>、第2段北西隅では6.8m<sup>2</sup>、第1段北東隅では15.8m<sup>2</sup>が開墾から免れて残っていた。第1段北西隅の敷石はT.P.138.2～138.5m、第2段北西隅のそれはT.P.140.1～140.4m、第1段北東隅のそれはT.P.138.3～138.6mで、全体的にみて北から南へ若干傾斜面をなす。第1段北西隅のこの高さと、貼石のところで述べた石の一部に変色部分がみられる高さとを較べると、0.30～0.50mの高低差が生じている。このことからすると南北方向のテラス面の高さは必ずしも水平ではなく、北から南に下がる地形の緩傾斜面に合わせている。それは単に合わせていたといういとどまらず、石敷きの雨水などを始末する上では、若干の勾配をつけたほうが水はけに都合がよい。さりとてこの程度の傾斜なら、水平な段と平坦なテラスのイメージが損なわれるほどのこともない。後述する排水施設1の底面高をみても第1段テラスに高さを合わせているので、テラス面の滌水ができるかぎり南に落とそうとする意図が施工段階から働いていたとみられる。

第1段と第2段の北西隅、第1段北東隅に敷き詰められた石に共通するのは、20cm大の石が多用されていること、風化して砂状になった石が認められること、必ずしも石の平たい面を揃えてはいないことである。またこれらの3個所の敷石を比較してみると、最も丁寧に密に整えて施工しているのは第2段北西隅であり、また第1段北西隅では石と石の間にやや隙間が目立つが、この南端の一部に2段目と同様に密に敷き詰めた部分が残るので、本来は2段目とほぼ同じよ

うな丁寧な施工が行われていたと考えられる。これに対して第1段北東隅では石の大きさがまちまちあることに加えて、敷石間の凹凸が激しく、用いられている石も大振りの40cmを超えるものを乱雑に置いている。よって前2個所にみられたような平坦面とする意識は薄い。ここでは貼石裾の傾斜角が比較的に緩くなっていることとも相俟って、テラス面から段斜面への変換は一見すると気づかないほど漸次的に移行する。

以上の3個所以外の敷石は耕地開墾の過程でほとんど取り去られたようである。ただ貼石と同様、石を固定する黒褐色粘土はここにも使用されており、そのわずかな痕跡が各所に認められたことも含めて、敷石は本来少なくとも第1・2段のテラス全面に施されていたと考えたい。

### 3. 外部施設

外部施設としては墳丘の土台となる壇、その上面に墳丘裾を三方からを取り巻く周溝がある。

#### (1) 壇 (第121図)

壇の南に南北約25m、東西は東が農道によって削られ、崖面となり、西は谷地への傾斜面までの余地を勘案すると、少なくとも70mを測る。また東では第5調査区、西では第1調査区の東西トレーンチでいずれも谷地への傾斜変換部を捉え、これをそれぞれ南へ延長し、壇の東西ラインを交わるところから見て少なくとも70mを下回ることはない。壇上面の東端はT.P.136.3m、西端はT.P.135.9m、南辺での地山面と盛上面の境は、東半でT.P.135.5～135.7m、西半でT.P.134.3～134.7mであり、東端と西端の比高差は1.4mで、この高低差を盛上によって克服し、水平な壇造成を行っている。壇の盛土を南北方向で見た場合(第116図中火土層断面図)、地山面は南端でT.P.134.8m、北端でT.P.135.0mと北から南へ緩やかに傾斜し、その上に厚さ35～50cmの粘質土(第132層)が堆積している。上質は均一で、サヌカイト剥片が出土し、壇の盛土以前の堆積上と思われる。これより上に壇の盛土が行われている(同図壇盛土模式図)。それは大きくd-3→d-2→d-1の順に積み上げられ、d-4で南の斜面を補強して壇の盛土は完了する。d-1の盛土の過程でも南側を先に土手状に盛り上げておいて、それによって低くなった北側を盛る傾向がみられる。その結果、北側の墳丘裾寄りに浅い凹部ができるが、これが周溝となって、墳丘構築後そこに徐々にレンズ状に粘質土(c)が溜まっていた。その後は棚田の中に埋没し、耕土・旧耕土などのブロックが混じる後世の耕作土(b)、さらにその南端に石積みして棚田を造成した際の盛土(a)に覆われた。

壇の造成に用いられている土やその盛り方は、墳丘で観察されたものとはまったく異なっている。粘質土が主体であるが、墳丘にみられるような互層状ではなく、大部分が土塊状となっている。礫は特に東半部に混入が著しい。上記の壇盛土以前の132層は壇より南、すなわち第3調査区南トレーンチではまったく認められず、そこでは地山だけとなっていること、また地山の土質に似ていることから、礫まじりの地山を削って、それを盛土として用いた可能性が高い。また、谷地に近い傾斜面への地滑りを防止するためか、事前に横木を縦いてからその上に土を盛った形跡が壇南側の断面で確認された(図版56参照)。